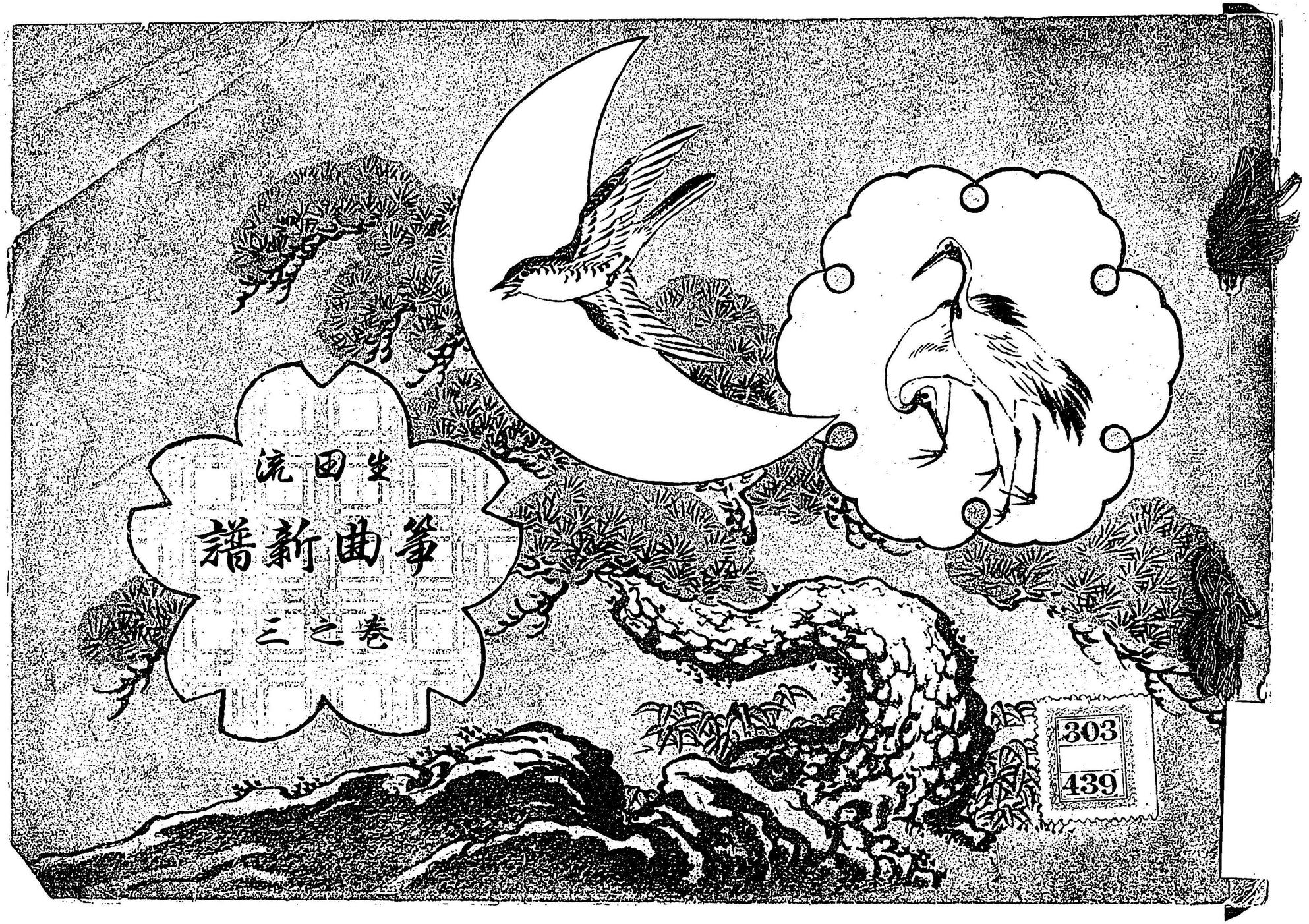

流田生
箏曲新譜
卷之三
303
439

新案特許第貳壹四〇四號

琴調子笛

ヴアイオリン三絃琵琶其他凡ての樂器に適用することを得琴の調子は何でも直ぐ合せることが出來る

（八橋の調子笛を用ゆるに及はず）

最も詳細なる使用法及び調子合せ方説明書添付あり

定價

特製　金貳圓

並製　金壹圓五拾錢

送料　金八錢

海外送料　金參拾錢

賣捌所

福岡市外馬出一一〇三

筝曲通信教授所

凡例

本書は西樂の譜記法を基礎として作譜したれば其始めに樂典一部の初歩と箏曲專用の手法箏を併せて記載する事とせり尚ほ箏曲固有の美質を失はざらんが爲め其歌詞等悉く在來の儘を記載せり思ふに旋律の如何と歌詞の善惡は人心特に幼者の思想に甚大なる反應を來すべき者なれば之が取捨に就ては充分の注意を望む者なり

彈奏の手は各專門師匠に依りて之を異にし彼の組歌及段物と稱する者を除きては殆んど一定する處あらず然れども特更に至難なる手を用ひて彈奏すべき必要を認めざれば本書は最も平易の手に依りて彈奏す可き曲譜を作れり

一本書の曲譜は從來專門師匠の彈奏しつゝある者と其拍數等に於て間々相違せる個處あり是れ樂典の原則に依りて多少改めたる處あればなり元來日本音樂には完全なる樂譜なき爲め時代と人物を異にするに從ひ各異なれる彈奏法を用ゆること多ければ今之が作譜をなすに當り往々前述の相違を生ずべきこと固より數の止むを得ざる處なり

一本書の參考と成したるは大村恕三郎先生中尾都山先生黑田米太郎先生田島羽堂先生其他諸大家の作譜せられたる各「ヴアイオリン」樂符高松梅窓先生著箏曲道しるべ入江好次郎先生著樂典教科書田村虎藏先生著近世樂典教科書多梅椎先生著樂典入門加藤庸三先生著日本音樂沿革史森田五郎先生著三味線箏尺八調律法田崎翠峰先生著箏曲譜抄此他箏曲大意抄撫奏樂譜集等なりとす

一本書は歌曲の全部悉く言葉記號を附記したる事恐か蛇足の觀あるも樂譜を解せざる人も之に依りて彈奏する事を得られ且つ自然の間樂典の一般を理解せしめんと勉めたるなり

一休止符の上部括弧内に言葉記號を記せるは三絃の言葉記號にして箏と交互に彈奏する者にて俗に「ヒキワケ」と稱す

一本書の編述に當り坂本五郎氏山本鏵太郎氏檜崎操市氏岸本高子諸氏の等の懇篤なる注意と援助を與へられたるは著者の深く感銘する處なり

著者誌

明治44.8.29 内交

目次

第壹編

(一)筑紫箏の由來

(二)箏曲流派の沿革

(三)樂器の構造

(イ)箏の絃

(ろ)琴柱

(は)爪

第貳編

(一)音樂の解

(二)樂譜

(三)音の三性質

(イ)高低記號

(ろ)長短記號

(甲)音符

(乙)休止符

(は)强弱記號

(に)雜記號

(四)運指法

(甲)右手法

(乙)左手法

(五)彈奏の姿勢

第參編

歌詞及曲譜

(一)松盡　一頁

(二)萬歲　四

(三)八千代獅子　一一

(四)雪　一六

(五)九段　二〇

(六)巖上の松　二七

(七)新雪月花　三三

(八)凱旋喇叭の曲　四〇

(九)四季の詠　四八

(十)夏の曲　六〇

(十一)秋の曲　七二

生田流箏曲新譜　卷三

井上胡蝶編

第壹編

（一）筑紫箏の由來

箏の起原を探究ぬれば、遠く漢土の古代に創まれるものにて、唐の伏羲氏は貳拾絃の琴を作り、黄帝之を改めて貳拾五絃の琴と成し、蒙恬之を破りて拾三絃の琴と成すと稱へて有ます

又箏曲大意抄にも「箏は固と貳拾五絃なりしを、半ばに分ちて拾參絃とす、拾貳ケ月に閏月を加ふる心となんと記すより考ふるも、現今用られて居る筑紫琴は、最初蒙括と云ふ人が作りたる拾三絃の琴より創りたるものと思はれます、而して其支那から我國に箏の輸入せしは何年前と云ふことは確かに明了ならざれども、欽明推古の時代に、百濟より日本に樂人を貢ぐと謂ふ事が、歴史に記るされるを見ても多分此の時代に輸入したるものかと思はれます、其後大凡三百年を經て、宇多天皇の御代に、石川色子と謂ふ命婦、筑紫に下り豊前國彦山に於て、箏の曲を異朝の人より學び、之を天皇に授け奉りました、斯くの如く筑紫箏は、其始め筑紫に於て彈き初めたるより、筑紫箏の名ありと言傳へて有ます

（二）箏曲流派の沿革

箏曲の流派も、其初めは如何なる曲を彈じて居たかは、詳かに知り難きも、治承年中に或る公卿か、筑紫に左遷されて其徒然を慰むる爲め、民間に傳はりて居たる箏の曲を翫び且つ自身にも歌曲を作りて之を彈じたるを、筑紫流の初めとも稱へます、時に筑後國善導寺に、聖光と云ふ高僧あり、某公卿より箏曲を學び彈奏に妙を得代々其寺に傳へましたので、仝地を箏曲の開原地と謂ひ傳へ、今は仝僧を筑紫流の祖先と仰ぎます、

善導寺は福岡縣筑後國三井郡善導寺村に在り、今を去る七百三拾年前、同寺に聖光と云へる高僧あり、百般の音樂に長じ殊に箏曲は、其最も好み玉ふ處なり、文政十年十一月二十二日、仁孝天皇より大紹正宗國師の號を給ひ、以來鎮西本山善導寺開山大紹正宗國師と尊

稱す、嘉禎四年閏二月二十九日入滅あり、現在の御貫主は其五十九代目に相當せらる、斯く聖光上人は、宗教上の偉人なると同時に箏曲の祖先なれば、上人入滅以來、同寺に於ては大法要毎に、箏曲を用ひたりしも今は全く中絶せり殊に故上人彈奏の曲譜は勿論、之に關する遺書等も無ければ、調査すべき方法も無し、上人の實家は筑前國香月にして、今に其系統は連續し、上人幼少の時に着け玉ひし振袖等は殘存れるも、箏曲に關しては又全く遺書等の據るべきもの無く、甚だ惜むべきの極なりとす、

現代御貫主又明德なり故聖光上人の遺志を鑑み、之が再興に就きて種々考慮有りと傳承す

其後大永天文の頃に賢順と云へる僧、善導寺に在りて箏曲を學び彈奏に妙を得たれば、筑紫流中興の祖と仰がれました、當時肥前國慶岩寺の僧玄恕、又は善導寺の僧法水など云へる人は、此の賢順より箏曲を學びたる者で有ます

其頃武藏國に山住勾當と云へる三味線の名人有り、或時筑紫に下り玄恕に從ひて箏曲を學び筑紫流の奥儀を究めました、勾當思ふに、筑紫流は其調べ余り高尚にして一般の人には解し難ければ、之を改めて汎く世間に流布させんものと、自ら組歌前後十五を作り、箏曲の手に載せて彈奏せしもの豫期の如く世人の者好に適ひ大に流行する樣に成ました、山住勾當は、其後檢校となり八橋と改め其流名も八橋と稱へます。

其後寛永年間に生田檢校と云へる人有り、是又箏曲の名人にて、自ら一派を開て生田流と稱へ、盛に時世を風靡かせました

是より後、寛政年中に、山田檢校と云ふ人有り、是も箏曲の名人にて山田流と云ふを創め、又盛に流行致しました、要之、山田流は生田流より生で、生田流は八橋流より出で八橋流は筑紫流より出でたる流派で有ます、而して現今最も流行するは、生田流山田流の貳つで有ます

(三) 樂器の構造

箏は桐の厚き板を彫り、底に淺き桐板を張りて造る、(杉其他の木材にて造れる物有るも其音響桐製の物に及ばず)其長き六尺四寸、巾は首にて八寸二分五厘、尾にて七寸八分八厘、柱の高さ三寸を法式となすと云へるも、現今にては本間と稱するものにて長六尺あり、間詰と

稱するものにて五尺より五尺八寸迄の物有り、外に「あやめ形」と稱へて四尺のものもあり、柱は多く一寸七八分の高さに造りて有る、箏の余り短かき物は其音響の惡きのみでなく、三絃尺八、「ヴアイオリン」などと合奏の場合に、調子を合せるに困難の事が有ます、併し五尺八寸以上の物なれば先つ差支へは有りません

風俗通に、琴の上圓さは天に象どり、下の平らかなるは地に象どり、中の空虛なるは六合に準し、絃の拾貳は拾貳ヶ月に配し、一の絃を加へて閏月に擬し、柱の高さ三寸は天地人に象り、長さ六尺は律數に應ずと、記載してあります

（い）箏の絃

箏の緒卽ち絃は、其數拾參筋の者にて其大さは何れも同一のものなり只其架け方と柱の据へ處で、一々音の異なる者で有ます、箏の絃を架くるは、琴の龍角と雲角との外側にある、拾三の小孔を通して、各一筋宛を架けるので、何れも同じ位の强さに張るもので有ます、最も四六九十斗の五つの絃は他の絃に比して、少し斗り强く張りて置けば、調子を合せるに都合善き者であります

箏の絃の名稱は、自身の座したる向ふより、手前の方に向つて、一二三四五六七八九十斗爲巾と稱して數へるものなり

絃の名稱は、昔は、仁、智、禮、義、信、文、武、斐、蘭、商、斗、爲、巾と稱へしも、或時代より、一二三四に改め、現今は只斗爲巾の三字のみ殘れりと（森田吾郎氏著三味線箏尺八調律法參照）

（ろ）琴柱

柱は全体を象牙にて造れる者あれど、多くは木にて造り、其頂上に口角と稱ふる象牙、又は他の角類が塡めて有ますが、其口角の上部の凹字形ある處に、絃を架するもので有ます、此の琴柱を、龍角の方に近づくるに從ひて、段々其音は高くなり、雲角の方に寄するに伴れて、其絃音は段々低くなる故に調子を合せるには、常に此琴柱を上下して、都合よく調律する者であります、

（は）爪

爪は象牙又は他の角類にて造り、其一方の端を爪袋と稱する皮、又は布にて造りたる小さき輪にはめて之を糊着し、右手の拇指中指示指の三指にはめて箏を彈ずる者で有ます、爪の形は、山田流のものは隋圓形にして先きの尖りたるを用ひ、生田流は稍長方形の者を用ひます

第二編

（一）音樂の解

事物の道理を辨まへぬ三歳の童兒より、音樂とは如何なる者なるやを知らぬ人にても、奏樂の面白き曲節を聞くときは、何となく精神に愉快を感ずるもので有ますが、是れ人は生れながらにして、或る程度までは、音の快不快を聞き分くる天性を有する証據で有ます、故に音樂とは人々が自然に備へて居る嗜好心に向つて、外界より適合させる處の音響であると云ふ事が出來ます、簡短に言へ時は「人々が聞きて愉快を感ずる連續せる音響である」とも云ふ事が出來ます

音樂には種々の類が存在すれども、之を大別して聲樂と器樂の二つに分ちて有ます、學校に用ふる唱歌より、淨瑠璃長唄等は何れも聲樂に属し、之に伴ふ三味線「オールガン」などは、凡て器樂に属する者であります、此書に記載する、琴の歌は聲樂に属し、琴の手は器樂でありますが此書に於ては、其器樂に属する彈奏法を主として詳説し、聲樂の方を客として記載することに致します

（二）樂譜

音樂は其聲樂と器樂とを問はず、凡て音響に属すれば、之を視る事の出來る樣に書顯はす者を樂譜と稱へます、樂譜には本譜と略譜の二つが有て此書の樂譜は歐州略譜の体に記載すれ共、其音名等は同一で有ません、此書には琴の絃の名、即ち一二三四五六七八九十斗爲巾の拾三字を用ひて、其儘音名と致しました、是れは琴を彈奏する上に於て、最も便利なる法で、且つ又歐州樂符に熟達せざる人々に、分り易き爲を考たのであります、然れども歐州樂譜に精通せる人は、此書に記載せる調子の對照表を見て歐州樂譜に書き換ゆる事が出來得る者であります、而して此書の樂譜は歐州樂譜の如く、凡て左方より右方に向つて進行するものにて、上部に記載せるは日本在來の言葉記なので、又其上部に歌詞を記したのであります

す、狀況なくして彈奏のみを續くる場合、所調手事の初には、合の字を記してあります

す、歌詞なくして彈奏のみを續くる場合、所謂手事の初には、合の字を記してあります

（三）音の三性質

音には總て、高低、長短、強弱の三つの性質を備へて居る者で、之を音の三性質と稱へます、

第一高低とは其音の高し低しを謂ふ者にて、之を調子又は律と稱へます、

第二長短とは其音の響く時間の長し短を謂ふものにて、之を拍子又は間と稱へます

第三強弱とは其響きの強し弱しを謂ふ者にて、之を音量とも稱へます

以上三つの性質を都合よく應用するのか箏曲の肝要であります

（い）高低記號（調子）

歐州畧譜にては、音の高低を書き顯はすに、亞剌比亞數字を用ひますが、日本にても雅樂律名と稱し、歐州音名と同じ樣の物が有ます、即ち壹越、斷金、平調、勝絶、下無、双調、鳧鐘、黃鐘、鸞鏡、盤涉、神仙、上無、の拾貳で、之を歐州音名（日本にて飜案せし）と對比べる時は、左の通りと成るものとす

歐州音名	ハ	ロ	イ	イ	ト	ト	ヘ	ヘ	ホ	ニ	ニ	ハ	ハ
雅樂律名	神仙	盤涉	鸞鏡	黃鐘	鳧鐘	双調	下無	勝絶	平調	斷金	一越	上無	神仙
			中				半			半		半	

然るに右に記せる日本雅樂の「一越」とか、歐州音名の「ハ」とかは、果して如何程の音程に相當するものか、實地に就いて聽知るには、雅樂律名は調子笛に依り、歐州音名は「オールガン」に依りて之を知ることが出來ます、即ち調子笛には其管口の外側に、一越より上無迄拾貳律音名の頭文字を記しありて、其管の口を吸ふ時は、一々異なりたる音を發するを以て、是れを其外側に記せる音名に、相當する音聲と心ふれば宜しいので有ます、又歐州音名は「オールガン」の其音名に相當する鍵盤を押せば、一々其音名に相當する音聲を發する故に、之に依りて其音程を聽覺へる事が出來ます、

（ア）箏の調律法及調子の種類

箏の調子を合せるには、前に述べたる「オールガン」、又は調子笛に依りて、調律する事が出來ます、其方法は他の樂器の内の或る音と、箏の絃の或るものと一々其音を同じ高さの音となす者であります

箏は歌曲の異なるにつれて、之を彈すべき調子にも種々の類が有る者で、往古は雅樂の調子を用いて居たるを、彼の八橋檢校之を改めて平調子を作り、其後種々の調子が出來、近世にては吉澤檢校（尾張國名護屋の人にして嘉永より明治初年に亘る）古今調子を作りました、現今新曲の流行につれ調子にも種々雜多の者がありますが、普く人の知れるものを擧ぐれば左の通りであります

平調子　半雲井調子　雲井調子　曙調子　（六上ゲト稱ス）　岩戸調子　古今調子

右の内平調子が、凡ての調子の基礎となれる者にて、之を好く了解すれば、其他の調子は最も安く調律する事が出來る者であります

（イ）「オールガン」にて平調子合せ方

「オールガン」の鍵盤の「ニ」に當る處を押して發する音と、箏の第貳絃の音とを、同し高さの音となる樣に琴柱を据へ、斯の如く漸々「オールガン」の「ホ」を第三絃に「ヘ」を第四絃に「イ」を第五絃及び第一絃に、「井」を第六絃に、「●ニ」を第七絃に、「●ホ」を第八絃に、「●ヘ」を第九絃に、「●イ」を第十絃に、「●井」を斗の絃に、「●●ニ」を爲の絃に、「●●ホ」を巾の絃に合せるのであります

（ウ）調子笛にて平調子合せ方（八橋の調子笛）

調子笛の壹の字を記したる管の口を吸ひて發する音と、箏の第二絃とを同音となし、斯の如く漸々に、平を第三絃に、勝を第四絃、黄を第一絃と第五絃に、鸞を第六絃に合すべし、而して第七絃は第二絃の裏、即ち上層の一越となし（第二絃を中指にて第七絃を拇指にて同時に彈じ二絃共に同律の音即ち和聲となすものであります（第八絃は第三絃の裏の平に、第九絃は第四絃の裏の勝に、第十絃は第五絃の裏の黄に、斗の絃は第六絃の裏の鸞に、爲の絃は第七絃の裏の一（上ノ層）に、巾の絃は第八の絃裏の平（上々層）に、順次合せるので有ます

（エ）半雲井調子合せ方

平調子の第八絃を半音下げて調子笛の斷金、又は「オールガン」の「●ニ」となし、第九絃を一音上げて調子笛の双調「オールガン」の「●ト」に合せるのであります

（オ）雲井調子合せ方

半雲井調子の第三絃を半音下げて調子笛の斷金、「オールガン」の「ニ」と合せ、第四絃を一音上げて、調子笛の双調、「オールガン」の「ト」に合せ巾の絃を半音下げて「オールガン」の「●●ニ」調子笛の斷金に合せるものであります

（カ）六上ゲ調子の合せ方

平調子の第六絃を半音上げて、調子笛の盤渉、「オールガン」の「ロ」と合せ、第七絃を一音下げて、調子笛の神仙、「オールガン」の「●ハ」と合せ、斗の絃を半音上げて、調子笛の盤渉（第六絃）の裏「オールガン」の「●ロ」と合せ、爲の絃を一音下げて、調子笛の神仙（第七絃の裏）「オールガン」の「●●ハ」と合せるのであります

（キ）岩戸調子合せ方

六上調子の第四絃を半音上げて調子笛の下無、「オールガン」の「ハ」と合せ、第五絃を一音下げて調子笛の双調「オールガン」の「ト」に合せ、第九絃を半音上げて調子笛の下無、（第九絃の裏）「オールガン」の「●ハ」と合せ、第十絃を一音下げて調子笛の双調（第五絃の裏）「オールガン」の「●ト」と合せるのであります

（ク）古今調子の合せ方

平調子の第貳絃を其裏、即ち上層音の第七の絃まで上げて同音となし、次に第四絃を一音上げて調子笛の双調「オールガン」の「ト」に合せ、第九絃を一音上げて第四絃の裏の双調「オールガン」の「●ト」に合せたるものであります

（ケ）他の諸調子

以上諸調子の外、現今流行する、新曲の調子は、前述の方法にて、其歌曲の初めに記るし、前に述べたる諸調子にて彈奏すべき者は、只調子の名のみを記す事に致します、尚ほ樂曲の中途にて調子を變更すべきものは、樂曲の上部に、「以下何調子或は何の絃何音上下」等と記す

事に致します

左圖は「オールガン」の音名と、日本雅樂音名とにて、箏の各調子の對照表を記したる者なり

調子對照表

オールガン	雅樂音名	平調子	半雲井調子	雲井調子	六上ケ調子	岩戸調子	今古調子
：ヘ：ホ	下勝平斷						
：ニ	一	巾爲	巾爲	巾爲	巾	巾	巾爲
：ハ㊐ロ	上神盤				爲斗	爲斗	
㊐イ	鸞黃	斗十	斗十	斗十	十		斗十
●ト	鳧双		九	九		十九	九
●ヘ●ホ	下勝平斷	九八			九八	八	八
●ニ	一	七	八七	八七			二七
●ハ	上神盤				七六	七六	
ロ	鸞	六	六	六			六
イ	黃	五一	五一	五一	五一	一	五一
ト	鳧双			四		五四	四
ヘ	下勝	四	四		四		
ホ	平斷	三	三	三	三	三	三
ニ	一		二	二	二	二	
ハ	上神						

上々層音　上層音　中層音

八

（ろ）長短記號

（甲）音符

音の長短を書顯はす記號を音符と稱へます、此書には箏の絃名卽ち、壹より拾までの數字と斗爲巾の三字に此の記號を附け加へて、何の絃は長く、何の絃は短かく彈ずると云ふ事を示します、此の音符には左の八種が有ます

全音符　貳分音符　四分音符　八分音符　拾六分音符　三拾貳分音符　附点音符

再附点音符

（ア）全音符（000）

通常手を四つ拍つ間を保つべき長さの音にして、一拍手の間を大凡一秒時間とするものなれば、四秒時間に渉る長さの音であります、而して琴の拾の絃が全音なる時には000の如く記

載し、凡て絃名の字の右側に、○三個を附加へて之を示します

（イ）貳分音符（○）

全音符の半分即ち貳拍手の間を保つべき長さの音であります、琴の五の絃が貳分音なる時には五○の如く、凡て絃名の字の右側に、○一個を加へて之を示します

（ウ）四分音符

貳分音符の半分、即ち一拍手の長さの音にして、此四分音の時には、凡て琴の絃名の字のみを記して、別に何の記号をも用ひません

（エ）八分音符（一）

四分音符の半分、即ち一つ手を拍つ間に、或る絃を貳度彈すべき早さの音であります、今琴の壹の絃が八分音で有る時は 壹一 の如く、凡て琴の絃名の字の下に、一を附けて之を示します

（オ）拾六分音符（二）

八分音符の半分、即ち一拍手の間に四度彈すべき早さの音であります、今琴の貳の絃が拾六分音で有る時は 貳二 の如く、凡て絃名の字の下に二を附けて之を示します

（カ）三拾貳分音符（三）

拾六分音符の半分、即ち一拍手の間に八度彈すべき早さの音にして、琴の三の絃が三拾二分音なれば 參三 の如く、凡て絃名の字の下部に三を附して之を示します

（キ）附点音符（●）

以上六種の音符の何れかに附け加へて、其功用を顯はすものにて、此の附点音符を附けたる音符は、其固有の音長の半分丈け更に延長すべき者であります、故に全音符に之を附記すれば、全音と全音の半分即ち貳分音とを合計したる音長となり、四分音符に附記すれば四分音と四分音の半分即ち八分音とを合計したる音長となるものであります、附点音符の記載法は凡て、絃名の字の右側に●を附して之を示します、即ち十●等の如し

（ク）再附點音符（●●）

附點音符に更に又一點を附け加へたるものにして、附點音の外更に、附點音符の半分丈け余分に其音を延長すべきものでありやす、故に全音符に再附點音符を附記すれば、全音符と貳分音符と四分音符とを合計したる音長となるものであります、此記入方法は凡て絃名の字の右側に●●を附記して之を示します、即ち五●●等の如し

樂譜中 五四一又は十一九一等の如く記せるは、五一四一十一九一の續し たるものにて、其意義に異なる處はありません、

(乙) 休止符

樂曲彈奏の中、或る場所に於て、奏樂を休むべき事がありまして、此休むべき時間の長短を顯はす者を休止符と稱へます、日本在來の音樂にては「ソレ」(ヨイ) などの言葉を用いて之を表はして居ましたが、是れは甚だ不完全にして、其長短を詳かに知る事は出來ません、故に斯に記るせる休止符は、音符と同じく精細に了解すべき必要があります

休止符の記載法は凡て音符の間に挿入して之を記す者であります

休止符は音符と同じく其種類も左の八種ありて、休止の時間も各音符と全時間休止すべき者であります

全休止符　貳分休止符　四分休止符　八分休止符　拾六分休止符　卅貳分休止符

附點休止符　再附點休止符

(ア) 全休止符 (𝄻)

四拍手即ち大凡四秒時間に渉る長さの間、休止すべきものであります

(イ) 貳分休止符 (𝄼)

全休止符の貳分の一、即ち貳拍手の間休止すべき者であります

(ウ) 四分休止符 (𝄽)

一拍手の間休止すべきもので、俗に「ソレ」と云ふ休止に相當する者であります

(エ) 八分休止符 (𝄾)

四分休止符の貳分の一、即半拍手の間休止すべき者にて、俗に「ヨイ」と云ふ休止に相當す

る者であります

（オ）拾六分休止符（ノ）

八分休止符の貳分の一の間休止すべきものにて、俗にハッと云へる短かき休止であります

（カ）三拾貳分休止符（ノ）

拾六分休止符の貳分ノ一の間休止すべきものにて、最も短かき休止であります

（キ）附点休止符（●）

以上六種の休止符の何れかに附記して其効力を顯はす者にて、附點音符の例と全じく之を附したる休止符は、何れも其固有の休止符の貳分の一丈け、更に長く休止すべき者であります

（ク）再附点休止符（●●）

附點休止符に更に一點を加へたるものにて、之を附したる休止符は、其固有の休止符より更に七割五分の間、休止すべき者であります

右八種の休止符は、此樂譜に於ては、器樂即ち彈奏上にのみ用ひ、聲樂即ち箏歌の方には用ひませぬ、箏歌の方には、歌詞の文字の次に横線を用ひ、或絃より或絃までを彈ずる間其聲を引延べて歌ふべき者たることを顯はしてあります又休止符の上部に歌詞あるは、凡て其記載する休止の時間と同じ長さに、歌詞の文字を歌べき者であります

（は）強弱記號

音の強弱を表はすには曲譜を何れも均一なる拍子數の小部分に區劃して、其小區分中の第何位目にある音符は強聲にして、第何位目にある音符は弱聲なりと云ふ事を示します、小節は單縱線｜を以て、曲譜の上部より下部まで貫きたる者にて、此一小節の中にある音符は、何れの小節に於ても、之れを合計すれば仝一の拍數となるものであります、最も音符の種類は一定する必用なくして、休止符は拍數の内に加へる者であります、

右各小節の中にて、強聲と弱聲に當る音符を明示する者を拍子と云ひます、此拍子にも種々あれども、箏曲に用ゆるものは、重に四拍子なれば、之に就きて左に説明することに致しま

す、

四拍子に四分の四拍子と八分の四拍子の貳種があります

（ア）四分の四拍子

四分の四拍子には、一節中に四分音符四個、若くは合計して四分音符四個に相當する拍數の音符があります

（イ）八分の四拍子

八分の四拍子には、一小節中に八分音符四個、又は合計上八分音符四個に相當する拍數の音符があります

右四分の四拍子及び八分の四拍子に於ては、第一位にある音符は強聲にして、第三位にある音符は中強の者であります、又第貳位第四位の音符は何れも弱聲であります、

斯の如く一小節中の音符、皆同一の拍數で有て、規則正しく強聲に始まり弱聲に終る者を正格小節と云ひ、樂曲最終の小節中の一部分を割きて、樂曲の始めに移したるもの、即ち弱聲に始まり強聲に終る者を、變格小節と名つけますが、箏曲には之を用いたる處至て少き者であります

（に）雜記号

以上說き來れる音の高低長短強弱に關する諸記號の外之に關して特別の記號あり、特に箏曲に於ては之を能く心得べき必要があります

（ア）延長記號（𝄐）

或る音符又は休止符を、其一定の長さの貳分の一以上、貳倍迄を、隨意に延長することを得る記號載にして、樂曲の終りに用いること多し、假令へは箏と三絃との合奏に於ける樂最終の音は、双方氣息を相圖りて、最も緩漫に合奏し終るが如き場合に用います

（イ）速度記号

樂曲進行の速度を示す記號にして、或る樂曲の一部分を、特に長く或は短かく、彈奏すべき記號で有て、樂譜の上部に左の通りに記して之を示します

き記號で有て、樂譜の上部に左の通りに記して之を示します

最モ緩ニ　緩徐ニ　漸々早ク　急速ニ　漸々緩徐ニ

（ウ）特別强弱記號

樂曲中の或る音符を、特に强く或は弱く、彈奏すべき記號にして、强聲の時には音符の上部に（∧）を附し、弱聲の時には（∨）を附して之を示します、此弱聲の彈奏法は、俗に横爪と稱して、多く拇指の爪角にて特に弱く彈奏するものであります

（エ）濁音法（タ）

樂曲中或る音符を濁音となすものにて、其彈奏法は、左手示指の指頭を、其彈すべき絃に當れる琴柱より右側の絃下に挿入れ示指の爪の上面を少く絃に觸つゝ、右手にて彈奏すべき者て有て、音符の右側に「タ」の字を附して之を表はします

（オ）段落及止終記号

樂曲の段落を示すには‖を用い終結を示すには|||を用ゐます

（四）運指法

奏樂上最も巧妙なる熟練を要し、一の技術に屬すべき者であります、箏曲大意抄には、右手拾七法左手八法と定めありて、此内には重復に渉るもの、又は變更記號に屬すべき者なと有りて、規則整然たらざるも、箏曲を學ぶ人は、此手法の名稱を用ゆる人多ければ、此書は之を補拾して用ふる事に致しました

（甲）右手法

右手拇指を自身の方に向け、示指以下小指までを第一絃の方に置き、小指は輕く龍角に觸れ、他の指は正しく絃上に置きて、彈奏を始むるものにて、其彈奏すべき絃の位置は、龍角より大凡一寸斗りを隔たりたる處であります

（ア）拇指

彈奏中最も多く使用する指にて、右手法中排爪を徐きては、巾の方より第一絃の方に向つて彈すべきものにて、曲譜中此指を用ふる時は、只音符のみを記して、別に何の記號をも用ゐません

（イ）示指（一）

右手法中連の手法を除きては、多く第一絃の方より巾の方に向つて彈すべき者であります、此指を使用すべき場合は、音符の上部に一を附記します、即ち一五 又は一六 等の如し

（ウ）中指（||）

右手法中連の手法を除きては、多く第一絃の方より巾の方に向つて彈すべき者にして、此指を使用すべき場合は、音符の上部に||を附記して之を示します、

以上拇指示指中指の三個は右手法とすべきもので無く、以下列記する者は右手法に属すへき者であります、

（エ）合せ爪（合）

拇指と示指、又は中指とにて、甲乙貳絃を同時に彈すべき者にして、假令へば五の絃を中指にて十の絃を拇指にて一時に彈すべき時には、||五 合十 の如く記し六の絃を示指にて斗の絃を拇指にて一時に彈すべき時は 一六 合斗 の如く之を記します

（オ）搔き手（9）

中指に示指を添へて第一絃と第二絃とを、巾の方に向つて「シャーン」と搔くべきものであります、時として他の絃を搔べき事あるにつき、此場合は其搔くべき絃名をりの上部に附記します

（カ）連一名裏連（ﾚ）

中指示指は爪の裏にて、拇指は爪の表にて三指同時に巾の方より第一絃の方に向つて撫するものにて言葉記號には「サアーラリン」と記してあります而して其中途の絃にて止まるか、又は第一絃まで撫し終る時は、其最終の絃は凡て拇指のみにて彈ずべき者であります、故に|と記せる時は巾より第二絃までを三指同時に撫し、壹の絃を拇指のみにて撫す卦と記せる時は、巾の絃より斗の絃までを三時同時に撫し、拾の絃を拇指のみにて彈ずべき者で有ます、其他は此例に依ります

（キ）流し爪（レ）

拇指の爪角にて、巾の方より第一絃の方に向つて走らすものにて、言葉記號には「カーラリ

拇指の爪角にて、巾の方より第一絃の方に向つて走らすものにて、言葉記號には「カーラリン」と記して有ます、其中途にて止まるべき時、又は第一絃まで撫し終るべき時は、連と同一の記號法にて、ㄴ又はㄴと記して之を示します、而して最初の貳絃即ち巾爲の絃は强音に、中途は弱音に、終りの貳絃は强音に彈ずべき者で有ます

（ク）輪連（ワ）

中指の爪の右脇にて第一絃を左方に向つて、其形狀恰も輪を畫く如くに、「シニウ」と拂ひ撫する者で有ります、第一絃の外に他の絃を撫すべき時は、搔手と同樣の記號法を用ゐます

（ケ）引連（『）

中指に示指を添へ、第一絃より巾の絃まで引き終るものにして、最初の貳絃を强音に、中途は弱音に、最終の貳絃は强音に彈する者で有ます、而して其中途にて止まるべき時、又は巾まで引き終る時は、連と同樣記號を用ひます、即ち卅の時は巾の絃迄卅の時は十の絃にて止まり、其止まるべき者は中指のみて彈すべき者で有ます、

（コ）半引連（『）

引連と同樣の彈法なれども、最初中途の絃即ち第五第六の絃より初め、巾の絃にて終るべきもので有ます、其中途にて止まるべき時、又は巾の絃まで引終るべき時等は引連と同樣即ち卅又は卅の如く之を記します、

（サ）引捨（『）

最初引連の如く、中指示指にて第一絃の方より引き、中途より中指を除き示指のみにて、巾の絃まで引き終るものでわります、其中途にて止まるべき時等は、凡て引連の如く卅又は卅の記號を用ひます

（シ）割爪（〃）

最初示指にて或る貳絃を搔き、次に中指にて次の貳絃（第一絃の方に當る貳絃なり）を搔き、終りに拇指にて或る一絃を彈ずるものにて、示指及中指にて搔くべき絃は、拇指にて彈すべき絃より、中間に三四絃を隔てゝ、第一絃の方に當る絃を搔くべき者で有ります、言葉記號

には「シャ〳〵」と記入す

（ス）波反（969）

最初中指示指にて第一貳絃を搔き、次に巾爲の絃を中指示指の爪裏にて、左方に向つて撫し、終りに又第一貳絃を初めの如く搔く者であります、而して第一回目を表と云ひ、第二回目を裏と云ひ、第三回目を表と云ふ、時として第貳回目の裏に初まり、第三回目の表の両度にて終る事あり、

（セ）搢爪一名裏搢（ノ丿）

中指の爪と、其指頭との間に、或る一絃（第四絃の場合多し）を挾み、最初左方に向つて「ズー」と擦り、次に右方に向つて「ズー」と擦るべきもので、記號ノは左方に丿は右方に即ち矢の方位に向つて擦るべきものであります、而して第四絃の外に他の絃を擦るべき時には、記號の下部に其絃名を記します

（ソ）排爪一名裏爪（ス）

拇指の爪の裏角にて、或る絃を向ふの下より、手前の方に向つて「リン」と排ふものであります、時として、中指にて排ふこと有り、此場合は中指の爪絃を下に入れ、上方に向つて、「リン」とはねる者であります、右兩樣共音符の上部に「ス」を附記して之れを示します

（タ）押合セ爪（五×六）

甲乙貳絃の第一絃の方に當る絃を押しつゝ其押したる手前の絃と同時に「ツレン」と彈奏するものであります、其押すべき程度は、手前の押さゞる絃と同音になる樣に押すべきものであります、其記號は別に之を用ゐず、其彈すべき絃名を重ねて記るす事と致します、「五×六」は五の絃を押しつゝ六の絃と同時に彈すべき場合を示したのであります

（チ）散爪（ⅢⅢ）

中指の爪の右脇にて第一絃を「シュウ」と擦るものにて、輪連に似たり、然れども輪連は其手法、恰も輪の廻るが如く、第一絃の上右側一尺位ひの處より、半月形を書きて、左方に向つて第一絃を擦り、散し爪は第一絃の上右側二三寸の處より始むる者であります、而して他の

中指の爪の右脇に第一絃を押さえ上り、輪連の例なり、然れども輪連の基本法、恰も輪の廻るが如く、第一絃の上右側一尺位ひの處より、半月形を書きて、左方に向つて

第一絃を擦り、散し爪は第一絃の上右側二三寸の處より始ひる者であります、而して他の絃を擦るべき時は、掻手と同樣の記号法を用ゐます

(ツ) 拘爪

拘爪とは俗に「カラカラテン」を稱するものにて、最初爲る一絃の上に拇指を置き、其絃より五本向ふの絃に示指を掛け、手前の方に向つて貳つの絃を彈き、次に又拇指より六本向ふの絃に中指を掛けて、手前の方に向つて貳つの絃を彈ヒ、終りに拇指をかけたる絃を彈すべき者であります而して其拇指にて彈する絃の名に依りて、九拘十拘等其名を異にします、今九拘なれば示指にて五六を彈じ、次に中指にて四五を彈じ、終りに拇指にて九の絃を彈する者にて此の樂譜には別に異なりたる符号を用ひません、而して此の拘爪は、四分音符五個にて彈する者であります

(テ) 早拘爪

拘爪の音符の早き者にて、通常四分音符三個にて彈ずる者か多くあります、記號は拘爪と同じく別に異なりたる符號を用ゐません

(ト) 半拘爪

半拘爪の中に、向半短半皆半等の種類がありますが、此樂譜にて彈ずるには、中指示指拇指にて彈奏する符號を記憶すれば、指奏上別に不便を感する事はありません、

以上合ヒ爪より半拘爪に至る迄を右手十七法と定めてあります、

右十七の手法の記號には、凡て音符の記號を附記して、其長短を表はします

(乙) 左手法

左手は平常琴柱の右方絃上に安置し、以下に示す記號に從ひ、運指すべき者でありまして此左手法は、重に變更記號に属すべき者にて、右手にて彈奏する絃音に、高低其他の變化をなさしむべき手法であります

(ア) 掩 (×××) 拾

疏も絃を彈じたる後に、其余音を押し高むべき者にして、其半音程を高くすべき時は×、一

音程高くすべき時は××の記號を、絃名の右側に記るします、而して此押したる手は暫らく押止めめ、其高めたる余音を持續すべき必用があります、指は重もに示指と中指を併用します、前の記号は拾の絃に就て示したる者にて以下此例を用います

（イ）押（拾×拾××）

或る絃を初めより押して、彈すべきものにて、半音程高くする音の押には×、一音程高くすべき絃の押には××を、其音符の下部に附記します、通常示指中指を併用するも、貳絃に跨かりて押すへき時、假令へば斗九又は十八又は七八等を貳絃共押すべき場合（俗にかけ押と稱す）には、巾の方に當る絃を拇指にて押し、次の絃を示指中指にて押すへき者であります

（ウ）突（ツ）

或る絃を彈じたる後、急に其絃を中指の頭にて突き、一時其余音を高上せしむる法であります（掩は其余音を押止めめ突は突たる手を急に放つの別あり）記号は「ッ」を音符の右側下に附記します

（エ）臑（ユ）

或る絃を彈じたる後、其余音を半音程低下せしむる法にして、左手拇指中指にて其絃をつまみ、右方に向つて引きゆるめるものであります、記號音は符の右側下に「ュ」を附記します

（オ）重押（×ッ拾）

或る絃を彈じたる后ち、押して一旦放ち、又急に押し止めまる音であります

（カ）搖吟（ヨ拾）

或絃を彈じたる後、其余音を搖動する者にて、突を數固重ね、終りの絃を押止めむる法であります

（キ）押放（ホ拾）

或絃を押して彈じたる後、急に放つものであります

（ク）左手彈奏（左）

左手示指の指頭にて、或る絃を彈ずべき者にて、右手と交互に彈ずること多し、符號は絃名の上部に「左」の字を記して之を示します

從來左手八法と稱するは、前記左手彈奏を除き押響なる一手法を加へて、八法となしあれど、此書には之を除き、左手彈を法加へて八法と致します

(五) 彈奏の姿勢

箏を彈ずるには、少しく箏の尾、即ち左方に向ひて端座し、行儀正しかるべきものであります、唱歌中首を振る事等、見苦しき体度をなすべからす、且つ左手は常に左方絃上に安置し、左手法を要すべき時の外、動かすべき者でありません

初進の人の樂譜に依りて箏曲を學ぶには、毎日三四十分間宛樂曲の少部分を反覆練習するを宜しとし、余り長時間に亘るか、又は一時に曲譜の多くを試みるは益なき者であります、又初進の人は絃を取違へて彈奏する事多きに就き、龍角の右側に紙片を貼付け、是に絃の名即ち一より十迄と斗爲巾の三字を記し置けば、樂譜を見つゝ彈奏することを得、斯くして漸々熟練する時は、絃を見すして右手は自然に我欲する絃上に至るべき者であります

第三編

(甲) 歌詞

松盡し

唄ひはやせや大黒、一本目には生の松、二本めには庭の松、三本目にはさがり松、四本目には志賀の松、五本目にはごよの松、六つ昔は高砂の、尾上の松やそねの松、七本目には姫小松、八本めは濱の松、九つ小松を植へならべ、十をでとよくの伊勢の松、此松は有情の松にて、なさけ有馬の松が枝や、くどけばなびく、相生の松、又いついつの約束は、日をまつ時をまつ暮をまつ、連理の松に契りをこめて、福大黒をみさいな

萬歳

德者に、御萬歳と御代も榮ゑまします、愛嬌有けゐ新玉の、年立返る朝より、水も若やぎ木の芽もさし榮ゑけるは、誠に日出度候ひける　京の司は禁白殿、れり位の帝、日の本内裏、王は十善、神は九善神やすやすら安が、此許にて、正月三日、寅の一天に、生ます若恵比須、商ひ神と祝はれ給ひて、商繁昌ならせ給ふは、誠に日出度ふ候ひける　町師め野師め京の町の野師め、賣たる物は何々、大鯛小鯛の大魚、あわび螺螺、蛤と蛤こ、蛤々めさいなと、賣たる者は野師め、夫を打捨てそばの店見たれば、金襴錦子、緋綾紗綿綸子緋紗綸子綸珍、種々結樓飾り立てて候ひしが、町々の小娘やれ年の寄たる婦たちまで、賣買有機、事にも治まる御代なり時なり、惠方の御殿にすつしり〳〵賣も治まる、門には門松背門には背門松、そつちもこつちも、幾年のれ脱ひと、御代ぞ日出度き、

八千代獅子

いつまでも變らぬ御代にあいたけの、代々は幾千代八千代ふる　雪ぞかかれる松の二葉に、雪ぞかゝる松の一葉に

雪

花も雪もはらへば消き跡かな、ほんに昔の昔の事よ、我が待人の我を待ちけん　鴛鴦の雄鳥に物思ひ羽の、凍ん衾に鳴音はさぞな、さなきだに、心も遠き夜半の鐘、聞も淋しき一人寝の、枕に響く霰の音も、若やといつそせきかねて、落る涙のつららより、つらき命の惜からねども、繼しき人の罪ふかく、思はん事のかなしさに、捨たうきよ今すてた浮世の山かづら

巖上の松

君が代の、ためしにのみは、ひかれても、根ざし固かね岩の上の、松はいはでも千代八千代、變りぬ色に榮ふらん　事其松が枝のふり見れば、迎へし年の名におへる、龍の姿に似たるかな　事あら面白の松が枝や、あら面白の松が枝や

新雪月花

前陣駒とめて合柳打ちはらふ影もなし合佐野のわたりの雪の夕嵐合翠葉吹く風にまかせて住むいほは、月ぞ誠にもれあかしける　事白敷の大宮人はいとさあれや合梅かざして今日もくらしつ合柳かざして今日もくらしつ

凱旋喇叭の曲

柳櫻をこきまぜし、都の春の朝風に吹きひるがへる日の丸の、けふ凱旋の我軍を歡び迎ふ國民の、見渡す遙かかなたより、砲兵騎兵のしゆくしゆくと、喇叭の聲ぞいさましき手事勇む兵士も戰場に、ありし苦心はいくばくぞ、あられふる日も雨の夜も、氷の刃くろがねの、火玉とびくる其中を、何をかいとはん大君の、爲めと思へばいとゞなほ、喇叭の聲ぞいさましき、

四季の詠

梅の匂ひに柳もみびく春風に、桃の彌生の花見て戻る、ゆらりゆらりと夕がすみ春の野がけに芹よもぎ、摘かけたる面白さ　合里の卯の花田の面の早苗色見ねて、繁る若葉の、かげとひ行けばまだき合初音山ほとゝぎす一聲に、花のなごりも忘られて、家土産に語らばや手事草葉色づき野菊も咲きて秋深み野邊の朝風露身にしみて、ちらりちらりと村時雨、よしやぬるとも紅葉バの、染かけたる面白さ　合野邊の通ひ路人目も草も冬がれて合落葉しぐるゝ木枯の風・峰の炭がや烟もさむし降る雪に野路も山路も白妙に見渡したる面白ろさ

夏の曲

前彈いそのかみ古き都の時鳥聲バかりこそ昔なりけれ　合夏山に戀しき人やいりにけん聲ムりたてゝなくほとゝぎす　手事はちすゝの濁にしまぬ心も　合何かは露を玉とあざむく　合夏と秋と行きかふ空の通路は　合かたへ涼しき風やふくらん

秋の曲

前彈きのふこそ早苗採りしがいつの間に、稻葉そよぎて秋風のふく　合久方の天の河原の渡し守、君渡りなゝ楫かくしてよ　合月見れゝ千々に物こそ悲しけれ我身一つの秋にはあらねど　合山里は秋こそことにわびしけれ　合鹿のなくねに目をさましつゝ　手事散らねどもかねてぞ　合しき紅葉ゝの、今を限りの色と見つれゝ　合秋風の吹上に立てる白菊は花があらぬか浪のよするか

松尽志　平調子

縫絵ニ

うたひはやせやだ——いこく　いっ—ぽんめ——に

九十手為|巾十手十|ソ九八七八|十九八七|七為手為|〇為

は　いたのま——つ　にほんめ—にはには　のまつ

巾ウ|巾巾巾為|巾為手十|九十手為|巾十手十|ソ九八七八|

さんぼんめ—には　さがりま——つ　志は

十九八七|七為手為|〇為巾ウ|巾巾巾為|巾為手十|九十

んめ　には志　はのまつ　ごはんめ—には

手為|巾十手十|ソ九八七八|十九八七|七為手為|〇為巾ウ|

ごよのま——つ　む—つむかしはたか—さごの

巾巾巾為|巾為手十|九十手為|巾十手十|ソ九八七八|手

をのへのま——つやそねのまつ　　ちちほんめ——

テン ツン チン チン チン ツン テン チン テン ツン テン チン ツン テン　コーロ リン トン トン テン ツン チーン

十 ㄣ× | 為 巾 為 ㄣ | 十 九 八 七 | 八 九 七 八 | ㄣ 十 九 八 七 | 七 為 ㄣ 為 | ○

（一拍手間に歌は）

にはひめこま——つはちほんめ—にはは—ま—のまつ

チン チン ジャン チン チン チン チン　コーロ リン テン　ツン テン ツン チン チン テン ツン テーン ツ テン ツン

為 巾 ㄣ | 巾× 巾 巾× 為 | 巾 為 ㄣ 十 ㄣ | 九× 十 ㄣ 為 | 巾 十 ㄣ 十 | ノ 九 八 七

つ　　おこのつおま—つを　うへおら——べ　と

テン　コーロ リン トン チン ツン テン チーン チン チン ジャン チン チン チン チン　コーロ リン テン　ツン

八 | ㄣ 十 九 八 七 | 為 ㄣ 十 為 | ○ 為 巾 ㄣ | 巾× 巾 巾× 為 | 巾 為 ㄣ 十 ㄣ | 九×

をでとよくのいせ—のまつ　　ふのま—つはうじやう

テン フン テン チン テン ツン テーン ツ テン ツン テン　コーロ リン トン チン ツン テン ツン チン　チン

十 ㄣ 為 | 巾 十 ㄣ 十 | ノ 九 八 七 八 | ㄣ 十 九 八 七 | 為 ㄣ 為 ㄣ | 十 ㄣ 巾×

—のまつ—にて　おさけありまのまつ—がえや

チン チン チン コーロ リン テン　ツン チン ツン チン チン テン ツン テーン ツ テン ツン テン　コーロ リン

為 | 巾× 為 巾 為 ㄣ | 十 ㄣ 九× 十 | ㄣ 為 巾 十 | ㄣ 十 九 八 | 七 八 ㄣ 十 九 | 八

くで—けばおびく　　あいおれの——まつ　　またmつ

チーン ツン テン チン ツン テン チ ツ ツン　チン チン チン チン コーロ リン テン　ツン テン ツン チン

為 ○ ㄣ | 十 為 ㄣ 十 | 為 ㄣ ㄣ ㄣ | 巾× 巾 巾× 為 巾 為 | ㄣ 十 ㄣ | 九× | 十 ㄣ 為

いつのやくそくは　　ひをまつとれまつくれをま

チン テン ツン テーン ツ トン ツン テン　コーロリン トン ケン ツン テン チーン　ツン チン ツン チン チン ツン

巾 | 十 斗 十 九 | 八 七 八 } | 十 九 八 七 為 | 斗 十 為 ○ | 斗 十 斗 為 | 為 斗

つ　れんりのまつに—ちだりをち—め—てふくだ

チン　テン ツン　テン ツン　テン ツン テン ツン　ツン テン　チン チン　ツン チン テン ツン　コ ロ リン　チーン

為 } | 八 七 八 九 | 十 九 八 七 | 六 七 巾 為 | 斗 為 十 九 | 十 九 八 } 巾 | ○

いこ—くをみ—され—な—

チン チン チン　ツン テン ツン チン　チン ツン　テーン　ツーン　ツーン

巾 巾 為 | 斗 十 九 十 | 斗 九 十 ○ | 九 ○ 五合十 ○ ‖

ま　と　や　つ
ツン　ツン　チン　チン
七　九　巾　八　為
ン　ン　ン　リン　チン
○

萬歳　平調子

漸々早ク

とくわ——かに——ごまん——ざ——れと　みよもさ——か——え

斗為十.九|八七八}|九×〇十九×|〇十ウ}|為手十九×|十.九八}ソレ

ま——ゑま——すあいたよう　あ——り——けるあらたまの

八.七|六七八〇|九×十ウ手|〇十七八六七|斗十九×十|斗九×十斗|

とゑたちか——へる　あゑたよ——り　み——づもわ

九×十ウ手|〇十七七|為中ウ中×|中中×為中為|手十}九×|十八}

か——や——ぢきのめもさ——ゑさ——かえけるは　まこと

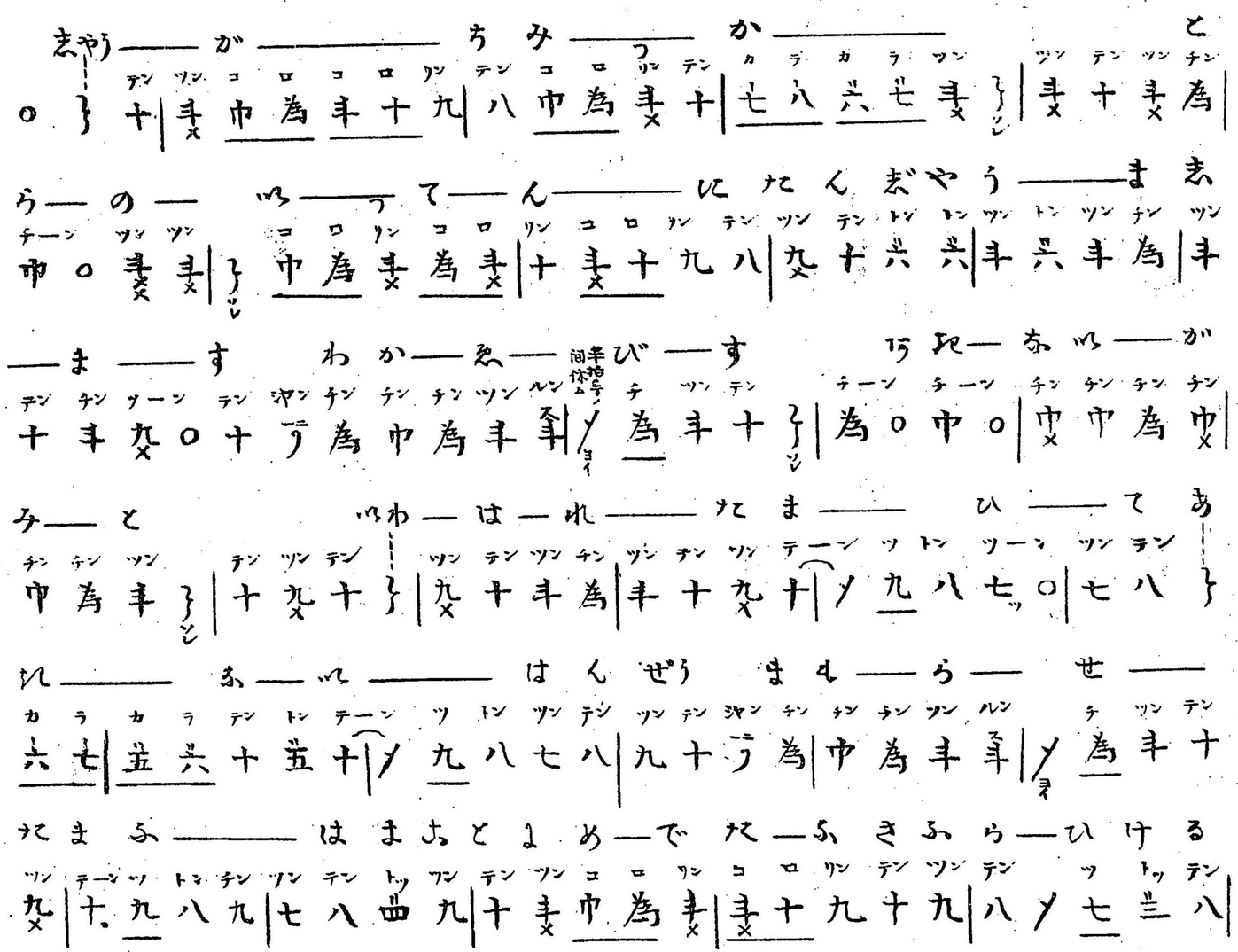
為手|十九八手為|手十}九×|九×十六手|為手十.九|八}ソレ　皿九|十

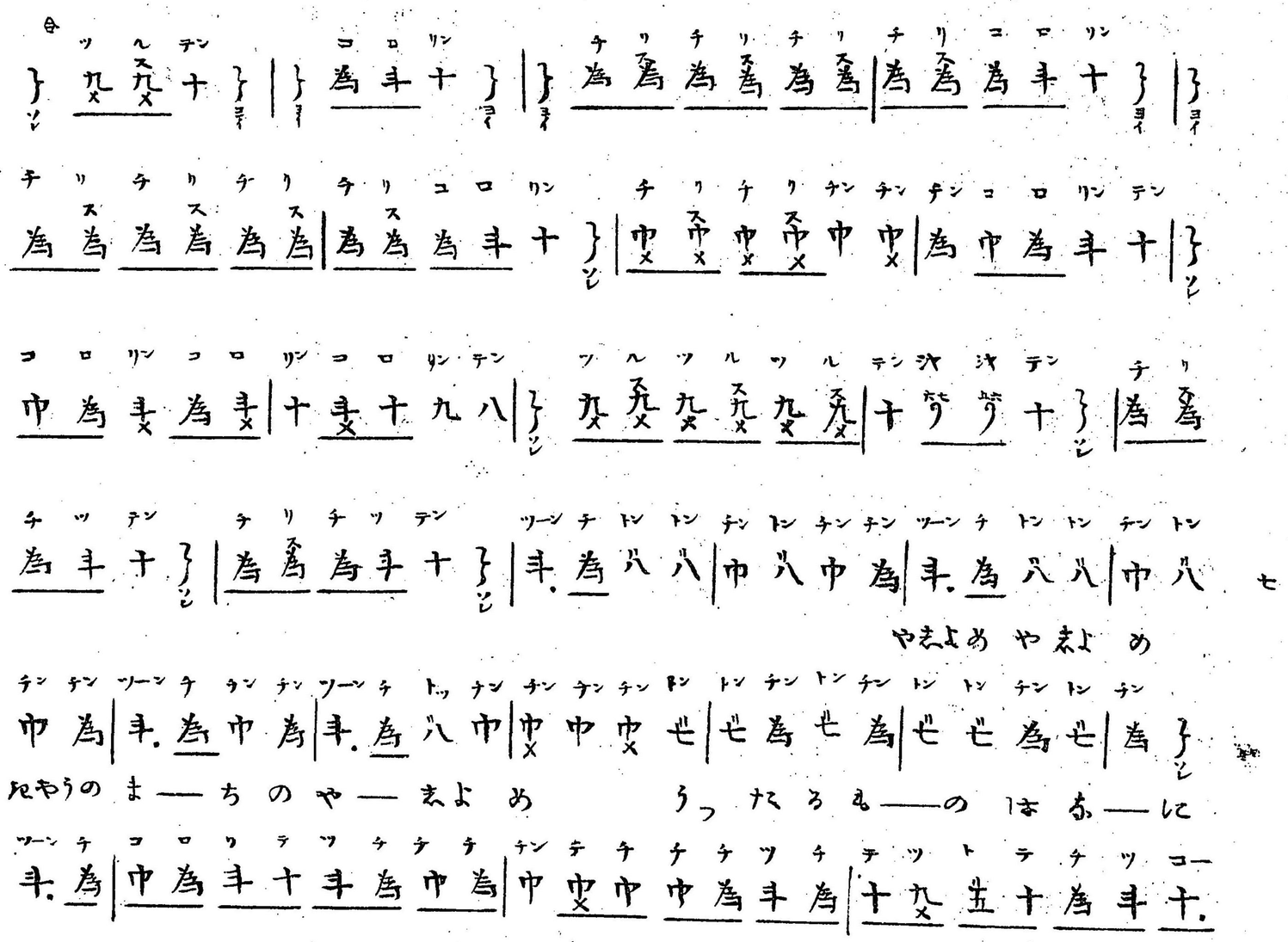
にめ——でたふさふら——ひける

手×中為手×|手×.十九十九|八ノ七兰八|}合中×中中×|為中為手}ヨイ|}ヨイ

四

ひやうのつかさは
かわんばくぐ——— のれりゐのみ——か—ぐ
ひのもと だ—れ—ぞわう はじう—ぜん
か—みは—くぜ—ん よ—ろ—
—づ やすやす うらや—すが こ—のもとにて


ぢやう——が——ちみ——か——と
ら—の—ゐ——て—ん——にたんぢやう——ま
—ま——す わか—ゑ—び—す ちち—ぶゐ——が
みと ゐわ—は—れ——たま—— ひ——てあ
れ—— ふ—れ—— はくぜう まも—ら— せ——
たまふ——はまふとよめ—で たふきふら—ひける



と　為　去　丰　が　巾　あ　十　る　八

セ

やえよめ　やえよめ

ぬやうのま——ちのや——えよめ　うったろも——のはゐ——に

少シク緩徐ニ

あに　おはだぬ　ちだれ——　ぶりのおはうをあわびさざ

ロ ツン　チン チン ツン チン ツン チン ツン チン ツン チン ツン チン ツン チン ツン チン ツン チン ツン チン ツン チン ツン

九 | 八 } 手 十 | 九 八 手 十 | 手 十 手 為 | 手 十 ㇇ 手 | 手 十 為 手 | 十 ㇇ 手

ソレ ×

ス　　はまぐりお　　はまぐりお　　はまぐり

チン チン ツン チン ツン チン ツン チン ツン チン ツン チン ツン チン ツン チン ツン チン ツン チン ツン チン ツン チン ツン

十 | メ 九 十 手 十 | 九 八 二 七 | 八 } 手 十 | 九 八 二 七 | 八 } 手 十 | 九 八

ソレ　　ソレ

は——ま——ぐり　はま——ぐり　めさいなとうったるも——のはや——

コ ロ コ ロ リン チン チン コ ロ リン コ ロ リン ツン チン トン ツン チン ツン チン コ ロ

巾 為 手 十 | 九 八 為 巾 為 | 手 為 手 十 丸 | 十 八 七 八 | 九 十 手 為 | 巾 為

—ちよ—め　そ—れをうちすてそばのたなみたればれん

リン コーロ リン ツン ㇇ ㇇ ツーン ㇇ ㇇ テーン ㇇ ツ ル チン ツン トン トン チン チン チン チン

八 手 十 丸 | 八 丸 ㇇ ㇇ | 丸 〇 ㇇ ㇇ | 十 〇 ㇇ 手 手 | 為 手 七 七 | 為 巾 巾 為 |

ら ん で ん す——　ひ　ざ や ひ ぢ り め ん

ツン チン チン チン トン チン コーロ リン ツン トン チン チン チン トン チン チン チン トン チン チン

手 為 巾 為 | 八 巾 } 十 丸 | 八 七 二 八 八 | 八 } 二 二 | 八 八 八 二 八 八 |

ソレ　　ソレ

ちゆすひ——ちゆ

チン チン

八 } 八 八 | 巾 巾 巾 八 巾 巾 | 巾 巾 為 巾 為 | 手 為 十 } 為 手 為 巾 | 為

ソレ

す 手 こ 手 こ 巾 × | } ま 手 | ロ 為

す　ま　じゆす　ゆちん　　ゐ—ろ—い—ろ——　けっ—

こう　かざりた—ててさふらひしが　まちま—ちの

こむすめ——やおと—ま　の　よっ—たるうばたちまで

うそかふあ—り—さま—げ—に—も——　お—さ—

まるみよりとれなり　ゑはうの　おくらにずっ—ま　りずっ—

—ま　り

さざ
ンテ
ン丰
ぐり
ンテン
九八
や—
コロ
中為
れん
チン　チン
中為
ンテ
八八
ゆま
ン　チン
中為

為 斗 為 ○ | 芬 芬 十 } } | 芬 芬 十 } } | 為 斗 十 斗 為 | 斗 十 九 ○ | 九

なく―か―ら――――――も おを まる

五 五 十 | } 巾 為 斗 十 | 斗 斗 十 ○ | 斗 ○ 巾 為 斗 十 | 九 八 十 斗 | 十 斗

かど にはかどまつせどよはせどまつそっ――ち

為 斗 | 七 八 六 七 斗 十 | 七 七 為 巾 | 工 巾 巾 為 | 斗 為 斗 十 | 為 巾 為 斗

も ちっ――ち も いく水―― の おれはひ――と

十 | 為 巾 為 斗 十 | 九 } 十 九 | 五 十 六 斗 | } 為 斗 為 | 十 九 八 七 | 八 }

みよ――で―― め――で――た――紀――

一〇

春 ○ | 工 ○ 巾 ○ | 巾 為 斗 為 | 十 ○ 交 ○ | 春 ○ } }

八千代獅子　平調子

緩徐ニ

ゆつ——ま——で——も——かはら——ぬ——み——よ

テーン ツン テン ジャーン コーロ リン テーン チン ツン トン テーン チ ツン ツン テーン ソ トーン

八 ○ 七× 八 | ㇇ ○ 八. 七 六 | 五 ○ 七 六× | 三 七. 九× 七× | 七 } } 八. 七 | 三 ○

ツレ

に——あゆ——た——け——の

コーロ リン テン ツン テーン チーン チーン ツン ルン チン ツン コ ロ リン テン ツーン テーン

八. 七 六 | 五 四 五 ○ | 巾 ○ 手× ○ | 手× 手× 巾 手× | } 手× 十 九 八 七× | ○ 八. 七

よよ——は——てく——ち——よ　やち——よ

トン テン ジャン ツ テン トン ジャーン トーン テーン ジャン ツン テーン ジャン チーン ラン

三 八 | 合五 ノ 七 八 五 | 合八 ○ } } | 三 ○ 八 ○ | ㇇ 七× 八 ○ | 合五 } | 九 ○ | 八

ヨイ　ソレ　ソレ

一

——ふ——る——

手事初段

ツン テ ツン トン トン テン ツ ジャン ツーン チ ツン ジャ ジャ コーロ リン チン ジャン ツーン ツン テン

七 ノ 十 九 | 三 三 八 ノ 七 | ㇇ 手. 角 手 | ㇇ ㇇ 十. 九 八 九 | ㇇ 七× ○ 七 | 八

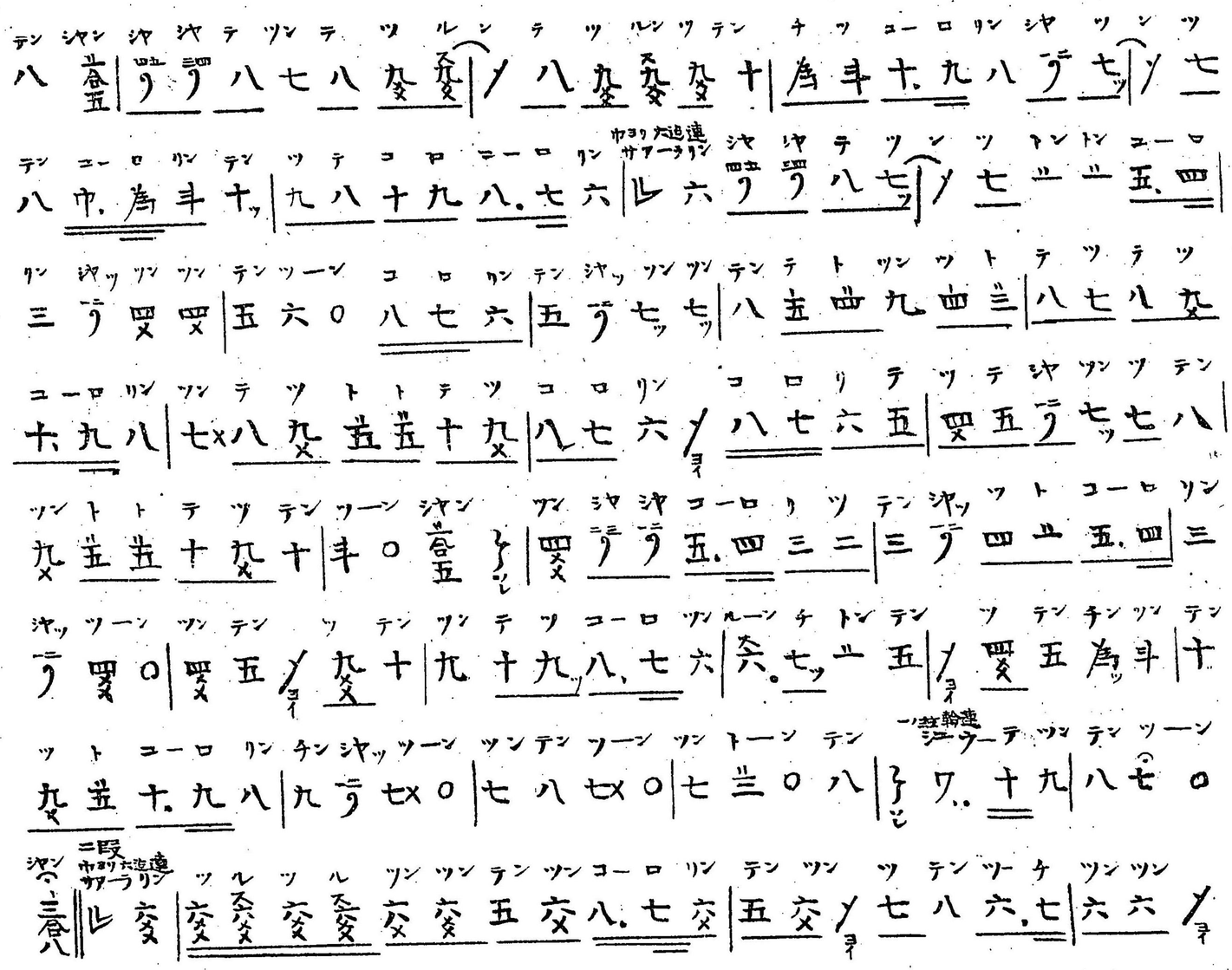
ヨイ　ヨイ

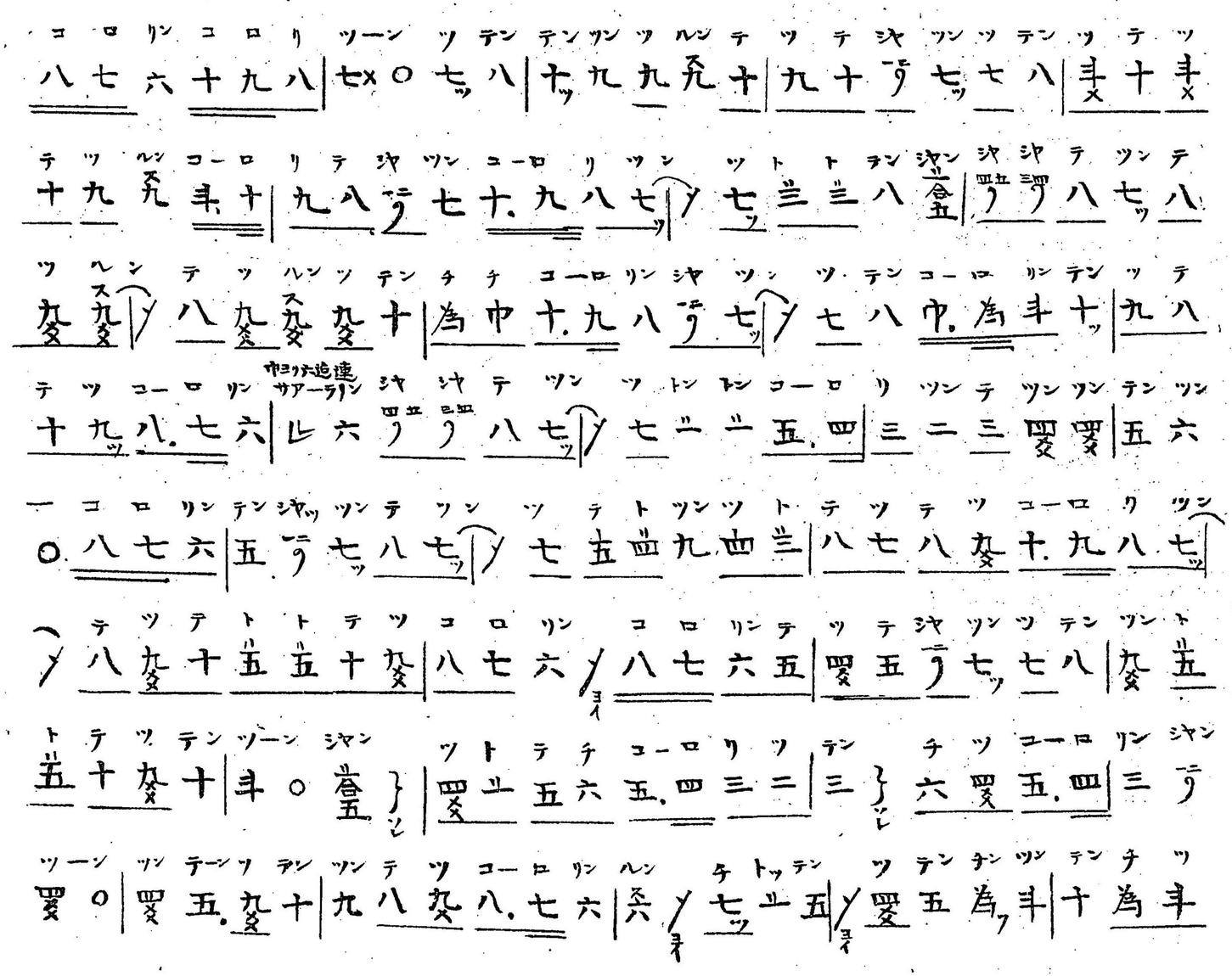
漸々早ク

ツーン ツン トーン テン テン ツン ツ ルン テ ツ テ ジャン コーロ リン ツン ツ ト ト

七× ○ 七 | 三 ○ 八 } ‖ 十 九 九 九 十 | 九 八 ㇇ 七 十. 九 八 七 | ノ 七 三 三

ソレ





一ノ拍輪連　三段

コーロ リン ツン シャッ ツーン ツン テン ツーン ツン トーン テン シューワー テ ツン テン ツーン シャン サーラ

十. 九 八 | 九 ㇇ 七x 〇 | 七 八 七x 〇 | 七 兰 〇 八 | ㇾ ワ.. 十 九 | 八 七 〇 𠆢八 ‖ ㇾ

リン ツ ルス ツ ルス ツン ツン テン ツン コ ニ リン テン ツン ツ テン ツーチ ツン ツン コ ロ

斗x | 斗x 斗x 斗x 斗x 斗x 斗x 十 斗x 巾 為 斗x | 十 斗x ㇾ 七 八 六. 七 | 六 六 ㇾ 八 七

リン コ ロ リン ツーン ツン テン テン ツン ツ ルン テ ツ テ シャ ツン ツ テン テ テ コ ロ ツ

六 十 九 八 | 七x 〇 七 八 | 十 九 九 九 八 | 九 十 ㇇ 七 七 八 | 斗x 十 斗x 十 九

ルン コーロ リ テ シャ ツン コーロ リ ツン ツ ト ト テン シャン シャ シャ テ ツン テ ツ ルシ

九 斗. 十 | 九 八 ㇇ 七 十. 九 八 七 | ㇾ 七 兰 兰 八 𠆢五 | 四五 ㇇ 四 ㇇ 八 七 八 九 九

ㇾ 八 九 九 九 十 | 為. 斗 十. 九 八 ㇇ 七 | ㇾ 七 八 巾. 為 斗 十 | 九 八 十 九

一四

中ヨヨ六返連　サーラリン

コーロ リン シャ シャ テ ツン ツ トン トン コーロ リ ツ テ ツン ツン テン ツーン

八. 七 六 | ㇾ 六 四 ㇇ 四 ㇇ 八 七 | ㇾ 七 ㇾ ㇾ 五. 四 | 三 二 ㇾ 三 四 四 | 五 六 〇

コ ロ リン テン シャッ ツン テ ツン ツ・テ ト ツン ツ ト テ ツ テ ツ コーロ ク ツン

八 七 六 | 五 ㇇ 七 八 七 | ㇾ 七 五 四 九 四 兰 | 八 七 八 九 十. 九 八 七 | ㇾ

テ ツ テ ト ト テ ツ コ ロ リン コ ロ リ テ ツ テ シャ ツン ツ テン ツン ト ト

八 九 十 五 五 十 九 | 八 七 六 ㇾ 八 七 六 五 | 四 五 ㇇ 七 七 八 | 九 五 五

三段

シャン 上合八 ‖ レ

コ 八　ロ 七

ロ 十　ツ 九

ツ 九メ　ルス 九メ

十 九

ツーン 六 ○

ツン 七 ノ

ト 五　ト 五

テ ツ テン ツーン シャン
十 九メ 十 | 十 ○ 上合五 } | チ ツ ト テン ツ テン コー ロ リン ツ テ シャッ ツーン ツン ト テン
六 四 上 五 四 三 | 五 四 三 四 五 ウ | 四 ○ 四 上 五 |

ツ テン テーン ツン コ ロ コー ロ ツン ルン テ トッ テン ツ ラン ツン テ ツ テン シャン
四 五 十メ ○ | 九 十 九 八 七 六 | 六 ノ 七 上 五 | ノ 四 五 九 八 七 | 八 上合五

申紀 ぞ か か れ る ま つ の

ノ ツ テン トン シャーン トーン テーン シャッ ツン テーン シャーン テーン テン ツーン
七 八 | 五 合八 ○ } | 三 ○ 八 ○ | ウ 七メ 八 ○ | 上合五 ○ } } | 七 ○ 七 交 | ○

ふ た ば る 申 紀 ぞ か か

コ ロ リン テーン フ トッ テン テ ツン テーン ユー ロ リーン ツン テン
七 六 五 五 交 | 三 七 ノ 九メ 交 | 七 ○ 十 九 | 八 ○ 四メ 十 | ノ 七 三 八 } | ユウ ワ

れ る ま 続後ニ つ の ふ た

ー コ ロ リン ツン シャーン テ テーン シャーン シャッ ケン コー ロ リン ツン テ テー
○ 八 七 六 } | } キ ウ 為 十 ○ } } | 合八 ○ ウ 為メ | 巾 為 キ キ | ノ 為 十

一五

ば に

ー ツーン ツーン シャーン
○ 九メ | ○ 合 ○ } ‖

雪　平調子

最モ緩徐ニ

ゑ　ゐ ―― も ―――― 伊紀 ― も ―――― は ― う ―

シャーン　ツーン　コーロ　リン　チ　テン　テン　ツン　シャーン　カ　ラ　カ　ラ　テン　チ　ツ　コーロ

三 ○ 七× ○ | 八.. 七 六 ノ 七 | 五 } 八 七× | 三 ○ 四 五 三 四 | 八 十 九 八.. 七 |

へ ― ば ―― 紀 ―― よ ―― き　たも ―――――― と ―

リーン　テン　ツン　テーン　テーン　ツーン　シャン　チーン　ツーン　テン　ツン　テン　ツン　チン　ツン

六 ○ 五 四 | 五 ○ } } | 五 ○ 四 ○ | 三 } 七 ○ | 六 ○ 五 四 | 五 六 七 六 |

か ― ゐ　　ほん ― に ―― む か ―― ゐ ―― の ―

コーロ　リン　ツーン　テン　ツン　シャーン　テン　ツン　シャン　ツーン　テ　コーロ　リン　テン　ツン

五.. 四 三 } | 九× ○ 十 九× | 三 ○ } } | 十 九× 三 } | 九. 十 十× 十 | 九 } | 八 七× |

一六.

む か ―――― ゐ ― の ―　　あ と ― よ わ が ま つ ひ と の ――

トーン　ツン　テ　コーロ　リン　テン　シャッ　ツン　コーロ　リン　ツン　テン　チン　テン　ツ　テ　ツン

六 ○ 十 ノ 為 | 巾.. 為 十 十 | 九 九× 十.. 九 | 八 } 七 八 | } } 十× 十 | 九 八 七

われ　を ―― まちーけ ―― ん

テン　チ　ラ　ツン　コーロ　リン　合　ツン　ツン　シャッ　ツン　コーロ　リン　テン　ツン　テン　チン　シャ

八 九 七 | 六 } 五. 四 三 | } 六 六 } | } } 九 七× | 八. 七 六 五 九× | 十 十 九

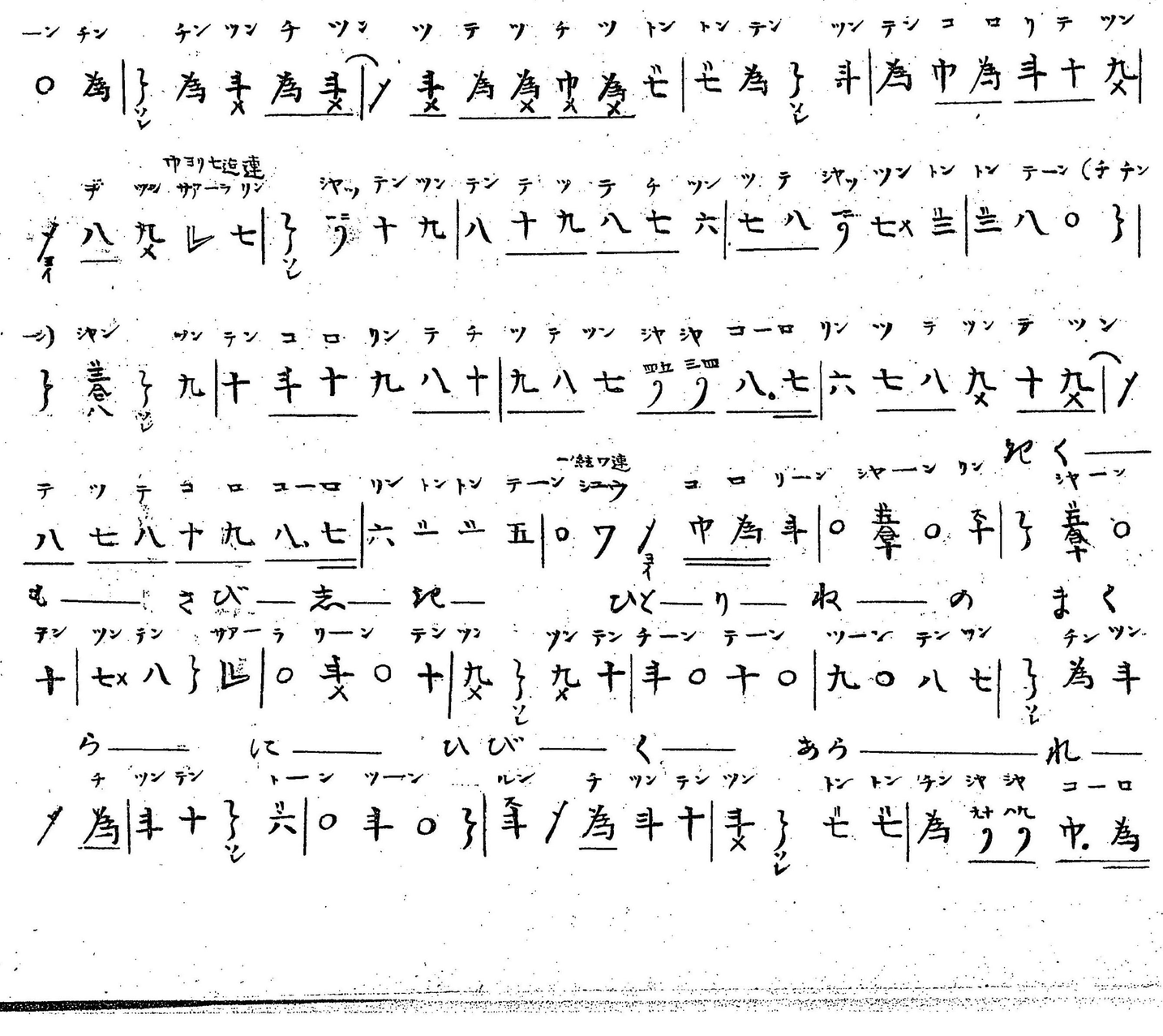
を表——の——をと——星に——ものおも——

ひ——ば——の——あは——る——ふす——ま——

に——ふくわは——さぞ——ん——さ——ち——き——だ

——に——と——こ——ろ——も——とは地——よは

の——か——わ——



一八

リン 斗 ハ命 シャーン 三

チン 斗 を テー 十 ヒ

—の——— おと　　も——— も志—や—と

リン トン トン テン サアーラ リン　　コーロ リン　　トーン テン　　チーン チン チン ツン　　チーン

手 五 五 十 ㇾ 九 ㇾ ㇾ 十 九 八 ㇾ 六 ㇾ 手 ㇾ 為 ㇾ 巾 為 手 ㇾ 為 ㇾ

ゐ—そ——— せ 記———— か収——— て———

シャーン チン チン ツン　　チン ツン テン ツン テン チン　　コーロ リン　　コーロ リン ツン テン ツン テン ツン

八 ㇾ 巾 ㇾ 為 手 ㇾ 為 手 十 九 十 手 十 九 八 ㇾ 五 四 三 二 三 二 三 四

おつ—る——— なみ——— だ—の—つら—

シャン シャーン シャン　　ツーン　　ドン トン ツン　　カラ カラ ツン　　ツン テン ツン テン ツ テ

う ㇾ 八 ㇾ 五 ㇾ 九 ㇾ 曲 曲 九 ㇾ 五 六 曲 五 九 ㇾ 九 八 七 八 九 十

—よ—り　　つち—記　　れの—ち——の—

テン コーロ リン　　チーン　　カラ カラ ツン ツーン　　ツン ツン　　ツーン ツン チン ツン ツン

手 十 九 八 ㇾ 十 ㇾ 七 八 六 七 手 手 ㇾ 手 手 ㇾ 手 ㇾ 手 巾 手 手

を——— 志 か—ら　　ゆ—び—も　　よひ—志—

テーン ツン テン テン ツン テン　　テン テン ツーン テン コ ロ ユーロ リン テーン　　ツーン

十 ㇾ 手 為 巾 手 十 ㇾ 手 十 九 ㇾ 八 為 手 十 九 七 ㇾ ㇾ 七 ㇾ

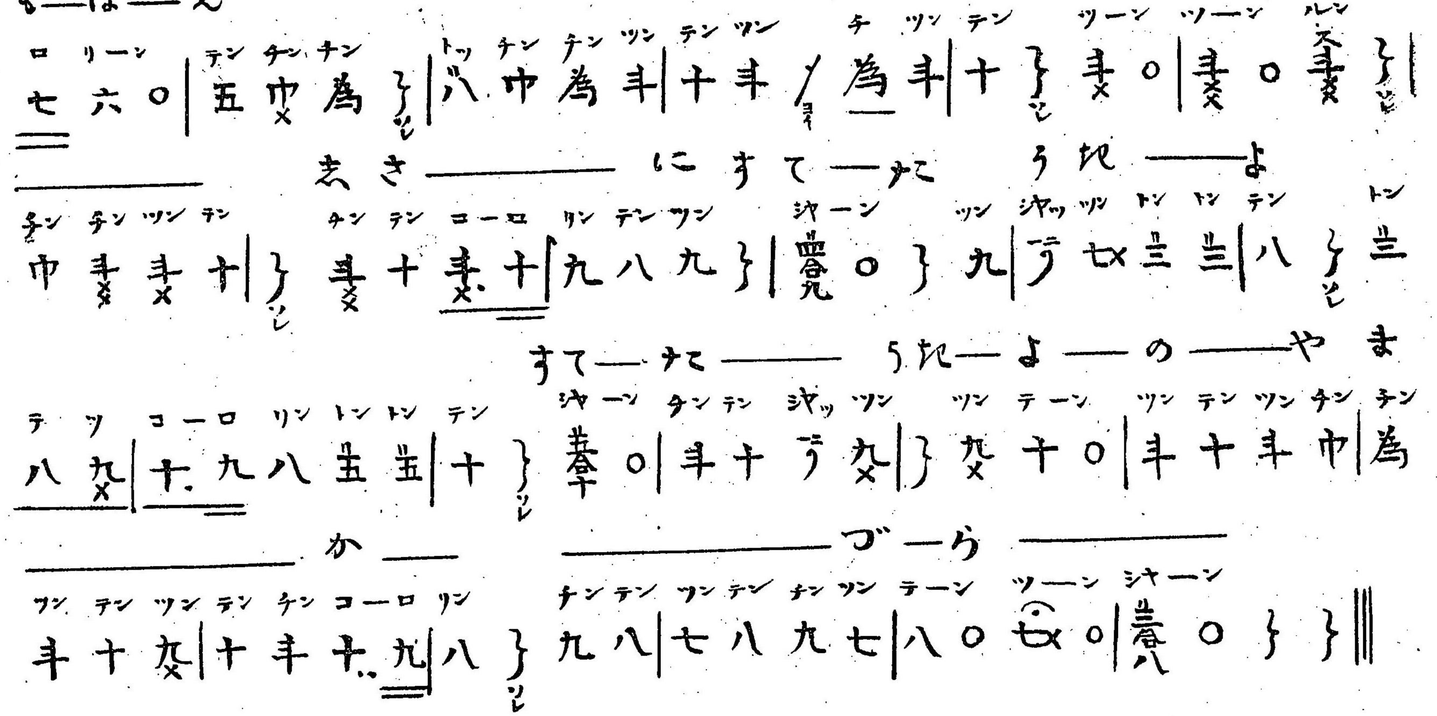
記　　人———— の——— つみ——— ふか———く——お

ツン ツン　　テン テン ツン　　チ ツン ツン シャッ ツン　　チン ツン　　チ コーロ リン テン チン コー

ㇾ 七 七 ㇾ 十 九 七 ノ 九 七 七 ウ 七 ㇾ 九 七 ノ 九 十 九 七 七 九 八

一九

ゐ—は—ん　　ゑと——の——　かゐ——



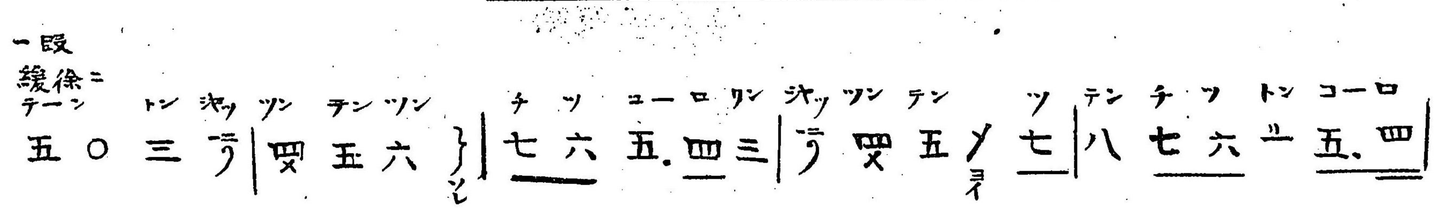
——　ゑさ——にすて—たう九——よ

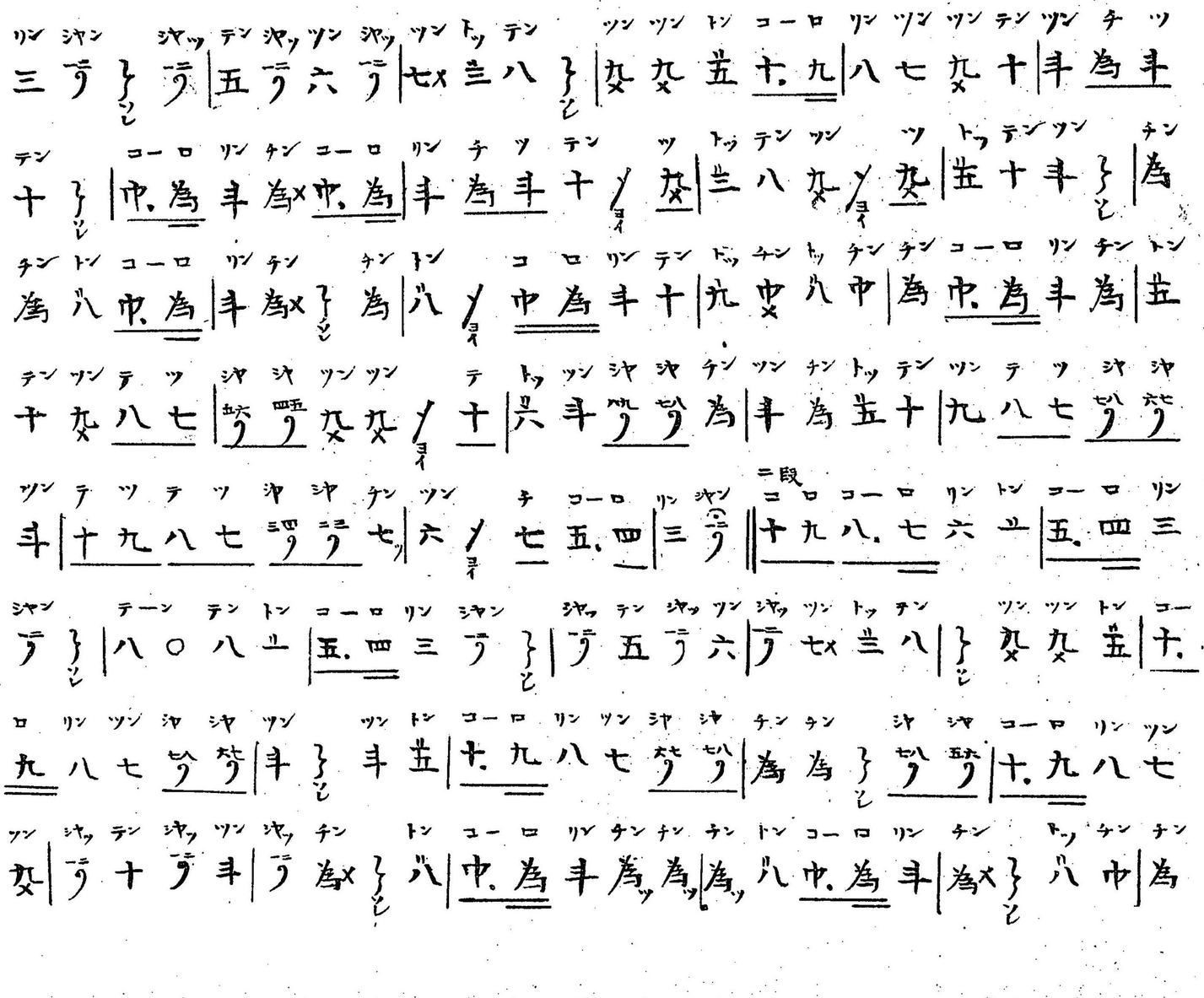
すて—た——う九—よ—の——やま

——か——　——ぢーら——

九段之曲　平調子

一段
緩徐ニ





二段

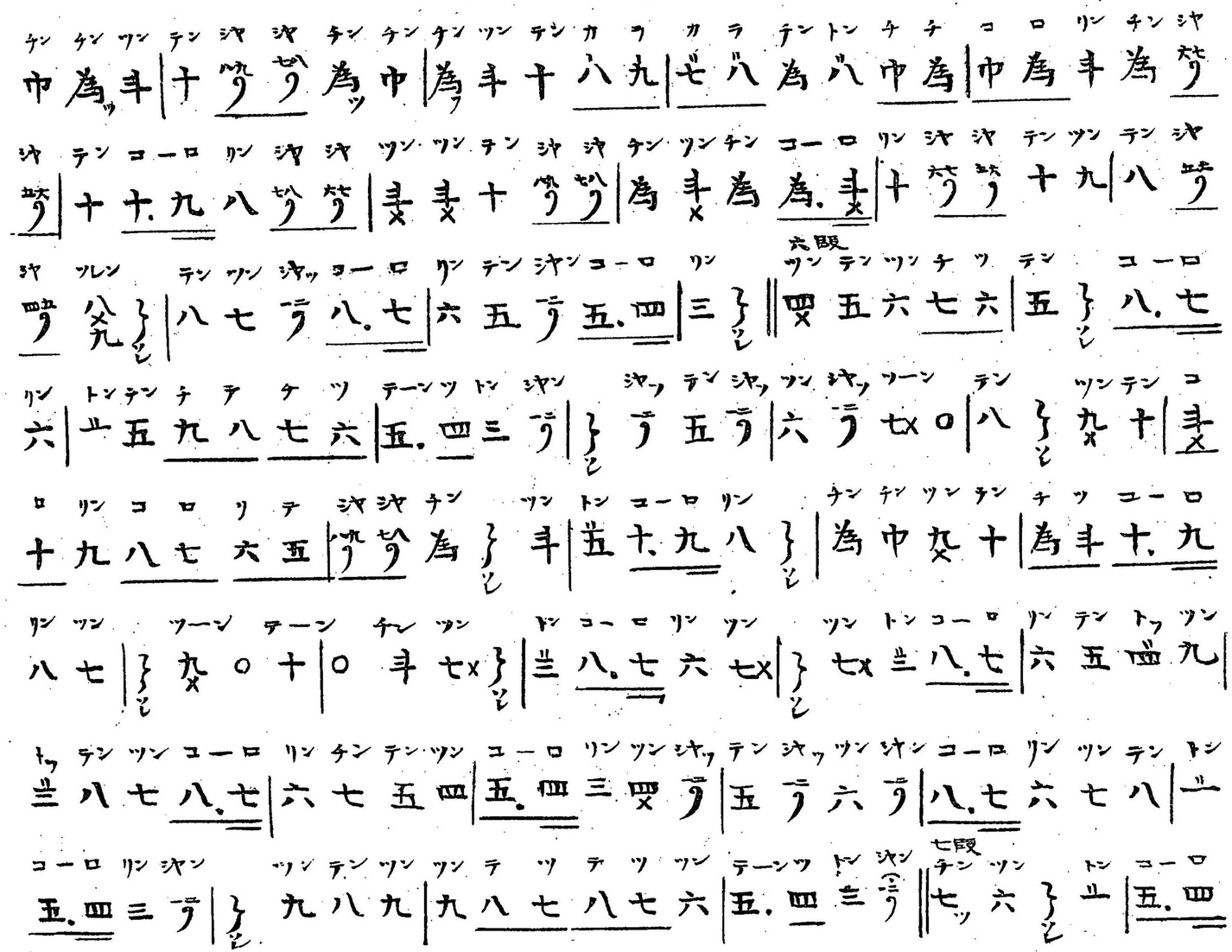
二

一粒輪連

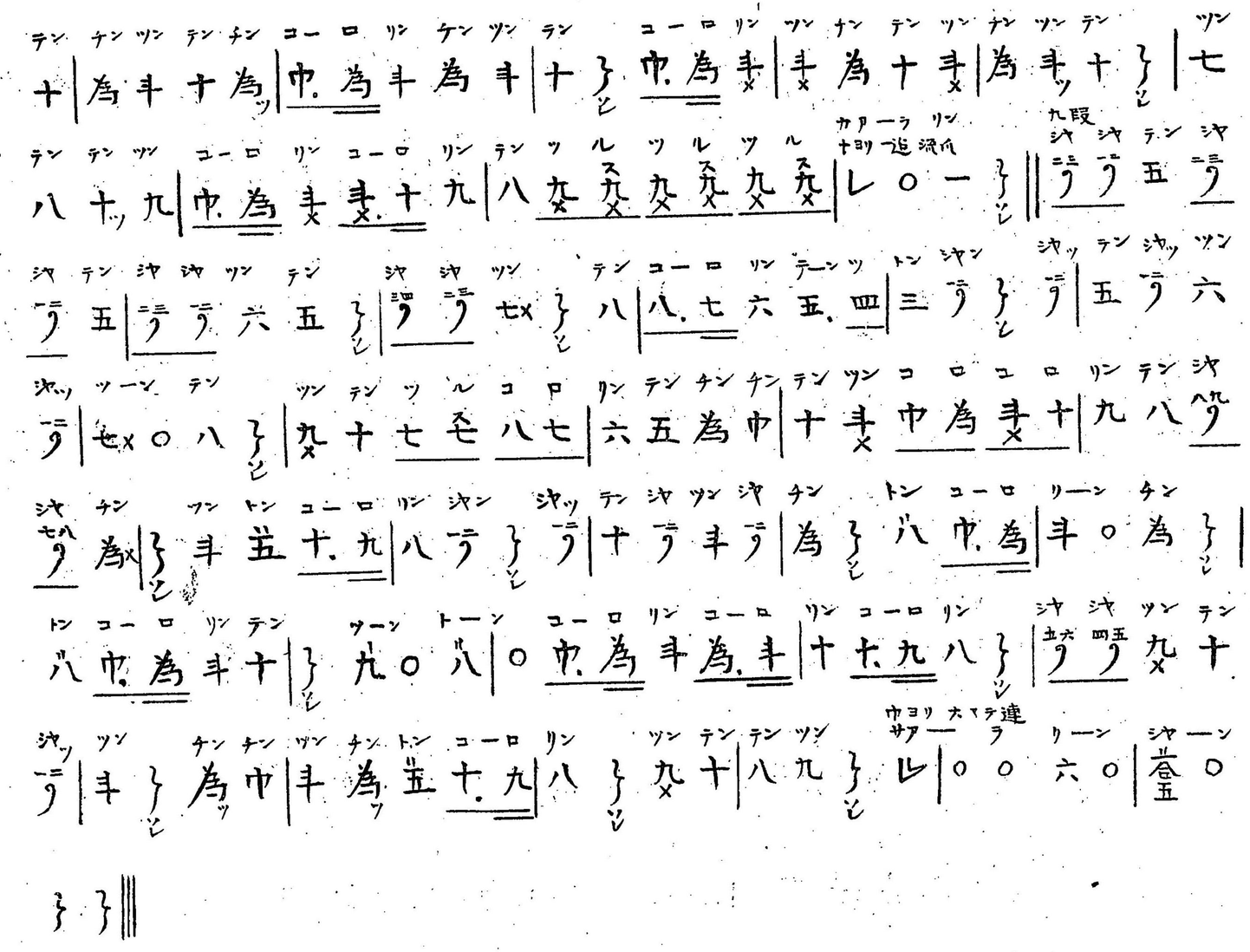
三段

中ヨリ八迄流れカアーウ

四段



一ツ鼓輪連



巖上の松

平調子ノ第四絃ヲ一音上ゲテ(双調)(ト)トナシ第九絃ヲ一音上ゲテ第四絃ノ裏ノ(双調)(ト)トナシタル者トス

緩徐ニ

ね み ―――― が ――――

シャ―ン シャン トッ チン コ ロ リン テーンツ トーン ツーン シャン カ ラ カ ラ コーロ リン

八合巾 ○ 七合為 ｝ | 八 巾 ノ 巾 為 ヰ | 十 九 八 ○ | 九 ○ 五合十 六 七 五 六 | 十 九 八

―― よ ―― ―― ―― の ―― た ―― め ―― ま ――

シャン シャン ツ テン ツ トン トン テン ケン コーロ リン シャン カ ラ カ ラ ツン チ

七合七 ｝ | 八合八 ノ 九 十 ノ 十 | 七 七 為 巾 | 巾 為 ヰ 五合十 ｝ | 七 八 六 七 ヰ ノ 為 |

に ―― の み ―― は ひか ―― れ ―― て ―― も ――

チン チン チン ケーン チン チン トン テン トン テン チン トン コ ロ リン テン シャーン シャーン

巾 為 巾 ｝ | 巾 ○ 巾 巾 | 八 九 七 八 | 為 八 ノ 巾 為 ヰ | 十 ｝ 四合九 ○ | 五合十 ○

ね ぎ ―― ま ――

シャン ツ テ コ ロ コーロ リン テン ツン ツン テーン シャッ テン テン ツン コ ロ リン シャン

三合八 ｝ | 七 八 十 九 八 七 六 | 五 ｝ 六 七 | 八 ○ 八 | 八 九 ノ 十 九 八 | 四合九

う ど ―― か ―― め ―― れは ―― の ―― へ ―― の

テン トン ツン トン テン トン ツン ケン テン シャ シャ コーロ リン ツン カ ラ カ ラ ツン

五 四 | 九 ｝ 四 五 | 六 ヰ 為 | 十 ｝ 十 九 八 | 七 ｝ 三 四 三 三 | 七

ツン 七 ｝ | シャ 三合五 ツン 六 シャッ 八合八 テン 九 ｝ | シャ 三合五 テン 十 シャ 三合五 ○

ま——つ——は

テン シャーン シャン　カラ カラ ツン ケン　コ ロ リン シャーン シャン　シャーン シャーン シャーン

八 合九 ○ | 合十 } 七 八 六 七 | 十 為 ノ 中 為 十 | 合十 ○ 合八 } | 合七 ○ 合八 ○ | 下

連 リン　チ トッ テン　コ ロ リン シャン　シャーン シャン ッ トッ テン　コ ロ リン シャン

○ 中 ノ 為 | 八 中 ノ 中 為 十 | 合十 } 合十 ○ | 合十 ノ 九 五 十 | ノ 十 九 八 う

ち よ——　——　や ち——よ——　かは——

ツーン ツン テーン ツン　ケン チン チン　チ トン ツルン チーン シャン　ッ テン ッン シャーン シャー

九 | ○ 九 十 ○ | 十 } 為 中 | 中 ノ 為 八 為 | 中 ○ 合十 ノ 九 | 十 十 合為 ○ | 合中

ら——　ぬ——　ゐ——　ろ——に　さか——ふ——　——

ーン シャン シユウ　コ ロ リン テーンツ トン　サアーラ リーン シャン　ッ トッ テン　コ ロ リン

○ 合十 ワ | ノ 中 為 十 十 九 | 八 } レ ○ | 七 ○ 合八 ノ 九 | 五 十 ノ 十 九 八 |

二八

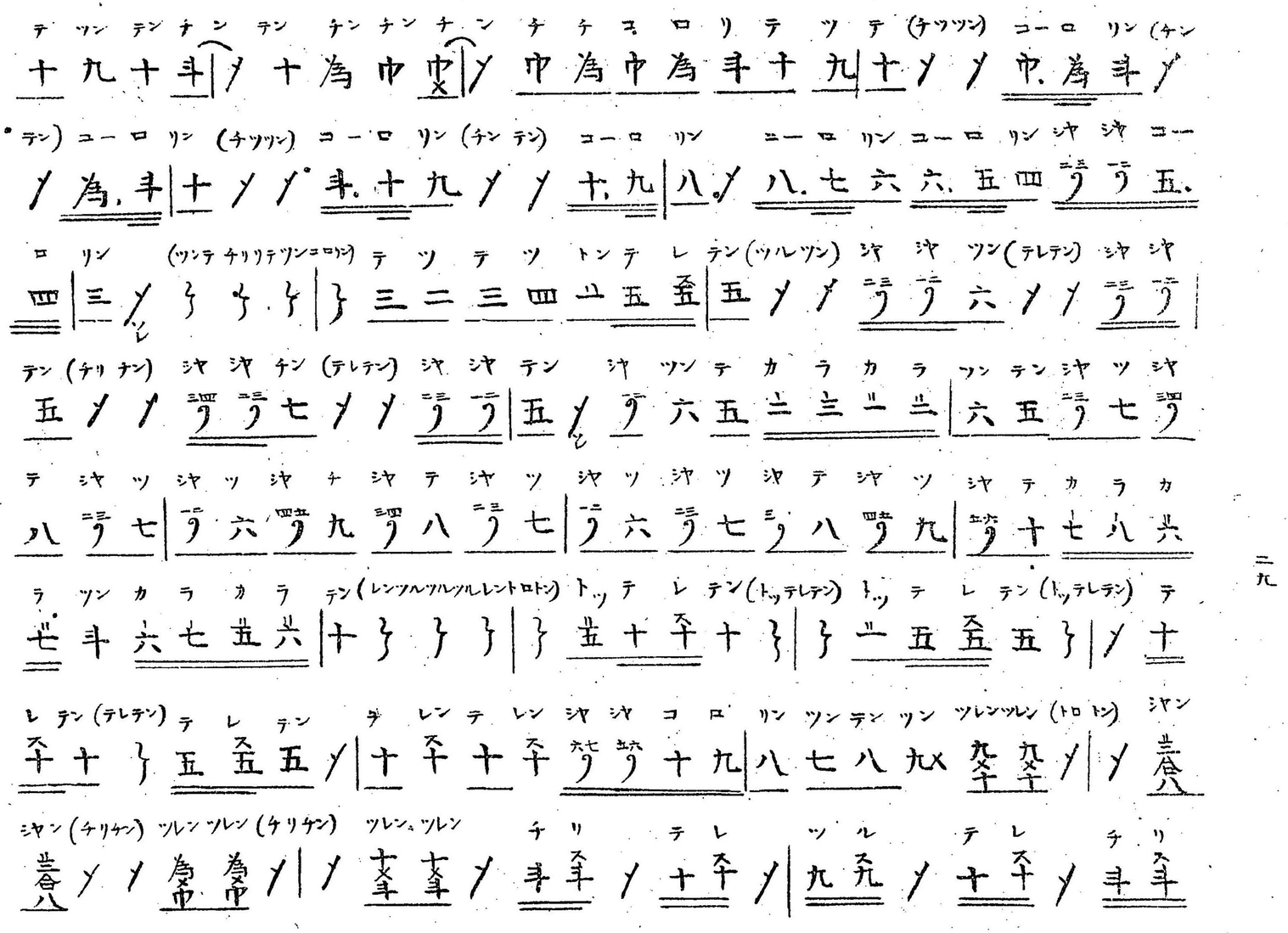
ら——　ん——　緩徐ニ 手事一段（二段ト合奏スルコトヲ得）

コ ロ リン トーン テン　シャーン シャン カ ラ カ ラ テン　カ ラ カ ラ テン　カ ラ カ

ノ 八 七 六 ± ○ | 五 } | 合七 ○ 合八 㐅 五 三 㐅 | 八 五 六 㐅 五 九 六 七 五

ラ テン シャン シャン チ リ チ リ　チン シャン シャン シャ ツン テ ッ テ ツン コ ロ コ ロ リン

六 | 十 合為 合十 為 為 為 為 | 中 合十 合八 う 七 | ノ 八 九 十 十 | 為 十 十 九 | 八 ノ

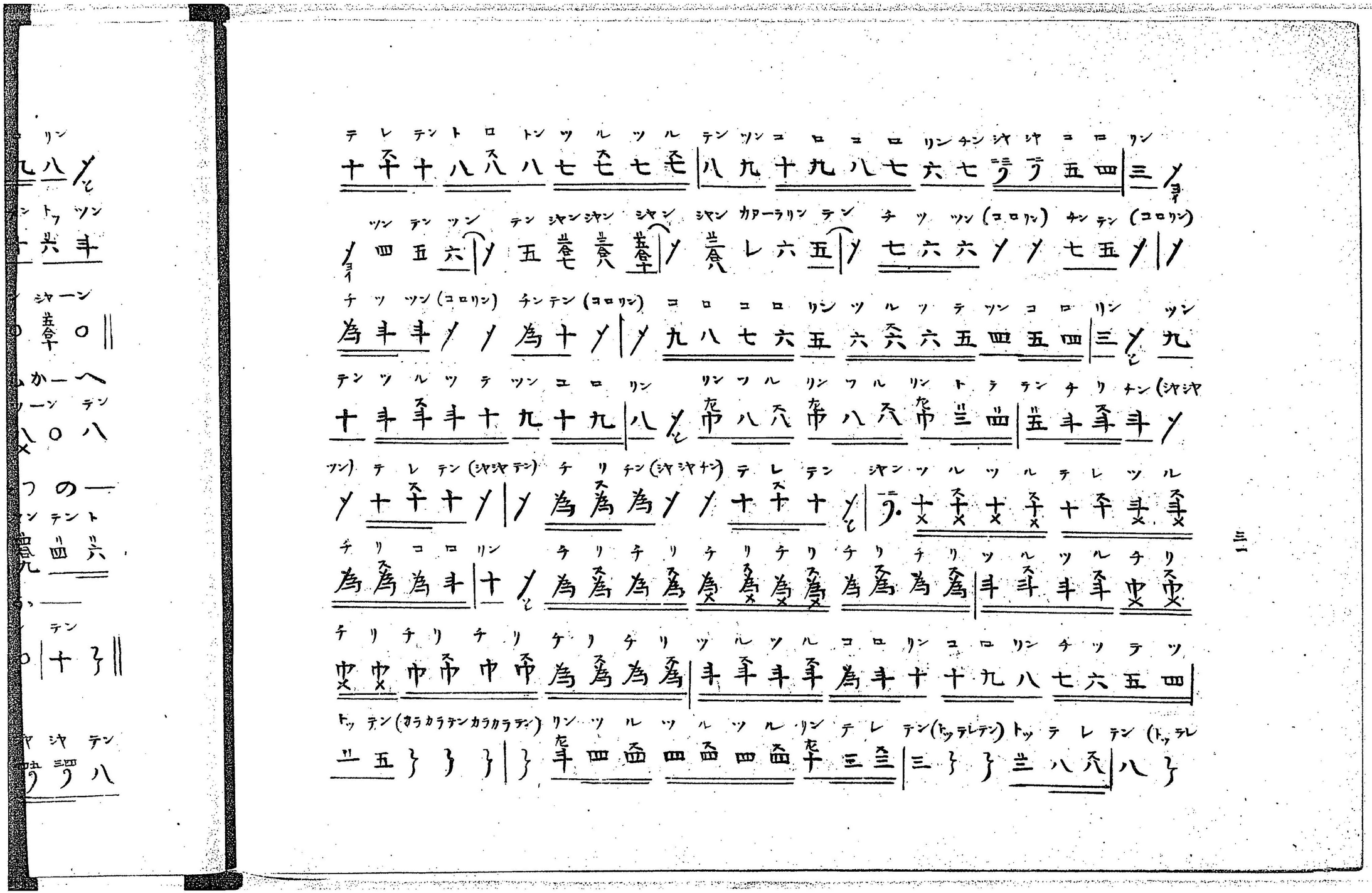


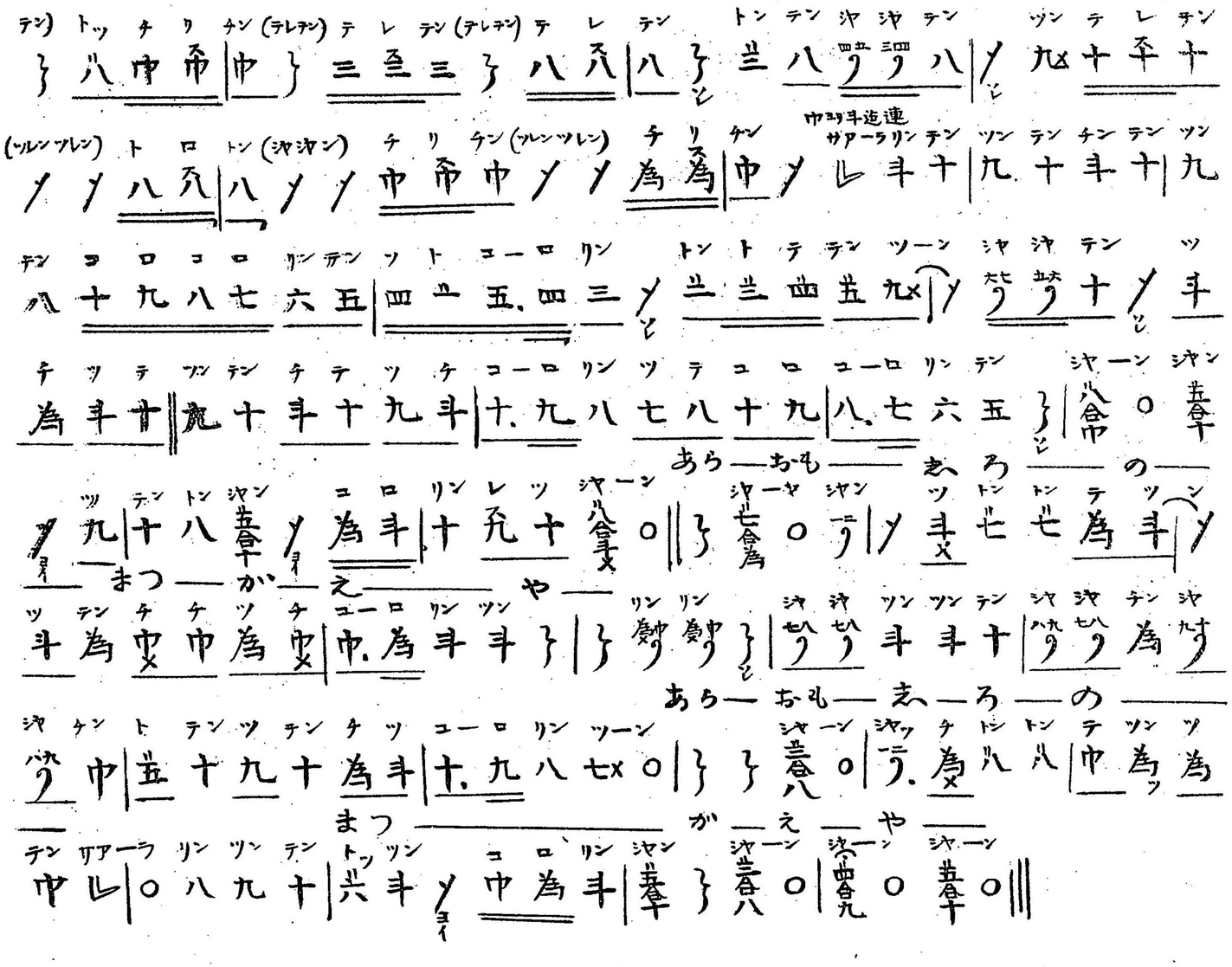
その—まつ—が—え—の—ふーり—　ゆれば—むかーへ

—ゑとゑ—の　ゑに—おへーる　たつの—

—すがたに—にた—る—か—ゐ—

手事二段



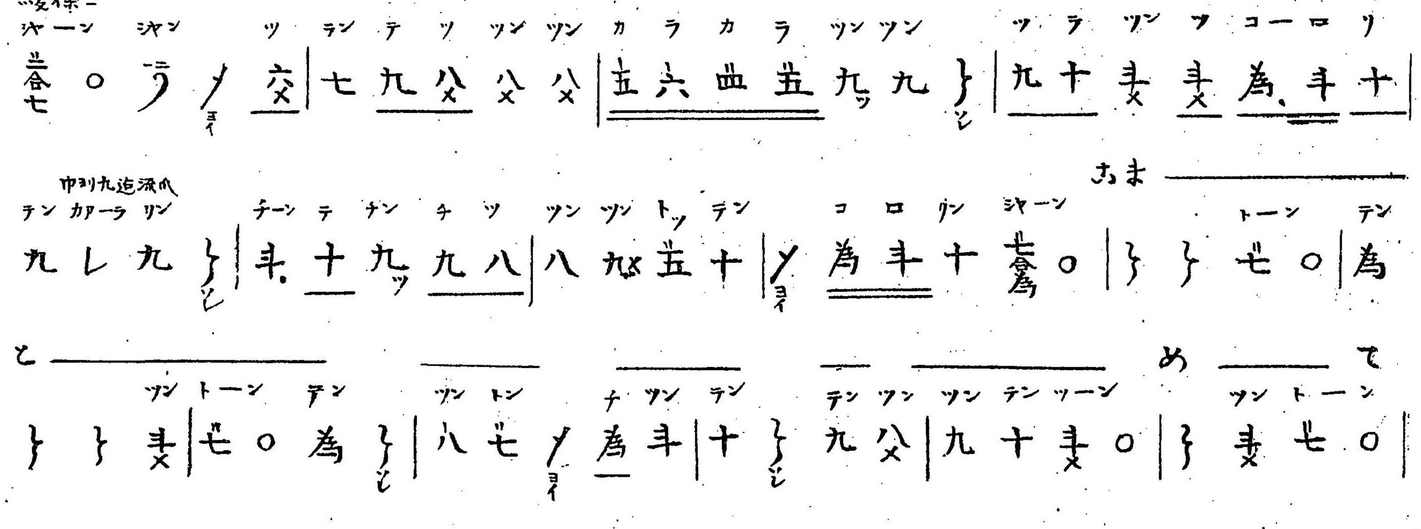

あら—おも—— ゑ ろ —— の——
まつ—— か—— え—— や——
あら—おも—— ゑ—ろ—— の——
まつ—— か—— え—— や——

新雪月花之曲

平調子ノ第八絃ヲ半音下ゲテ(新全)(#二)トナシ第九絃ヲ一音上ゲテ(双調)(ト)トナシ次ニ第弐絃ヲ第七絃マデ上ゲテ七絃ト全音(二)トナシ次ニ第三絃ヲ第八絃マデ上ゲテ八絃ト全音(#二)トナシ第四絃ヲ一音上ゲテ(双調)(ト)トナシ(第九絃ト合ハス) 次ニ第一絃ヲ一音下ゲテ(双調)(ト)トナシ(第四絃ト合ハス) 次ニ中ノ絃ヲ一音半上ゲテ(双調)(ト)トナス(九ト合ハス)

オールガン音名	ト	ニ	#ニ	ト	イ	#イ	ニ	#ニ	ト	イ	#イ	ニ	ト
琴ノ絃名	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	斗	為	巾
雅樂音名	双	一	新	双	黄	鸞	一	新	双	黄	鸞	一	双

前弾キ
緩徐ニ



そ——

テン カラ カラ テーン チン コロ リン テン ツン コロ リン テン ツン ツーン

為 } 九 十 八 九 | 為 ○ 為 巾 為 丰 | 十 丰 ノ 為 丰 十 九 八 | 八 ○ } } |

で —— ら —— ち —— —— はらふ ——

ツルーン シャン ツン テン トッ テン チ テン ツン カラ カラ テーン シャーン リン サアーラ リン

七 ○ 合 } | 八 九 五 十 | ノ 丰 十 九 } | 五 六 凹 五 九 ○ | 刀 ○ 十 ル | 八

一ヨリ十迄引捨　中ヨリ八迄運

か —— げ —— —— —— も —— な ——

ツン トーン テーン テン ツン テン コロ リン テーン ツ トン シャッ ツーン ツン トー

} } 九 | 五 ○ 十 ○ | 七 } 交 七 | ノ 十 九 八 七 六 | 五 } 了 交 | ○ 交 二

——去——

カラ カラ テーン シャン カラ カラ テーン ツーン テン チン ツン チ

○ | 七 } 三 凹 三 三 | 七 ○ 合 } | 三 凹 三 三 七 ○ | 六 ○ 五 為 | 丰 ノ 為

さの —— の —— わた ——

ツン テン ツン チン コロ リン テン シャン ツ テン コロ リン テーン ツ トン ツン テー ツ トン

丰 十 | 九 丰 ノ 十 九 八 | 七 } 合 凹 ノ 八 | 九 為 丰 九 九 八 七 | 六 七 八 凹

——り —— の —— ゆれ ——

テン ツ テン カラ カラ テン チ テン テン ツン テ ツ チ コロ リン ツ チ

九 八 | 九 五 六 凹 五 九 ノ 丰 十 | 十 } 丰 ノ 十 | 丰 為 ノ 為 丰 十 九 丰 |

の——— ゆふ——— ぐ——— れ———

コー ロ リン テン ツ テ ツーン ツン ツ テ ツーン シャン カ ラ カ ラ チン カ ラ カ ラ

十 九 八 七 公 九 九 〇 九 九 九 公 〇 豊 十 丰 九 十 巾 九 十 八 九

ツーン チン ツン テー テ ツ テ ツ ト ン コー ロ リン ツン テ ツン ツ テ トン コー

為 〇 巾 為 為 巾 為 為 メ 丰 七 為 丰 十 丰 メ 十 丰 丰 為 五 十

れな——— ば——— 一

ロ リン トン テン ト テン チ コー ロ リン テン ツーン ツン テン コ ロ リン テン ツン

九 公 凸 五 二 七 九 公 七 六 五 公 〇 公 七 メ 公 七 六 五 四

——— ふ——— ——— く———

テン チ ツン ツン カ ラ カ ラ テン チ テン カ ラ カ ラ テン シャン リン シャーン リン

五 メ 九 八 八 凸 五 三 凸 八 メ 九 七 三 凸 二 三 七 ウ 巾 ヲ 〇 為

波瀾シ 一ヨリ為迫引揚

かぜ——— ———

チン ツ ツン チン ツン コ ロ リン ト ツ テ ツ ナ コー ロ リ テン シャーン シャッ ツ

為 メ 丰 丰 為 丰 為 丰 十 凸 九 十 丰 為 十 九 八 七 豊 〇 ウ 九

——に——— まか——— せ———

ル テ ツン ツ テン シャン トン ト テ テン シャーン シャン シャ シャ コー ロ リン チ ツ コー

九 十 九 九 十 豊 五 五 六 十 豊 〇 豊 ウ ウ 九 八 七 為 丰 十

三五

——て——すむ——ゆは——は——

九 八 八 七、六 五 | 交 } } 二 三 二 二 | 六 } } 三 四 三 三 | 七 } 七 交

——つ——比——

七 | 工 八 八 } | 尺 ノ 八 八 } | 工 九 十 ノ 丰 | 為 } 為 ○ | 為 } 為 為 中 |

で——まこ——と——に——

七 為、丰 十 } | } 中 為 } | 九 十 ノ 中 為 | 為 } 丰 為 為 為、丰 十 九 十 |

ゆれ——あ——か——き——け——る

手拍

丰 ○ 十 丰 ノ | 為 丰 十 九 ○ | 八 } 九 十 | 丰 十、九 八 七 } | 六 七 八 九

八 | 合七 } 合八 ○ | 合八 七 八 | 合 四 四 九 } 合十 ○ | 合九 四 五 六 } | 七 八 ノ 中 為 |

為 } 合十 ○ | 合中 } 合十 合九 | 為 } 中 中 | 為 中 為 為 } | 為 為 為 丰 為 | 丰 十

トッ チン トッ テーン ツン テン ツーチ トン トン テン ツン テ ツン チン ト ト テン テン ツレン

六 斗 曲 九 〇 八 七 八 九 五 五 十 斗 ノ 十 斗 為 曲 曲 九 九 九

一 ツレン 中ヨリ七迄連 サアーラ ソーン ツン テン ツ テ ツン テン ツン テ ツン テン トッ チン トッ テン ツ ト コー

〇 七 山 七 〇 六 五 四 五 六 七 八 ノ 九 八 七 八 為 七 為 斗 七 為

ロ リン ツ チン ツン ツ コー ロ リ ツーン シャーン ム ム

斗 十 ノ 斗 為 斗 斗 十 九 八 九 〇 巻 〇 五 〇 十 十 九 巻 〇

ち れ の おは

九 〇 八 〇 七 為 斗 ノ 為 斗 十 九 〇 巻 〇 七 〇 為 〇 為

み や び と は

斗 為 〇 斗 〇 斗 為 九 九 十 六 〇 斗 為 斗 十 斗 為 九 〇

れと ま あれ や

八 九 十 九 八 〇 七 八 ノ 九 十 八 七 六 八 七 九 八 七 六 五

ツ 六

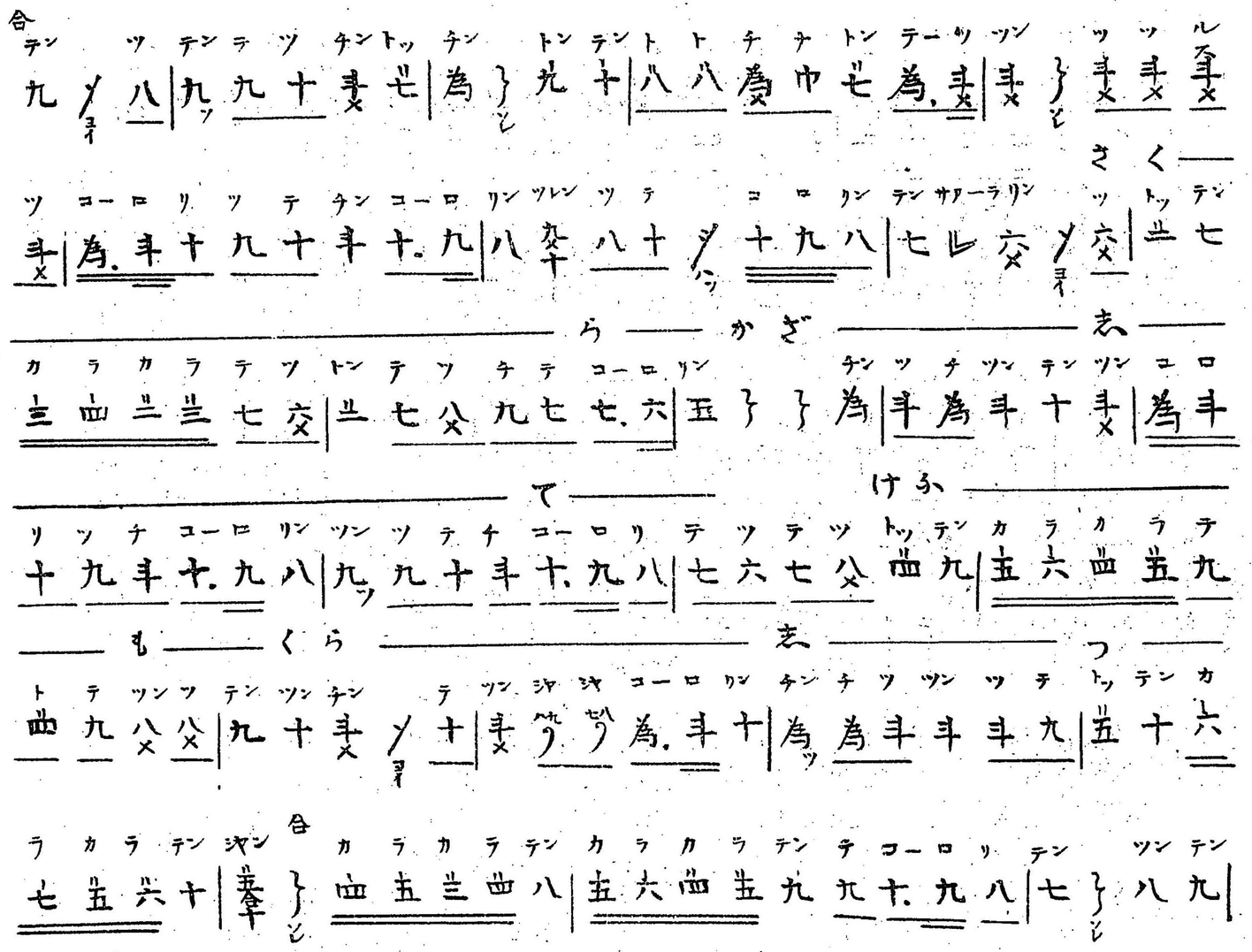
ケ 巾

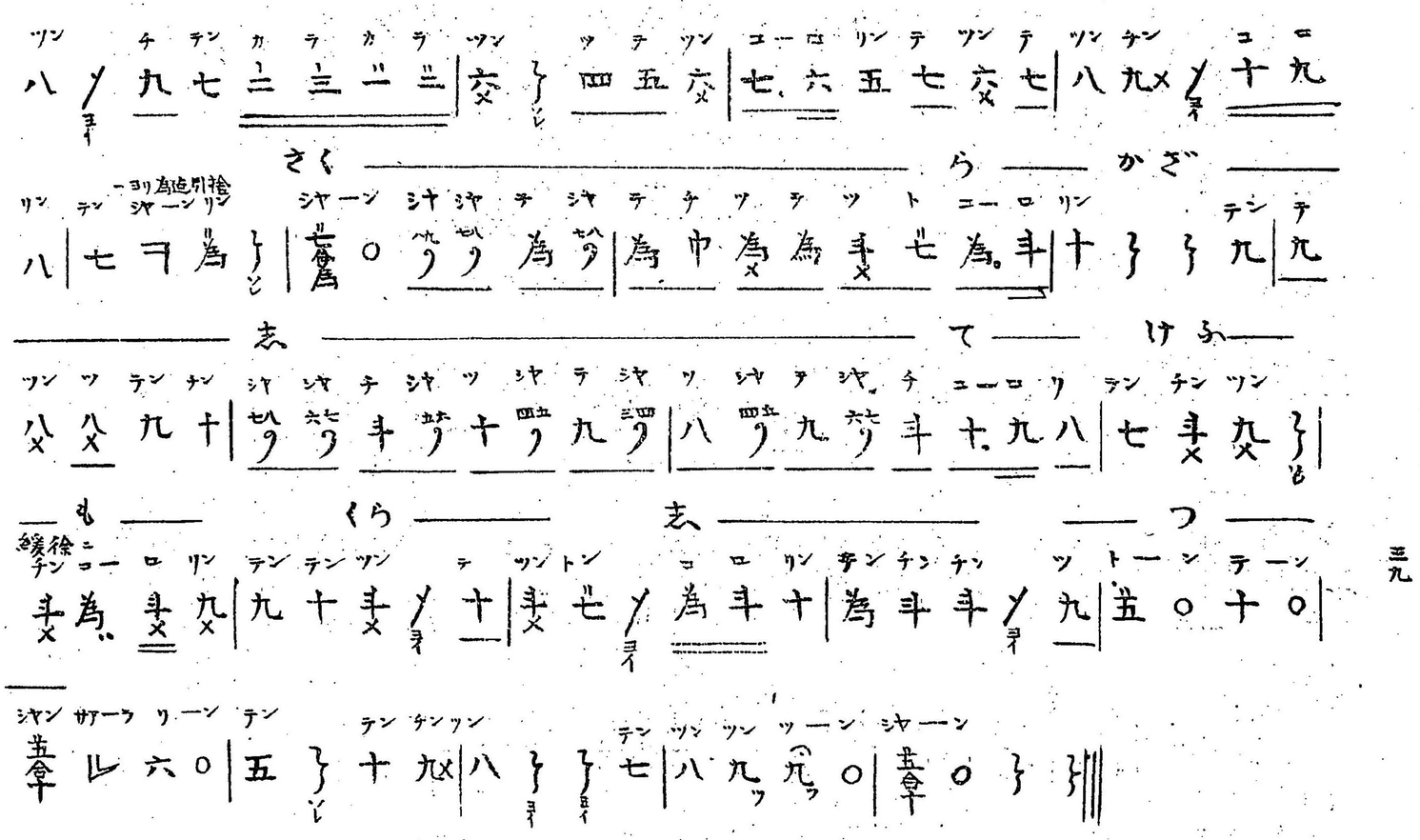
テン 十

テン 九

ツン 為

テン 十


さく
ら
かざ
し
て
けふ
も
くら
を
つ

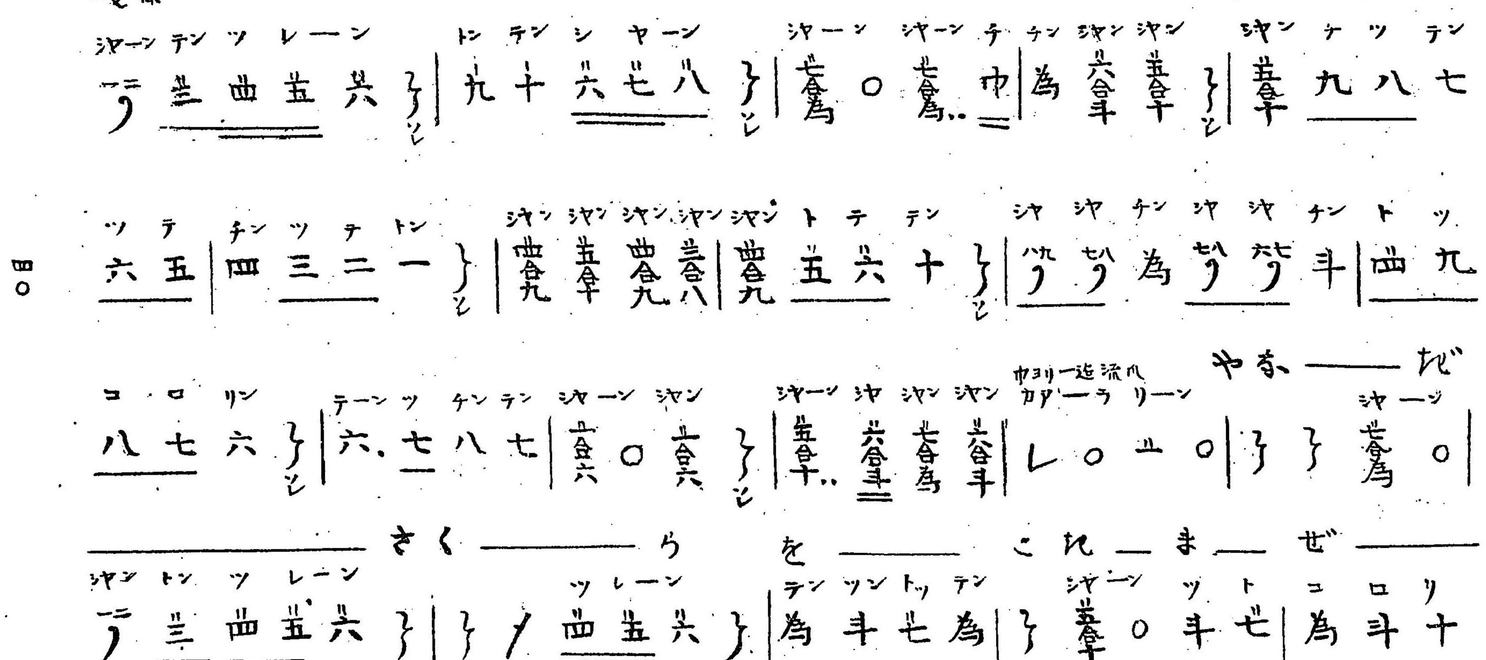


三九

凱旋喇叭之曲

平調ホノ第弐絃ヲ七ノ絃マテ上ゲテ七ト全音トナシ第三絃ヲ八ノ絃マテ上ゲテ八ト全音トナシ第九絃ヲ一音上ゲテ(双調)(ト)トナシ第四絃ヲ九ノ絃マテ上ゲテ九ト全音トナシ第五絃ヲ十ノ絃マテ上ゲテ十ト全音トナシ第六絃ヲ半音下ゲテ五ノ絃ト全音トナシ第一絃ヲ三音下ゲテ下層ノ一越(ニ)トナシ(七ノ絃ト合ハスベシ)次ニ斗ノ絃ヲ半音上ゲテ盤渉(ロ)トナシ巾ノ絃ヲ弐音半上ゲテ上層ノ黄鐘(イ)トナス(十ノ絃ト合ハスベシ)

緩徐ニ



音トナシ
マテ上デ
(七八結ト
ト合ハスベシ)

ツ テン
八 七

ト ツ
四 九

だ
ヤーン
五角 ○

リ
四 十

去 みや あの は

テ コ ロ コ ロ リン ツ テ ツーン シャーン ト テ ト テ ツン ト テ ト テ
九 十 九 八 七 | 六 五 六 七 ○ | } } 五 ○ | 四 五 六 七 八 } | 五 六 七 八

る の あさ か ぜ に ふき ひ る

テン ト テ ト テ チン シャーン ト チ チン テン チーン シャーン テン トン ツン
十 } | 七 八 九 十 為 } | } 十 ○ 七 為 | 為 十 十 ○ | } } 五 ○ | 四 五 九

が へ る ひの ま る の

テン トン ツン テン ツン シャッ テン シャーン シャーン ト チ チン コ ロ コ ロ リン
} | 四 三 八 } | 十 九 十 十 | } 十 ○ 十 ○ 五 十 十 } | 十 十 十 十 九 } |

けふ が いる せ

コ ロ コ ロ リ テ ソ テ テン コ ロ リーン シャーン テン ト テ テン トン ト
十 九 十 九 八 七 六 七 | 八 九 八 七 ○ | } } 八 ○ | 四 五 六 九 } | 五 六

ん の わが ぐーん を よろ さ び

テ テン トン ト テ テン ツ ト テーン ツ ツ ツーン チン シャ
七 十 } | 七 八 九 為 } | } 八 七 為 ○ | レ 十 十 ○ | } 為 十 十 ○ | 十 十

む か ふ く に た ケ の ヲわ

シャ テン テン シャ シャ テーン チン シャ シャ チーン シャーン チン ツ ト コ ロ リーン
六 十 } | 十 十 十 十 ○ | 為 十 十 為 ○ | } 十 ○ 為 | 十 七 為 十 十 ○ | }

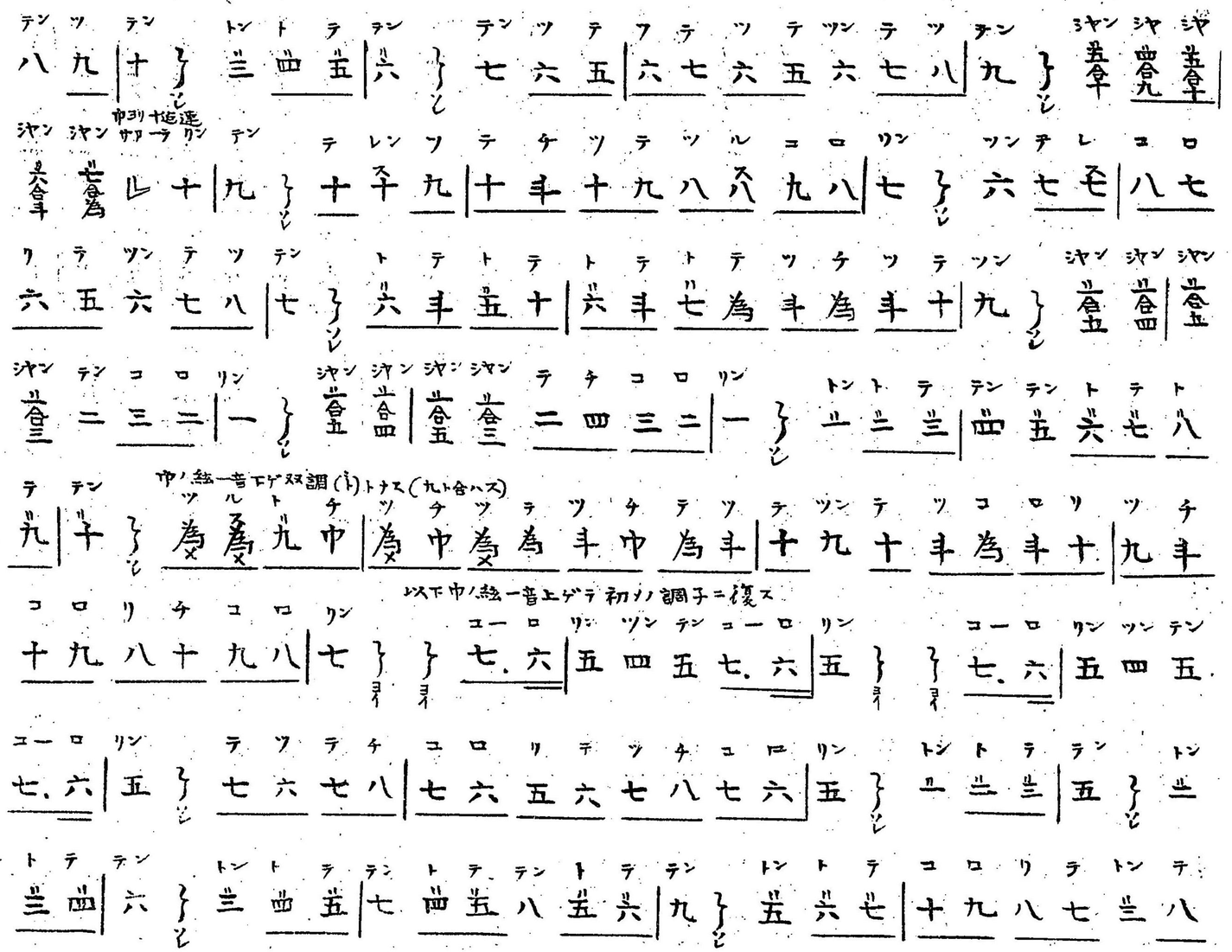
四一

—た—す———— は—る— か———— かる—た——よ

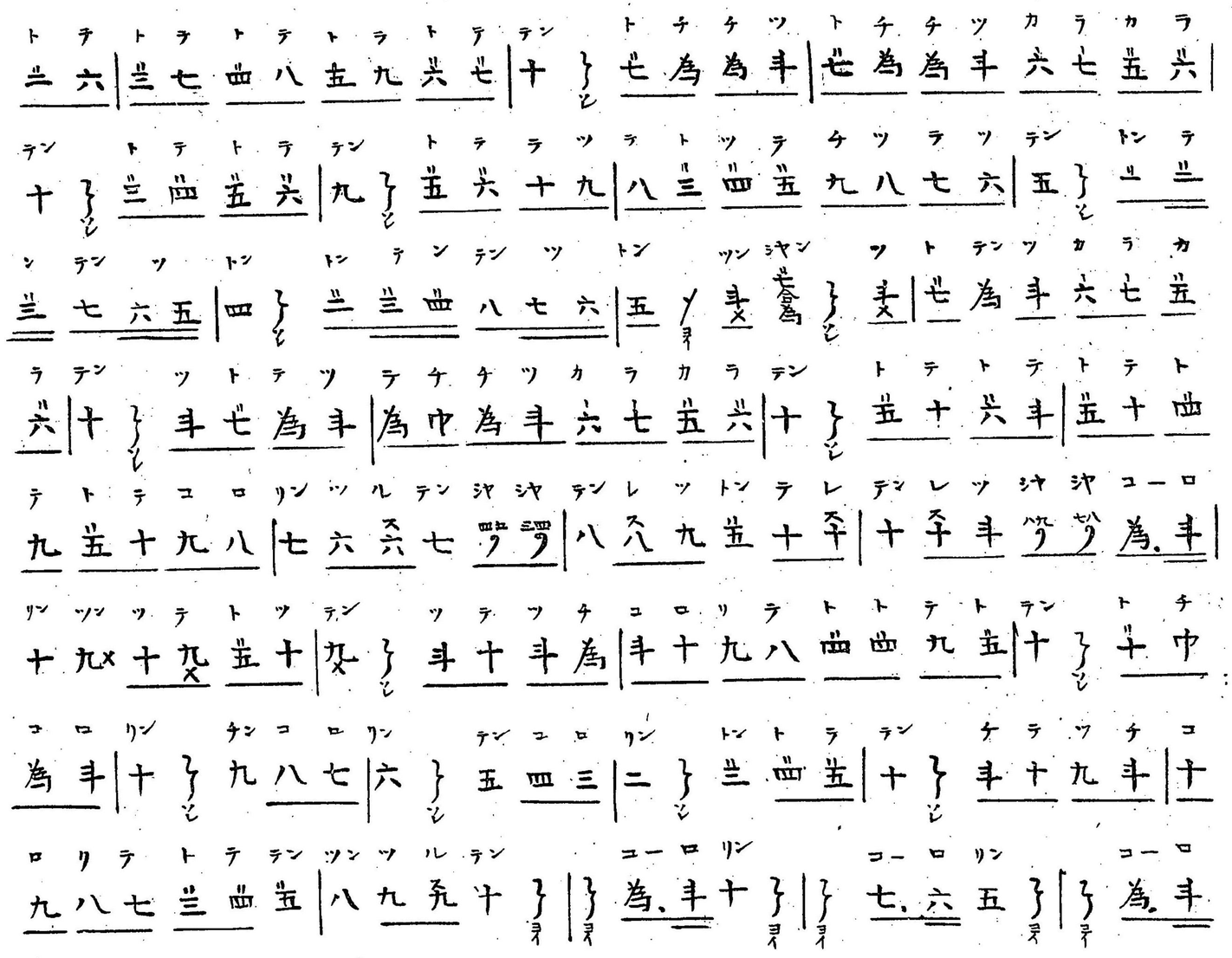
七 ——— 星

ほへ—れ きへ—れ—の——— ちゆく—ちゆく—と—

手事一段（二段目ト合奏スルヿヲ得）
緩徐ニ


巾ノ絃一音下ゲ双調(ˆ)トナス(九ト合ハス)
以下巾ノ絃一音上ゲテ初メノ調子ニ復ス

手拍二段



リン ユーロ リン　トツツルトテテレトテテレトテテレテツチ
十 七、六 | 五 } ソレ 三 六 六 六 | 三 七 七 七 | 三 八 八 八 | 四 九 九 九 十 十 為

ツテチテツテチユロリン　ツンユーロリンツンシヤシユーロリン　ルン
十 | 十十 十九 八十 九八 | 七 } レ 九 十、九 | 八 九 ㇾ ㇾ 七、六 | 五 } ヨイ } ヨイ 四 |

れさ一む ——— へれ ——— 去一も ——— せんじやうに
縫徐

シヤン　シヤ　トン　ト　テ　テン　トン　ト　テ　テン　トン　ト　テ　テン　ツレン　シヤンツレン　シヤン　ト　テ　テン　トン
三合五 } ‖ 三合六 一 三 三 | 五 三 四 五 七 三 三 四 | 六 ノ 六七 ㇾ 六七 | ㇾ 三 四 五 三

あり去 ——— く去ん

テ　ツ　テン　ツン　トン　テ　ツ　テン　チン　トン　テツ　ユロ　リン　シヤン　チン　シヤ　ジヤ　チン　シヤン　シヤン　トン
八 七 八 九 | 五 十 九 十 十 七 為 十 為 十 | 十 } 五合十 為 ㇾ ㇾ | 為 ㇾ ㇾ 三

四六

はれくば ——— く ——— ぞあられ ——— ふるひ ——— も一

テン　トン　ト　テ　テン　シヤン　シヤン　シヤン　シヤ　シヤ　テン　シヤン　チ　ツ　テ　ツ　テン　ツン　テン　ツン　コ
四 五 五 六 | 十 } 三合八 四合九 五合十 ㇾ ㇾ | 十 } 五合十 九 八 七 六 | 五 ノ 四 五 六 七

あめのよ ——— も こはりのやいば ——— くろがねの

ロ　コ　ロ　リン　シヤン　シヤン　ト　テ　テン　シヤ　ラ　シヤ　チ　シヤ　チ　チ　ツ　シヤ　テ　シヤ　ツ　シヤ
六 五 四 | 五 ノ 五合五 ㇾ 三 四 | 五 } レ ㇾ 十七 ㇾ 十八 為 | ㇾ 十九 為 十 ㇾ 十 ㇾ 四五 九 ㇾ 十六

ハ　ツ　テ
十 ノ 十 | 十 ノ 十 | 十 ノ 十 |
ニ　ツ　ル
ホ　ツ　ス
チ　ツ　ス
中 為 為 | 為 為 為 |
ば ——— に ——— ば ———
ユーロ　リン
為、十 | 十 |
——— お ——— 忽
チ　ツ　テ
為十十

——ひたまとび——くろそのなかーを

おにをかいとはんおほれみの　ためーと——おゝへ——

ば——ゝと——ど——————あ——ほ　らつぱの

——おゝぞいさ——まし れ——

四七

四季之詠　前（平調子）后（中空調子）太上ガ調子トモ云フ

う—め—の——に—は——ひ——に—やな—ぢ——

シャーン 雜徐二 五合十 ○ 十 九 八 | 三合八 三 八 十 九 八 八 九 | 五 十 十 九 九 十 | 手 ノ 六 五 為 |

—も—おび—く——はる か——ぜ—に—も—も——

ツン テン シャン シャン テン ツーンツ テン ツン テン ナ ツン テ テン テン ツン シャン トン テン テン ツーン

手 十 五合十 三合八 八 | 七 七 八 九 八 七 | 六 ノ 七 五 } 十 | 九 五合十 } 五 | 十 十 九 |

—め—やよ—ひ——の　　えな—み——て——

ツ テン トン シャン チン コーロ リン ツン シャーチ テン ツーン トーン 一ノ絃輪連 シーツ コ ロ リン テン

九 十 八 | 了 了 為 巾 為 | 手 ノ 手 了 為 十 | 九 ○ 八 ○ | ワ ノ 巾 為 手 十 |

も——で—る——　　ゆ—ら—り——ゆ——ら——る

カ ラ カ ラ テン シャン シャン ツ テ ツン コ ロ コーロ リン テ ツ テ ツン コーロ リン

六 七 五 六 十 五合十 三合八 | 七 八 九 巾 為 手 十 | 九 八 七 ノ 十 九 | 八 七 六 ノ

—と——ゆう——か——す——み　　はる—の——

チ テン ツン テン ナ ツン カ ラ カ ラ テ ツン テ ツン 一刷巾マテ引連 巾ヨリ九迫連 シャ ーン リン サアーラ リン テン

七 五 | 了 九 十 了 | ノ 為 手 六 七 五 六 | 十 九 十 手 了 | ワ ○ 巾 ル | 九 八

の—か—げ——に——せ——を——よ—

ト ツン テン テン ツン テン ツン シウ コ ロ リン テン ツン テン ツン チ チ テン ツ テ ツン テン

ノ 二 七 | 八 十 九 八 | 七× ワ 中 為 丰 十 | 九× 十 丰 為 中 | 十 九 八 七 八 | ノ

も——ど——　　つゞ—

巾ヨリ六迄連

テ ツン テン サアーラ リン チン ツン テン ツン テン コ ロ リン ラーン ツ トン トーン テン

十 九 八 ル | 〇 六 ノ 七× 六 | ノ 五 九× 十 ノ 中 為 丰 十 九 | 八 三 〇 八 | ノ

か—け——た——る—　おも—　ま——

トッ テン テン トン チ テ ツン テン テン トン チ テン トーン テン シヤ シヤ テ ツン テン ツン

三 八 十 八 | ノ 九 八 七 八 五 | ノ 三 二 三 五 | 〇 十 ノ ウ ウ | 十 九 八 九×

ろ——さ—

テン チン ツン テン ツン テン ツン チン チン チン チン チン チン チ ツン トーン テン 食ツ ル テ ツン テン

十 | ノ 為 丰 十 九× | ノ 十 丰 為 中 | ノ 中× 中 為 丰 | 五 〇 十 七 七 | 八 七 八

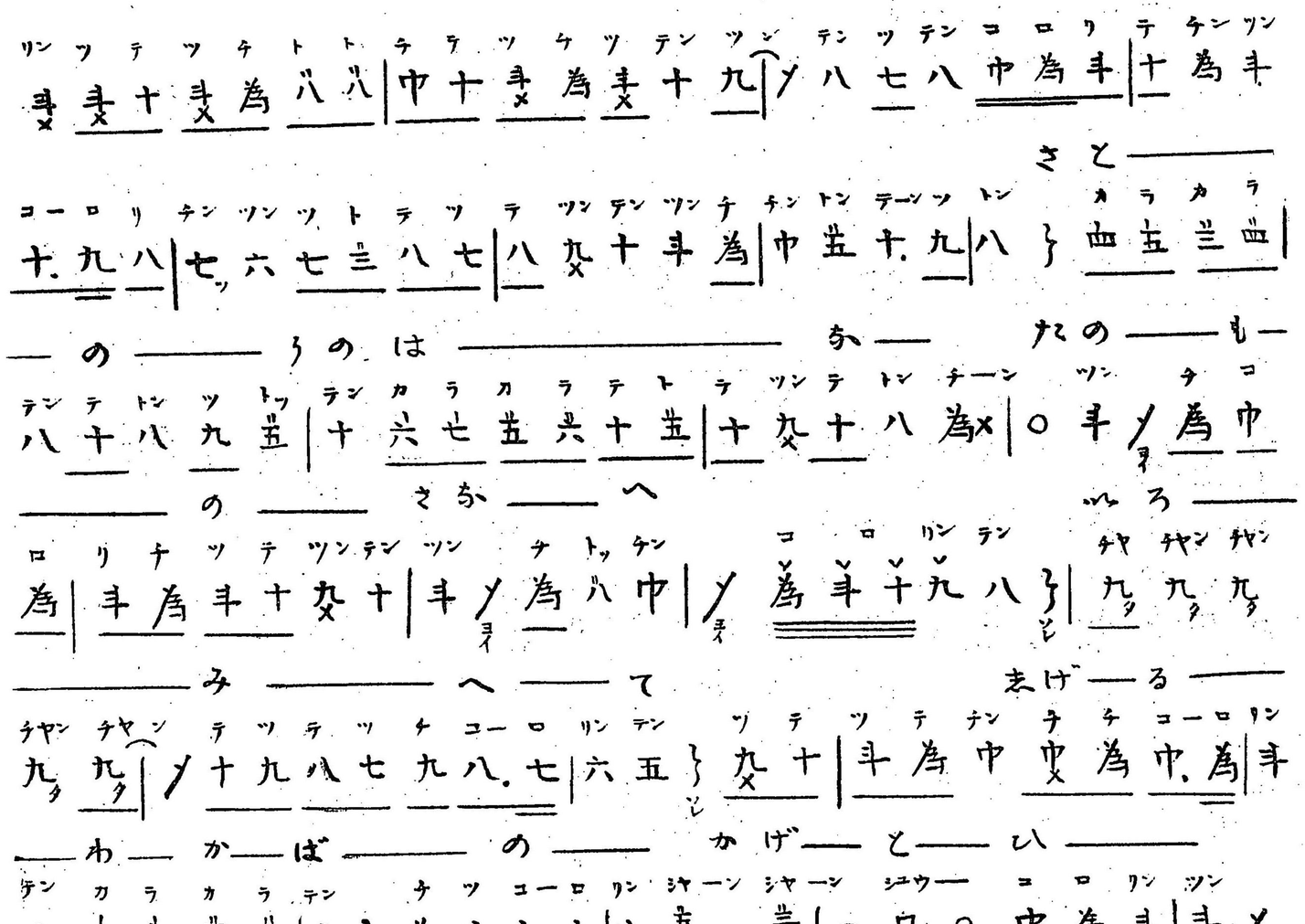
ツン テン チ ツ テン ツン テン ツ テ ツ ト テ チ チ チ チ コ ロ リン テ ツン

九× 十 | ノ 為 丰 十 九 八 | ノ 七 八 九× 五 十 為 中 | 中× 為 中 為 丰 十 九× | ノ

テン ツ チン シヤン ト チ ト チ チ チン ツン チ コ ロ コ ロ リン シヤ シヤ コーロ リン サアーラ

十 丰× 為 八合中 | 九 中× 八 中 中× 為 丰 | ノ 為 中 為 丰 十 九× | ウ ウ 十 九 八 ル |

四九


さと
の
う
は
か
た
も
の
へ
ふ
ろ
み
へ
て
あげる
わ
か
ば
の
かげ
と
い

ゆけ―― ば―まだ― 汎――

中ヨリ九迄連

はつ―――― 収――――

やま は―― と―― と――汎―す ひと―― お――

―――― 忘―― ひ――――

以下斗及ビ六ハ絃半音上

リン テン ツン テ ツン テ ツ テン ツン テン ツン テ ツ テ ツ テ ツ テ ツン コーロ リン

七 七 九 八 九 十 九 八 六 五 六 十 九 八 七 八 九 十 斗 巾 為 斗

ゲテ盤渉(ロ)トナス　え　お　の　な　ぶ　星

コーロ リン ト トン ツ ツ ト ツ ト ラ ツン テン ツ ツ ル ツ ト テン チ ツ テ

八 七 六 六 六 斗 斗 六 斗 五 十 九 十 斗 斗 斗 斗 五 十 為 斗 十

は　わ　す　ら　れ　て

ツ ルン テ ツン シャ チ コ ロ コ ロ リン チ ト ン テン ツ テン ツ ト ッ テン シャン

九 九 十 斗 巾 為 巾 為 斗 十 九 十 三 八 七 八 十 六 斗 巻八

れ　へ　づ　と　に　かた　ら　ば

シャ シャ コーロ リン カ ラ カ ラ テ ツン テン テ ツン ツン ツ テ コ ロ コ ロ リン

五二 四五 四 八 七 六 四 五 三 四 八 七 八 十 九 九 十 斗 巾 為 斗 十 九

や　合

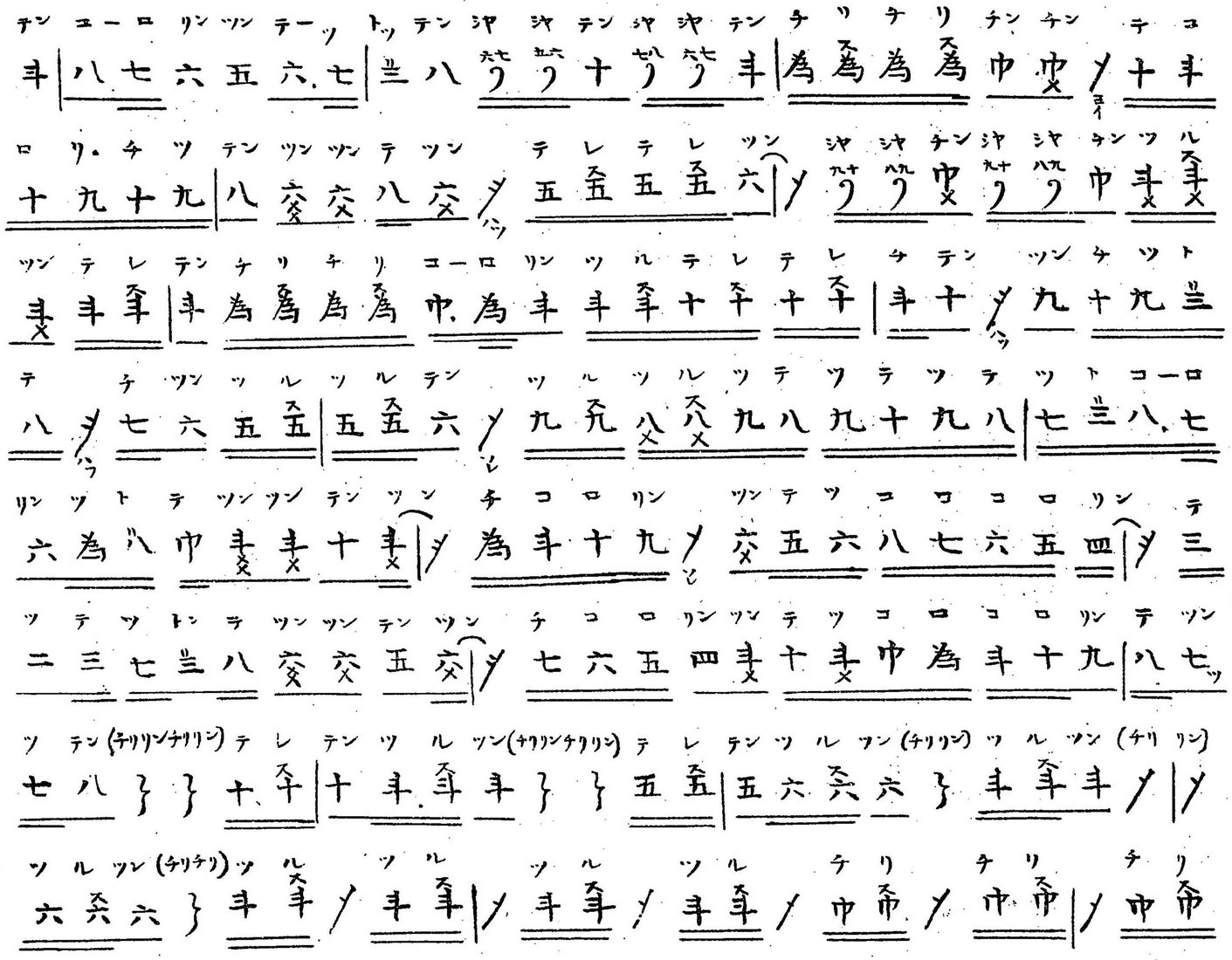
テン シャ シャ チン チ リ チ チン ツ テ レ ツ テン ツ テ ツン チ コ ロ コ ロ リ テン ツン

八 九 九 巾 為 為 巾 為 斗 十 十 斗 十 九 十 斗 為 巾 為 斗 十 九 十 九

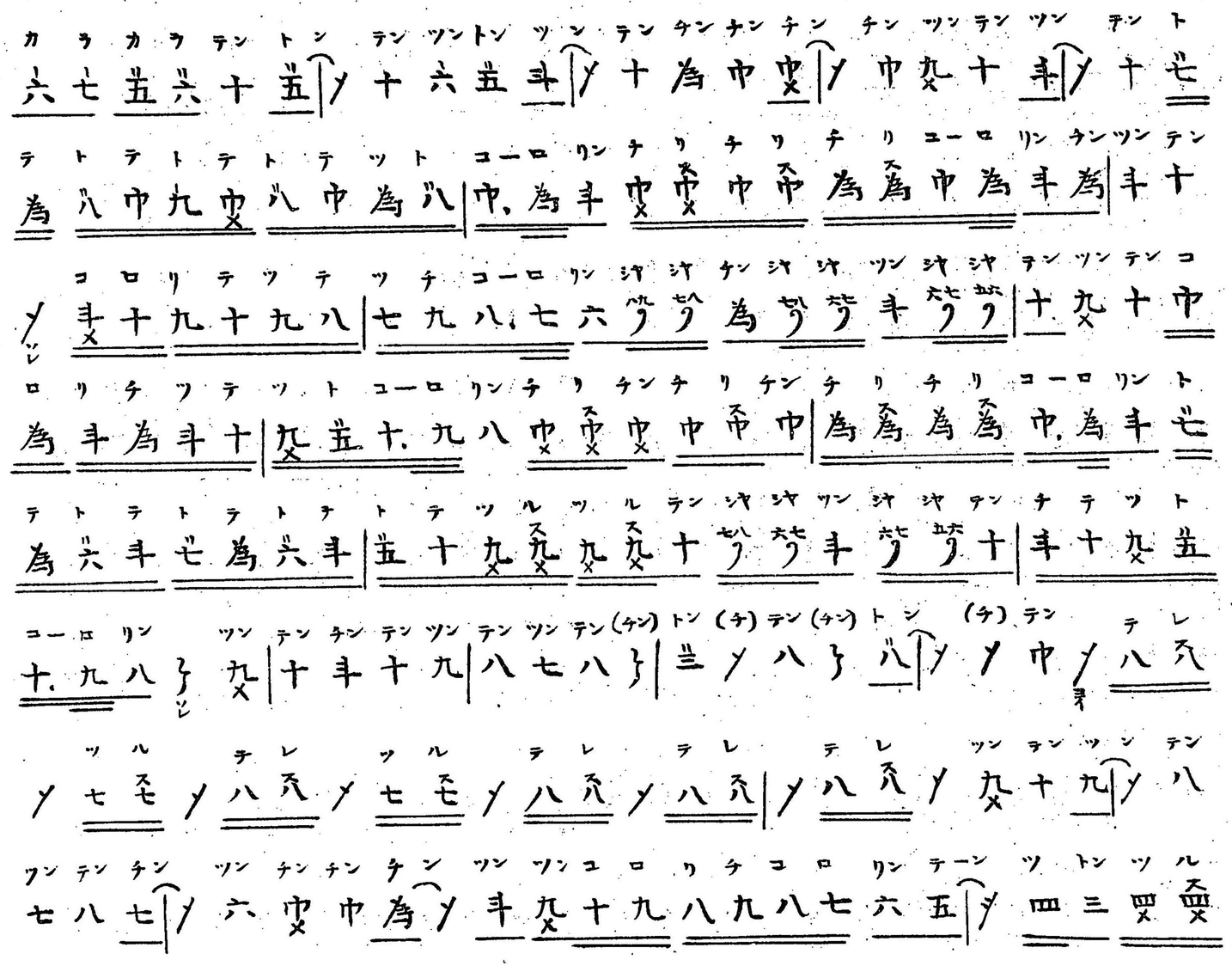
最モ緩徐ニ

コー ロ リ ツン テン ツン テ ツン テン ツ ト コ ロ リ テ ト ッ テン シャン 律 コーロ リン ツン

八 七 六 七 八 九 十 九 八 九 八 巾 為 斗 十 六 斗 巻八 巾 為 斗 十



ケリ (ケリケリ) テレ テレ (ケリケリ) テレ テレ (ケリ) テレ (ケリ) テレ ツル ツル
テン テレ テレ テレ (ツル ツル) テレ テレ テレ (ツルツル) テレ テレ (ツル) テレ (ツル) ツル ツル ツル テン
ツレン シャン ツレン シャン シャ シャ コーロ リン ト テン テ ソン コーロ リン テン ツン ツン シャーン
ツ ルス テ ツン テ ツン テン ツン テン チ テン チ ツン テン ツ レ ツ ル テン チ リ
チ リ チ リ ケ リ ツル チ リ ツル ツル テレ ツル ツル チ レ テ レ
ツ ル ツ ル テン 巾ヨリ斗追連 サアーラリン テ ツ テ ツ コーロ リン テン テン ソーン テン ケ リ チ リ チ
リ ケ リ ケ リ ケ リ ケ リ ケ リ ケ リ チ リ ツン チ レ ツ ル ツ ル テ レ
ケ リ フ ル コーロ リン ケン チ ケ チ コーロ リン テーン ツ トン ケ ツン トッ テン

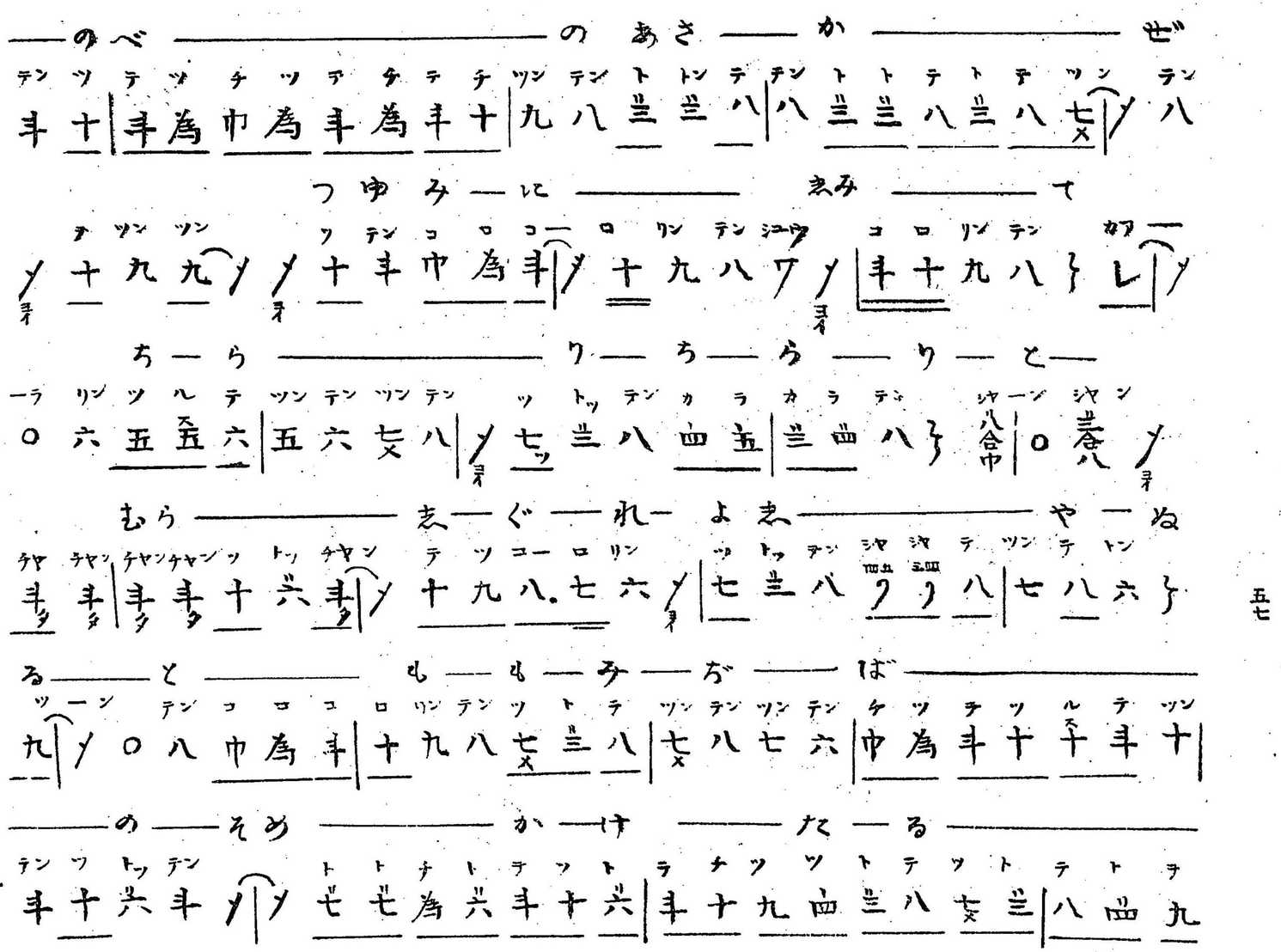


以下中空調子　七ノ絃一音下グ

六ノ絃半音上グ　為ノ絃一音下グ　斗ノ絃半音上グ

ば——れろ——つ——　　ゐの　ゐく——も——

さゐ——て　　あゐ——ふ——か——み—


のべ の あさ か ぜ
つゆみ に えみ て
ちら り ち ら り と
むら え ぐ れ よ え や ぬ
る と も も み ぶ ば
の そめ か け た る

を——も——ゑ—ろ—さ

五十六斗七|為六斗七為巾ノ|ノ為三三四三|四五六五四ノ|

斗十九八七九|八十九八七六|十十斗為斗|十為斗十九巾

のべ——の——かよ—ひ——ぢ—

為|斗十六斗六六|ノ斗斗十六斗十|六斗十六斗十六斗|十斗

ひと——め——も——くさ——も——

巾為ノ八|七ノ巾為斗十為斗|ノ十九斗○八|ノ四三八七六

ふ—ゆ——か——れ——て—

ノ|七三八七八巾|為斗十斗為斗十斗|十九八ノ|九五|十九十

をち——ば——ゑぐ—る—

十ノ|為十十九五|十ノ十十九|ノ十八十ノ|為十ノ|十為巾

あ——が——ら——志——の——か——ぜ——　　み　わ

四絃スリ爪　中ヨリ九迄連サアーラリーン

五九

——め　す　み——か——ま——　　け　む——も——

——さ——む——志——　　ふ　る　ゆ——に——　　——

——の——の　ぢ——も——や　ま——志——も　　志

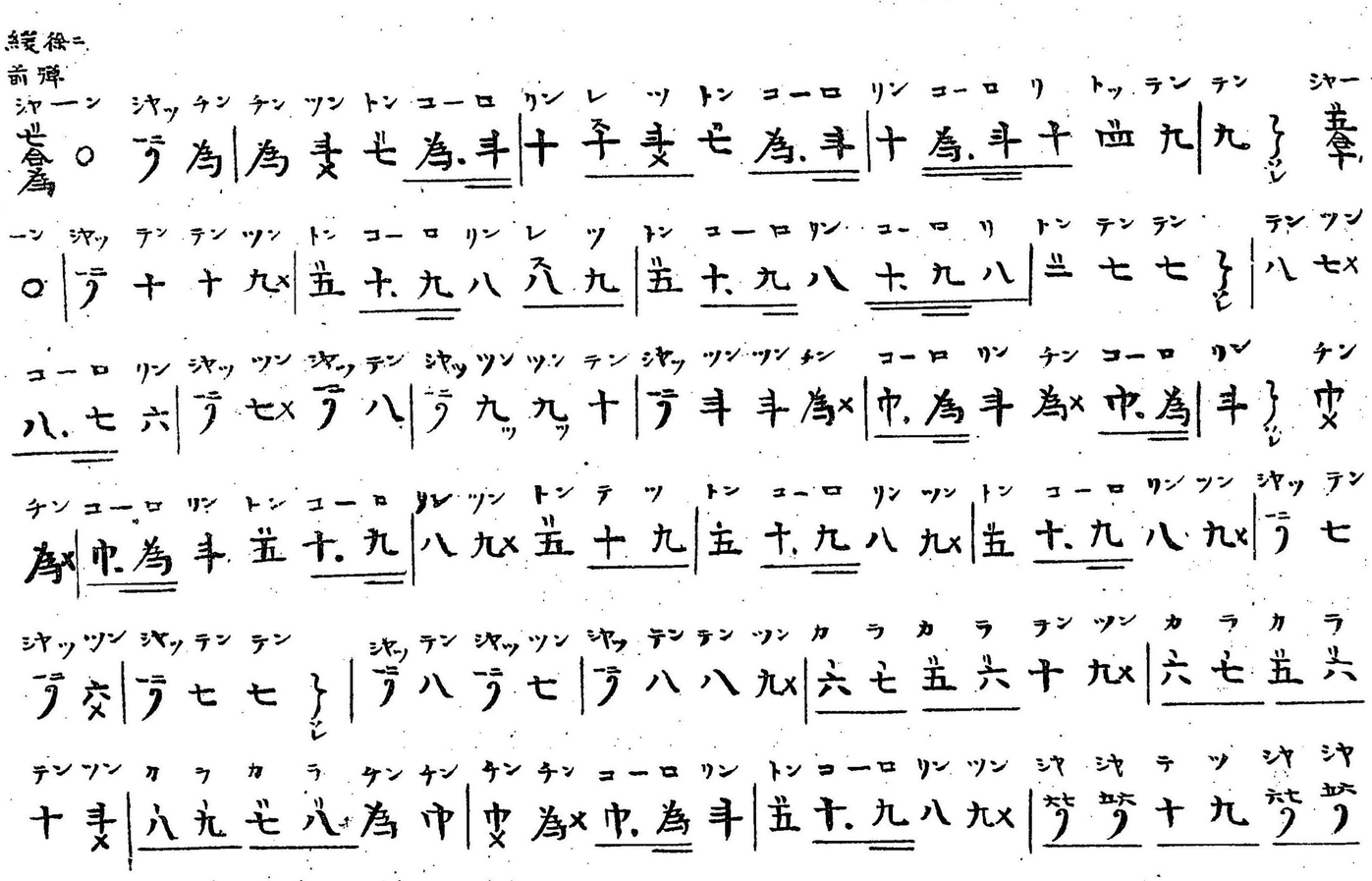
ろ——た——え——に——み　わ——た志——た——る

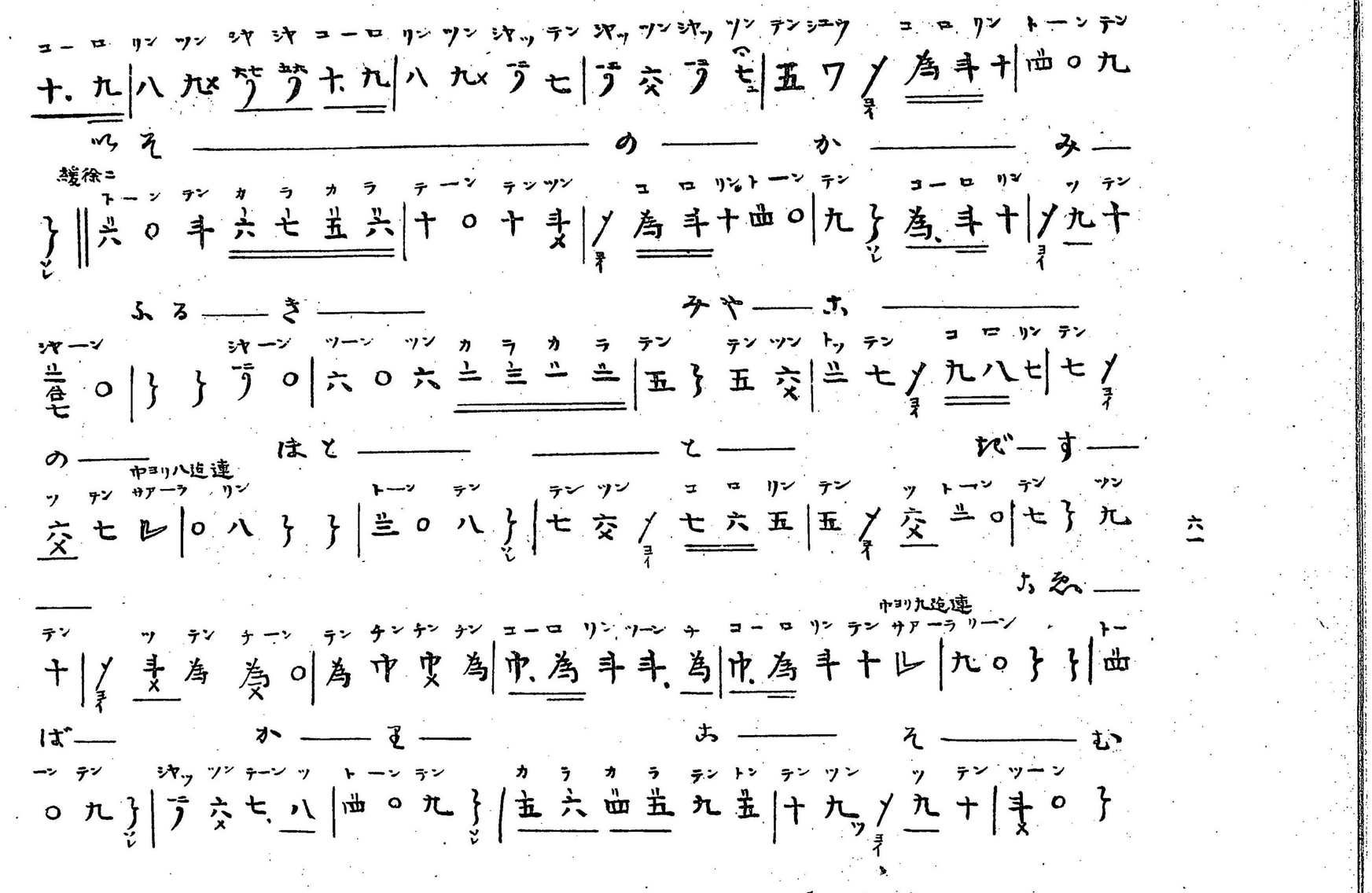
お　も——志——ろ——さ——

夏之曲　古今調子

平調子ノ第弐絃ヲ七ノ絃マテ上ゲテ七ト全音トナシ第四絃ヲ一音上ゲテ双調(ト)トナシ第九絃ヲ一音上ゲテ第四絃ノ裏ノ双調(ト)トナシタル者トス

緩徐ニ
前弾




ふそ の か み
幾徐ニ
ふる き みや ふ
の ほと と ばす
巾ヨリ八迄連
巾ヨリ九迄連
ば か ま あ そ む

か ― ま ― り ― け ― ま ―

ツン テ ツン テ チーン チーン ツーン テン ユーロ リン トーン テン ケンテン

｝ | 斗× ノ 為 斗× 為 | 為× ○ 斗 ○ | 為 巾 為 斗 | 五 ○ 十 ｝ | 斗 九

ふ つ や ― ま ―

ノ 十 九 八 七、 六 五 六× | 合 ○ ｝ ｝ | 合 ○ 七 ○ | 合 七 八 ノ 九 五 十 ノ

― に ― お い ― ま れ ― 人 ―

線徐＝

ユ ロ リン ツーン シャーン テン テン カ ラ カ ラ ツン テ ツーン ツ テン ツン テ ツン

十 九 八 | 九× ○ 合 ｝ ‖ ｝ ｝ 斗 為 | 七 八 六 七 斗 十 九、 九 十 | 斗 ノ 為 斗

― ― や い り ― に ― け ― ん

トン ユーロ リン ツン ユ ロ リン トッ テン テン カ ラ カ ラ ツン ツーテー ユーロ リン テ ツン

五 十 九 | 八 九 ノ 十 九 八 合 七 | 七 合 合 合 合 六 九 十 | 八、 七 六 五 四

― ま ― ふ ― り ― た て ―

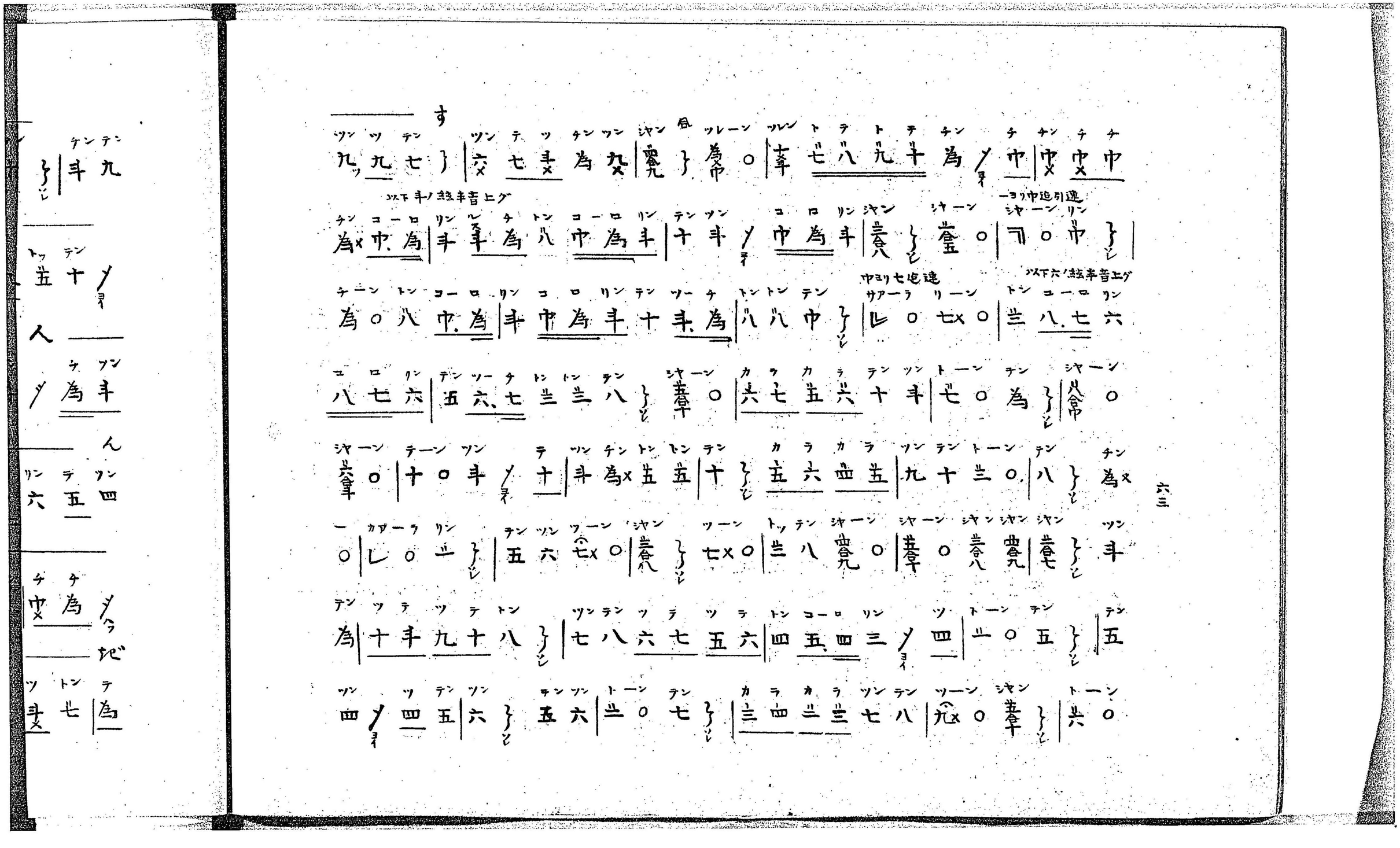
テ ツン ツ テ シャッ ケン シャーン シャン シャーン シャン ト テ ト テ ツン ケン テン テ テ

五 | 交 交 七 合 七× | 合七 ○ ｝ 合七 | 合七 ○ 七合 六 七 八 九 | 斗 ｝ 為 巾 | 巾× 為 ノ

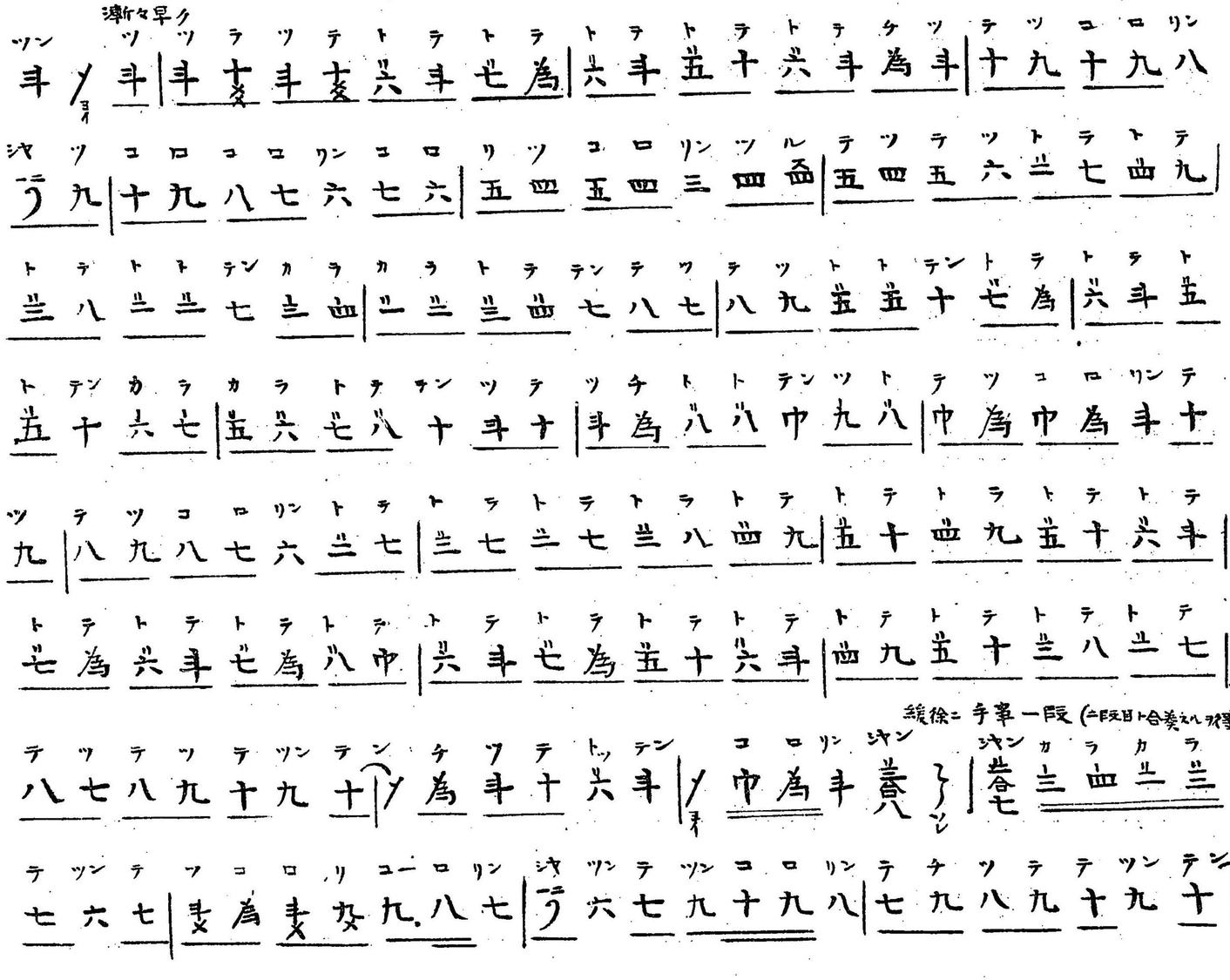
― て ― お く ― は ― と と ― だ

コ ロ リン トン テ ツ ユーロ リン テン カー ラー カ ラ テン トッ テン トッ テン ツ トン テ

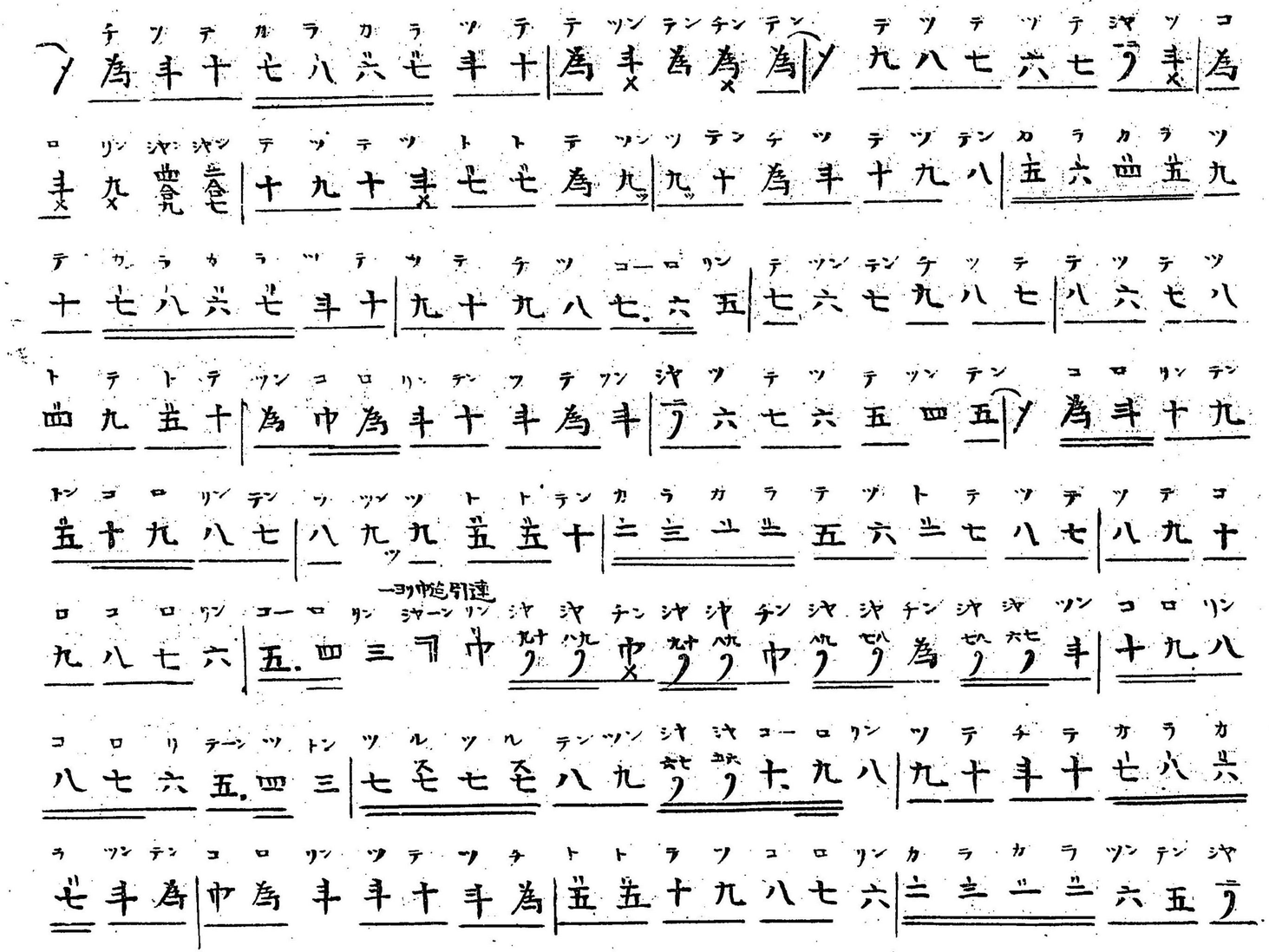
巾 為 斗 五 十 斗× | 為、 斗 十 九 ｝ | 六 七 五 六 十 合 八 | 曲 九 ノ 斗× 七 | 為


以下斗ノ弦半音上グ
ヤヨリ中迫引連
以下六ノ弦半音上グ
ヤヨリ七迫連
六三

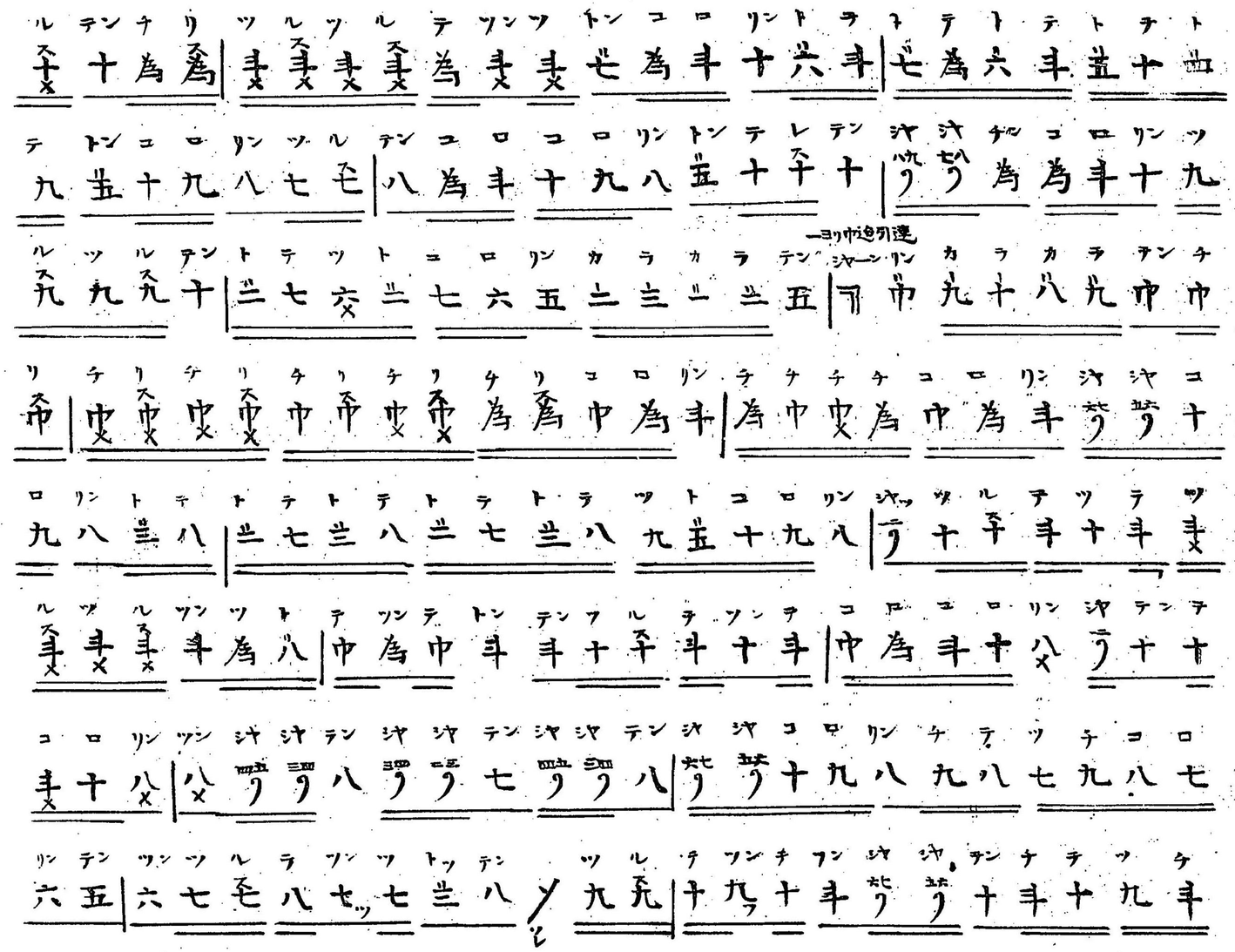
漸々早ク

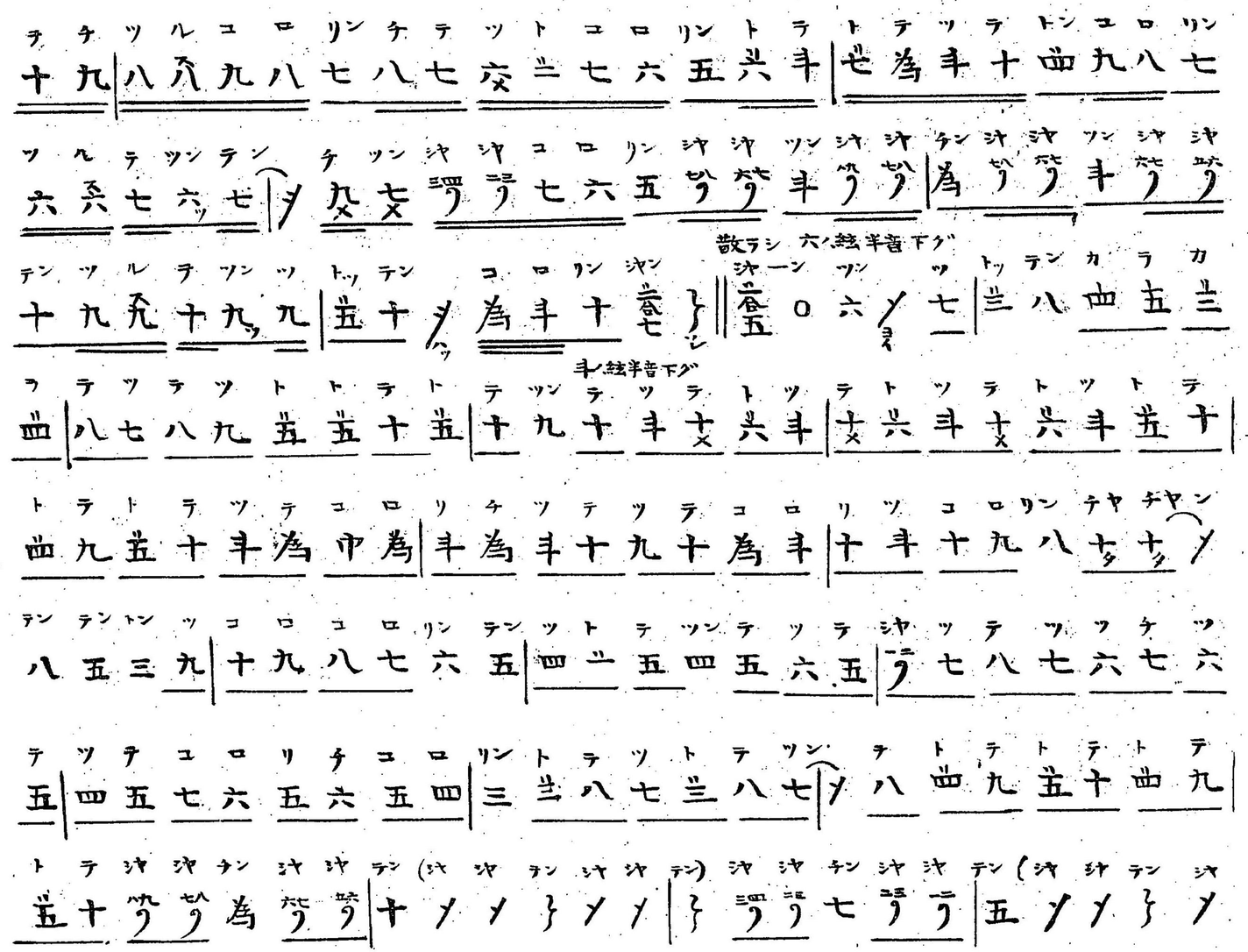


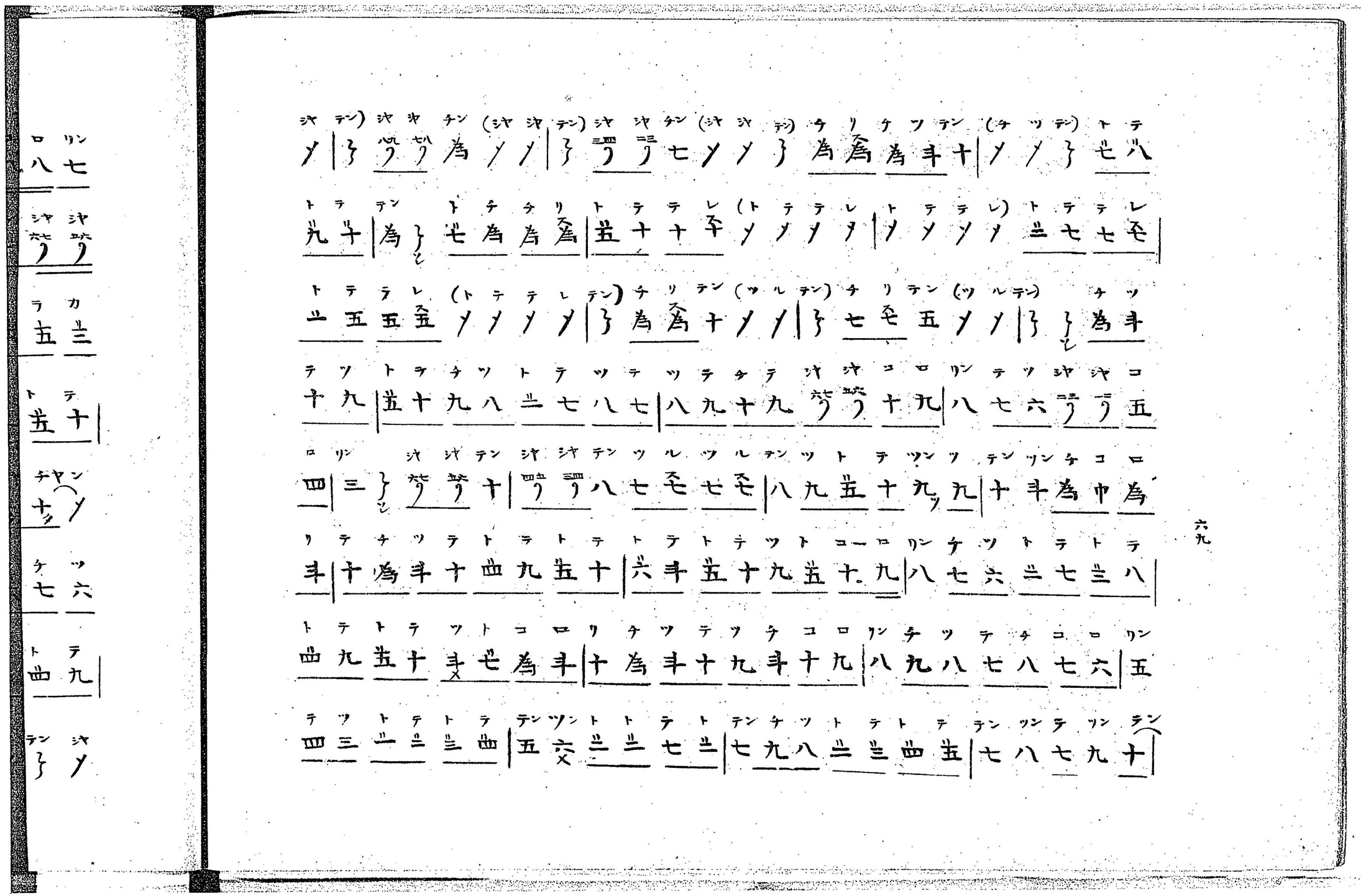
緩徐ニ手事一段（二段目ト合奏スル所）

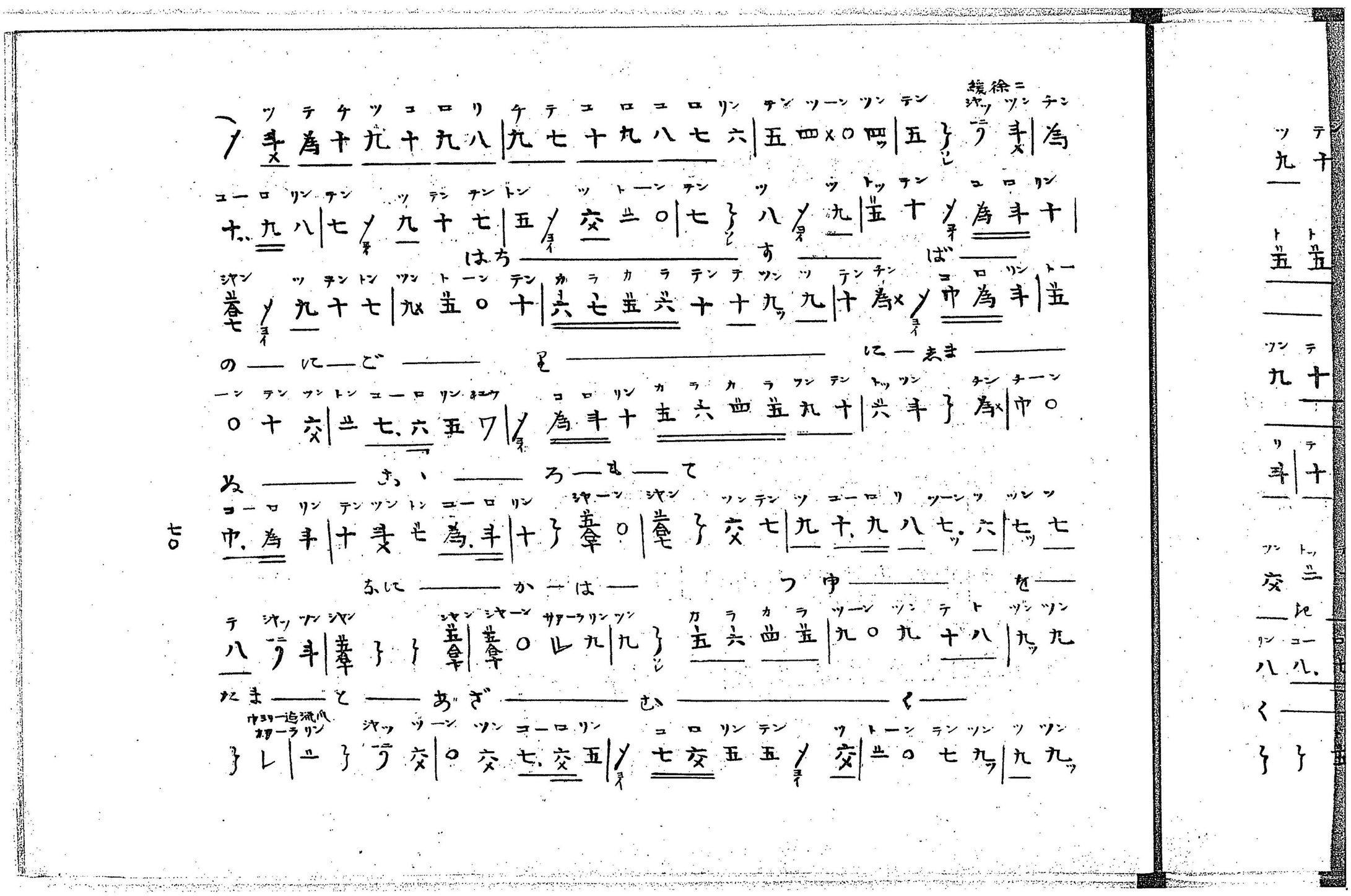

一ヨリ中迄引連

二段 綾徐ニ

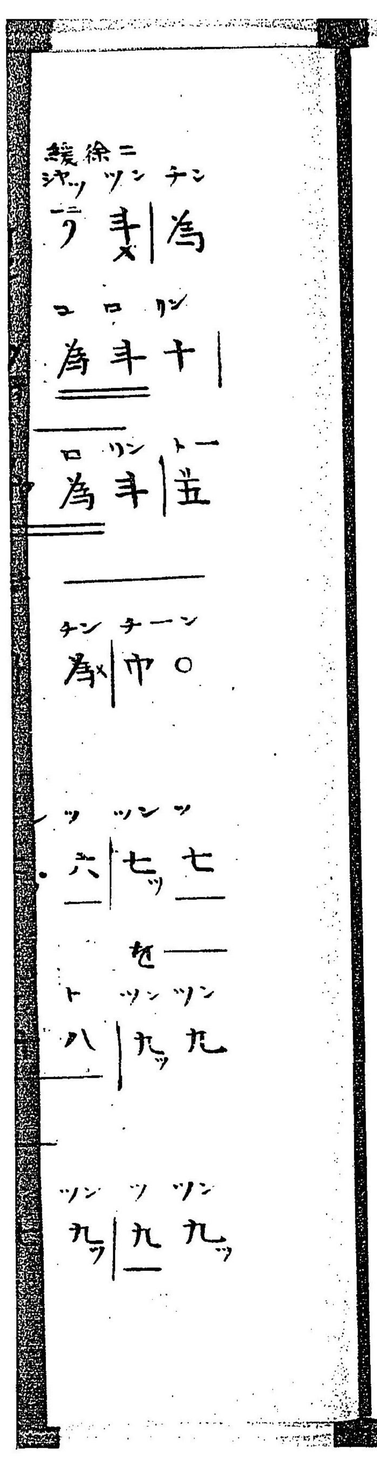

一ヨリ中迄引連

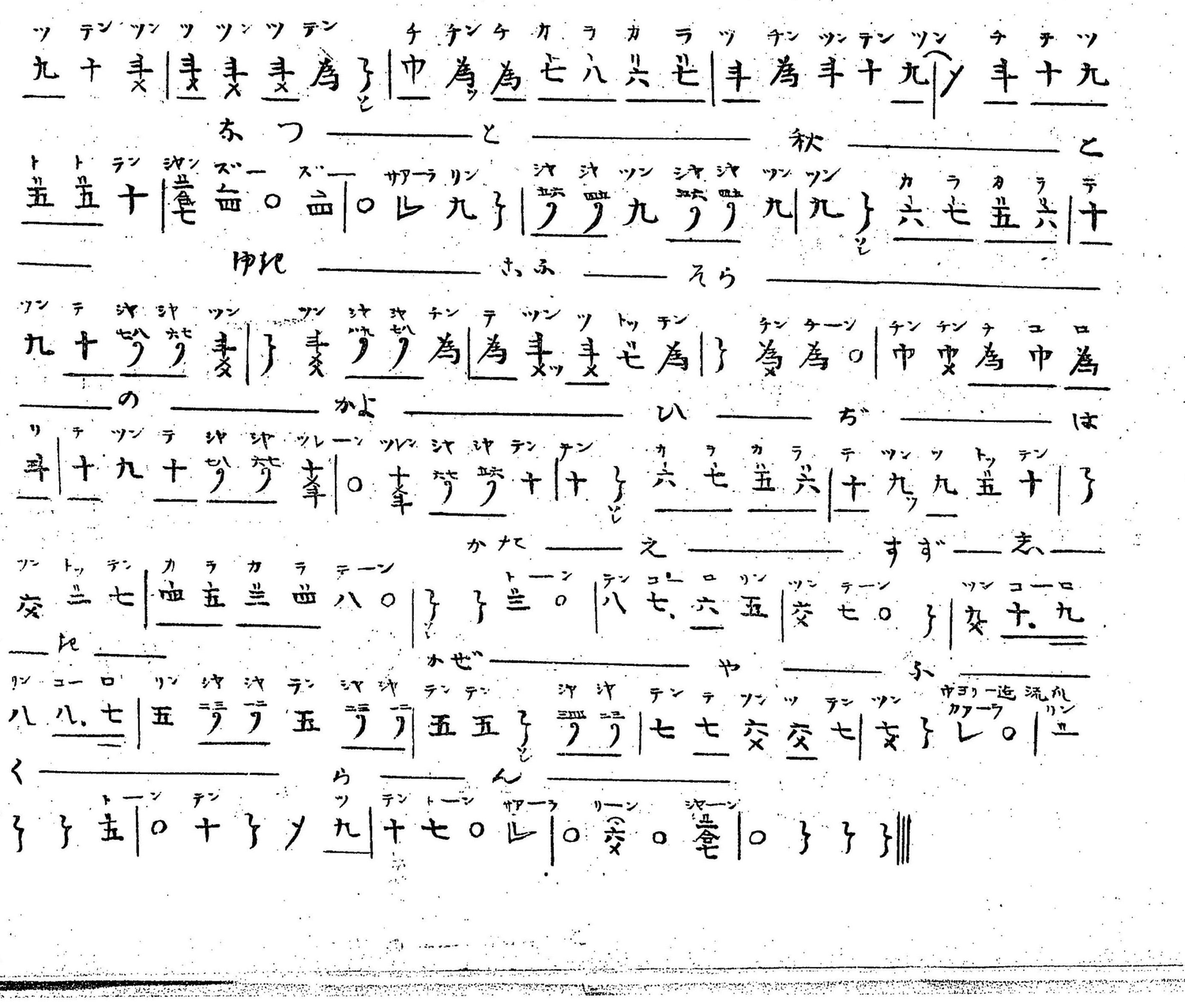

散ラシ 六ノ絃半音下グ
ヰノ絃半音下グ





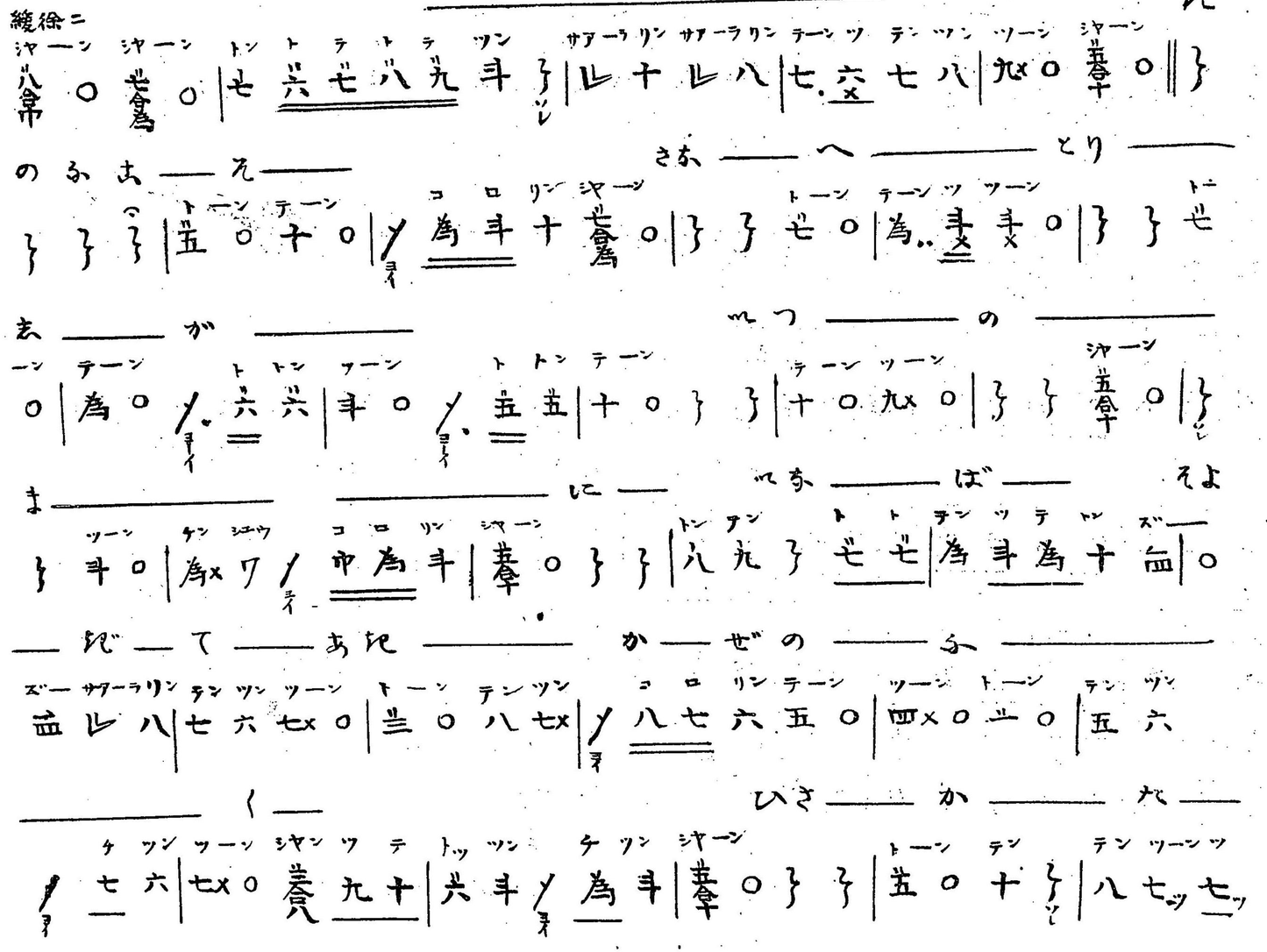
緩徐ニ





秋之曲　古今調子

緩徐ニ



——の——　あま——の——かは——ら

テン ツーン テーン ツン テン　チ ツン チーン ツン　トーン　カヤリバ地獄のカアーラクン　テーン

八 | 九 ○ 十 ○ | 斗 為 ノ 中 斗 | 為× ○ 命 ○ | } } 八 ○ | レ 八 } } | 八 ○

——の——　ひたち——ち——

ツーン ツーン　ツン トーン テン トン　ニ ロ ワン ツーン　チーン　ツーン ツン テン

七 ○ | 六 ○ | } ヒ 七× | 兵 ○ 八 五 | ノ ヲイ 十 九 八 九× ○ | } } 十 ○ | 七× ○ 七ッ 八 |

も——ま——　ひたち——た——り——あ——

チ ツン トーン テン チ ツン　ツーン テン チ ツーン　ツン ツン　ツーン

ノ 為 斗 五 ○ | 十 中 斗ヒ | } } 斗× ○ | 八 ノ ヨイ 十 斗× ○ | } 斗× 斗ヒ } | 斗× ○

ば——　——かぢ——か——く——ち——

テン ツン　テン ツン トッ テン　ツン テーン ツン テン　コー ロ リーン　ツン シャウ　コ セ リン

} 十 | 八× | ヒ } 十 八 | 兵 七 } 交 | 七 ○ 九 十 | 八 七 六 ○ | 六 ワ ノ ヨイ 中 為 斗 |

——て——よ——

トーン テン　チン ツン　ッ テン　トン　ツン テン　トーン　チン ツン　トッ テン　コ ロ リン　シャン

五 ○ 十 } | 斗 九 ノ ヨイ 九 十 | 八 ヒ } 九 十 | 八 ○ 七 交 | 兵 七 ノ ヨイ 十 九 八 | 合五

月み——れ——ば——ちぢ——に——お——こ——そ——

デン トン　コ ロ リン　テン ツン テン　ツ チ　コー ロ リン ツン　シャーン　シャーン　テーン　ツ テン

} 五 三 | 五 四 三 三 四 五 六 七 | 八 七 六 七× } | 合八 ○ 合七 ○ | 七 交 交 七

七

ト七

そよ ○

ッ七ッ